

小 牧 野 遺 跡

発掘調査報告書

平成10年度

青 森 市 教 育 委 員 会

口絵



道路状遺構 (E W)



環状列石と現在の道路 (S N)

序

寛永元年（1624年）の開港以来、本市は港とともに栄え、現在では人口約30万人を抱える中核都市へと発展してきました。この背景には、私たちの遠い祖先が守り続けてきた陸奥湾や周囲を取り囲む八甲田の山々などの豊かな自然環境やその中で育まれた多様な生態系などの恩恵によるものと認識しております。

青森市には、国内最大級の集落を形成していた三内丸山遺跡や、特異な配石による環状列石を主体とする小牧野遺跡などの遺跡が数多く所在しております。こうした貴重な文化遺産を守り、次代に伝えるため、保護・保存に努める一方、歴史観の醸成を図ることも重要ではないかと考えております。

青森市教育委員会では、平成2年度から小牧野遺跡の発掘調査に取り組んできており、今年度は、本遺跡の性格の解明と、史跡公園として整備の早期実現を目標に、遺跡の範囲の把握を中心に調査を実施いたしました。本書は、その調査の成果をまとめた報告書であります。

ここに本書を刊行することができましたのは、文化庁・県教育庁文化課並びに小牧野遺跡発掘調査会委員の方々をはじめ、関係各機関・各位のご指導、さらには地元町会であります野沢町会並びに土地所有者各位のご協力によるものと深く感謝の意を表する次第であります。

平成11年3月

青森市教育委員会

教 育 長 池 田 敬

例 言

1. 本書は、平成10年度に発掘調査を実施した青森市大字野沢字小牧野に所在する小牧野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成2年度から継続して、国ならびに県の補助金交付を受けて行っており、本年度は9年次にあたる。初年次～6年次、7年次、8年次を収録した報告書（青森市教育委員会 1996、1997b、1998）はすでに刊行しており、本書は4冊目にあたる。
3. 本報告書の主な執筆ならびに編集は児玉大成が担当したが、第 3 章第3節については、伊東 信氏（深浦町教育委員会）が担当し、第 4 章については奈良教育大学三辻利一氏に執筆を依頼した。
4. 本報告書の土層の注記については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1993）に準拠した。
5. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
6. 石質の鑑定にあたっては、青森県総合学校教育センター指導主事工藤一彌氏に依頼した。
7. 出土遺物および記録図面ならびに写真関係資料は、現在、青森市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査の実施にあたっては、調査区地権者および野沢町会の多くの方々にご協力をいただき、また、発掘調査ならびに本報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）

文化庁・青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・函館市教育委員会・地元各町会・青本 誠・五十嵐一治・市川金丸・井上雅孝・岩越宏典・上野茂樹・上野隆博・太田原潤・小笠原雅行・岡田康博・岡村道雄・奥山一絵・落合治彦・河原純之・木村 高・木村真明・桐生正一・工藤 大・工藤由美子・栗村知弘・小林 克・小山修三・斎藤 正・櫻田 隆・佐々木雅裕・笹森一郎・佐藤智生・佐藤智雄・佐野 隆・十菱駿武・鈴木 徹・千田茂雄・相馬信吉・大工原豊・高沢周示・田中寿明・高田和徳・角田隆志・手塚新太・富樫泰時・永井 治・中嶋友文・永嶋 豊・中村 大・成田滋彦・西田正規・野村 崇・秦光次郎・畠山 昇・林 謙作・平山明寿・福田友之・福田裕二・藤井安正・古屋敷則雄・松谷泰英・三浦圭介・三浦孝一・三宅徹也・武藤祐浩・宮 宏明・諸戸靖史（順不同・敬称略）

凡 例

本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーンパターンなどは以下のとおりである。

1. 本文・図中・表中で使用したアルファベット、略称

P...土器、S...石器、LB...ロームブロック、B-Tm...白頭山苦小牧火山灰、To-a...十和田 a 火山灰

第 号 竪穴式住居跡... 住

第 号 土坑... 土

第 号 溝状遺構... 土

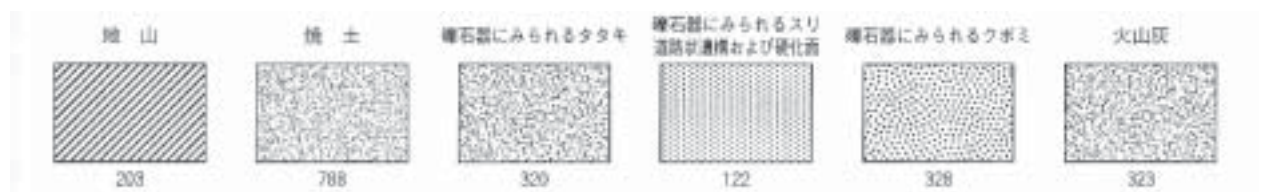
第 号 ピット... Pit-

焼土遺構... 焼

道路状遺構... 道 同左の枝番号... R-

硬化面... 硬

2. 図中で使用したスクリーンパターン (LETRASET JAPAN)



3. 土器実測の表現方法



4. 土器の分類

- 第 群 土器 (縄文時代前期に属する土器)
- 第 群 土器 (縄文時代中期に属する土器)
- 第 群 土器 (縄文時代後期に属する土器)
- 第 群 土器 (縄文時代晩期に属する土器)
- 第 群 土器 (弥生・続縄文時代に属する土器)
- 第 群 土器 (平安時代に属する土器)

5. 土器に施される文様の名称

縄文原体に関する用語については、『日本先史土器の縄文』(山内清男 1969)に準拠する。

第 群 土器に関する用語については、『小牧野遺跡発掘調査報告書』(青森市教育委員会 1998)に準拠する。

目 次

序
例言
凡例
目次

第 章	遺跡の概要	
	第 1 節 調査に至る経過.....	1
	第 2 節 遺跡の環境.....	1
第 章	調査の概要	
	第 1 節 調査要項.....	5
	第 2 節 調査方法.....	6
	第 3 節 調査経過.....	7
第 章	発掘調査区の概要.....	8
第 章	検出遺構と出土遺物	
	第 1 節 縄文時代の遺構と遺物.....	15
	1. 検出遺構	15
	(1) 竪穴式住居跡と関連施設.....	15
	(2) 土坑.....	17
	(3) 遺物集中ブロック.....	19
	2. 出土遺物	26
	(1) 土器.....	26
	(2) 石器.....	36
	(3) 土製品.....	48
	(4) 石製品.....	48
	第 2 節 弥生時代・続縄文時代の遺物.....	54
	第 3 節 平安時代の遺構と遺物.....	55
	1. 竪穴式住居跡.....	55
	2. 小結.....	59
	第 4 節 縄文時代～近現代に相当する道路状遺構.....	62
	1. 各調査区における道路状遺構の様相.....	62
	2. その他の土壌硬化面.....	64
第 章	小牧野遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析.....	68
第 章	分析と考察	
	第 1 節 遺跡数と住居跡数からみた環状列石構築期の社会的様相.....	70
	第 2 節 環状列石の重量分布について.....	80
	第 3 節 道路状遺構について.....	89
	第 4 節 遺跡の範囲の把握について.....	96
	まとめ.....	97
	引用・参考文献	
	写真図版	



本図は、青森市役所発行の「青森市管内図（1：50,000）」を部分的に複写したものである。

第1図 小牧野遺跡位置図

第 章 遺跡の概要

第 1 節 調査に至る経過

小牧野遺跡は、青森市大字野沢字小牧野に所在し、縄文時代後期前葉の十腰内式土器期に大規模な土地造成と特異な配石によって構築された環状列石を主体とする遺跡である。

本遺跡は、昭和 60 年に青森市教育委員会が高田村史編さん事業の一環として発掘調査を実施しており、この際、縄文時代後期前葉の土器・石器等が段ボール箱で約 2 箱分の遺物が出土している。環状列石は、平成元年に青森山田高等学校により発掘調査が実施され（葛西・高橋 1990）、列石の西側約半分を検出した。平成 2 年度以降、青森市教育委員会は「小牧野遺跡発掘調査会」を組織し、環状列石の解明および史跡公園の実現のため、継続して国ならびに県の補助金交付を受けて発掘調査を実施してきた（青森市教育委員会 1996・1997b・1998）。平成 2 年度～ 3 年度までは、環状列石の全体像を確認するために調査を実施した。平成 4 年度～ 6 年度は環状列石構築期の居住区域及び遺構配置を確認するため、配石周辺部の調査を実施した。また、平成 6 年度に小牧野遺跡を「生きた歴史学習体験の場」として整備活用するため、「小牧野遺跡整備基本構想策定委員会」を組織した。さらに、平成 7 年 3 月には当初からの目標であった国史跡の指定を受けることができ、史跡公園早期実現のため、史跡周辺の公有化なども進めている。このため、平成 7 年度からは、史跡公園として整備していくうえで、遺跡の範囲を確定することが急務であると考え、遺跡範囲の把握を中心に調査を実施してきた。本年度も小牧野遺跡の範囲を把握することを目的とし、昨年度までに範囲を推定した列石西南側を除く、北東側における範囲を対象として発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 遺跡の環境

青森市は、市街地を中心として青森平野が東西約 10km、南北約 5km のほぼ直角三角形を呈して広がり、北は陸奥湾に面し南～東は八甲田山に連なる火山性台地が取り囲んでいる。本市は、明治 31 年（1898 年）4 月 1 日に市制を施行して以来、今年度で 100 年目にあたる。この間、青森市は人口約 28,000 人から約 295,000 人に、行政区域は 5.89km² から 692.23km² へと大きく発展してきた（青森市 1997）。

本遺跡は、平野の南東部に広がる火山性台地の北端、平野部に対し舌状に突き出した標高 140m～150m 付近の台地上に立地し、北流する荒川の中流左岸にあたる。この荒川は、昭和の初め頃まで鮭が遡上した魚影の濃い川である。また、遺跡の周囲には山栗や胡桃の木も多く茂っており、狩猟採集経済を前提とした食糧確保のうえでは立地条件の優れた場所でもある。さらに、現時点で湧水 2 地点を確認しており、水場の確保にも有利な立地である（写真 8）。

現在、遺跡の周辺は、環状列石の西側に畑地が広がり、北・東・南側には、40 年前頃に植林されたスギなどの樹木に囲まれている。遺跡付近からは、北側に市街地・青森平野並びに陸奥湾、東に雲谷峠を見渡すことができ、西側にそびえる青森空港の誘導灯と植林された樹木を除けば、縄文時代の原風景を彷彿させる景観をイメージすることができる。

今年度調査した本遺跡における基本的な堆積層は、開始年度である平成 2 年度から 8 年度に実施した調査区とほぼ同じ様相を呈するものであり、第 1 層は、掘削面を除くと、ほぼ均質的に広がることを確認した。第 2 層は、これまで調査した凹地や谷地のほとんどの堆積することを確認し、深

いところでは下位に第 層の堆積を認めることもできる。第 層は、第 層上面の凹凸の具合によって、概念的には沈殿するような状態で確認されることが多い。

各堆積層の概要を以下に記す。

第 層：主に黒褐色を呈している。耕作土や盛土を一括した。

第 層：主に黒褐色を呈している。平安時代に相当する遺物を中心に出土している。

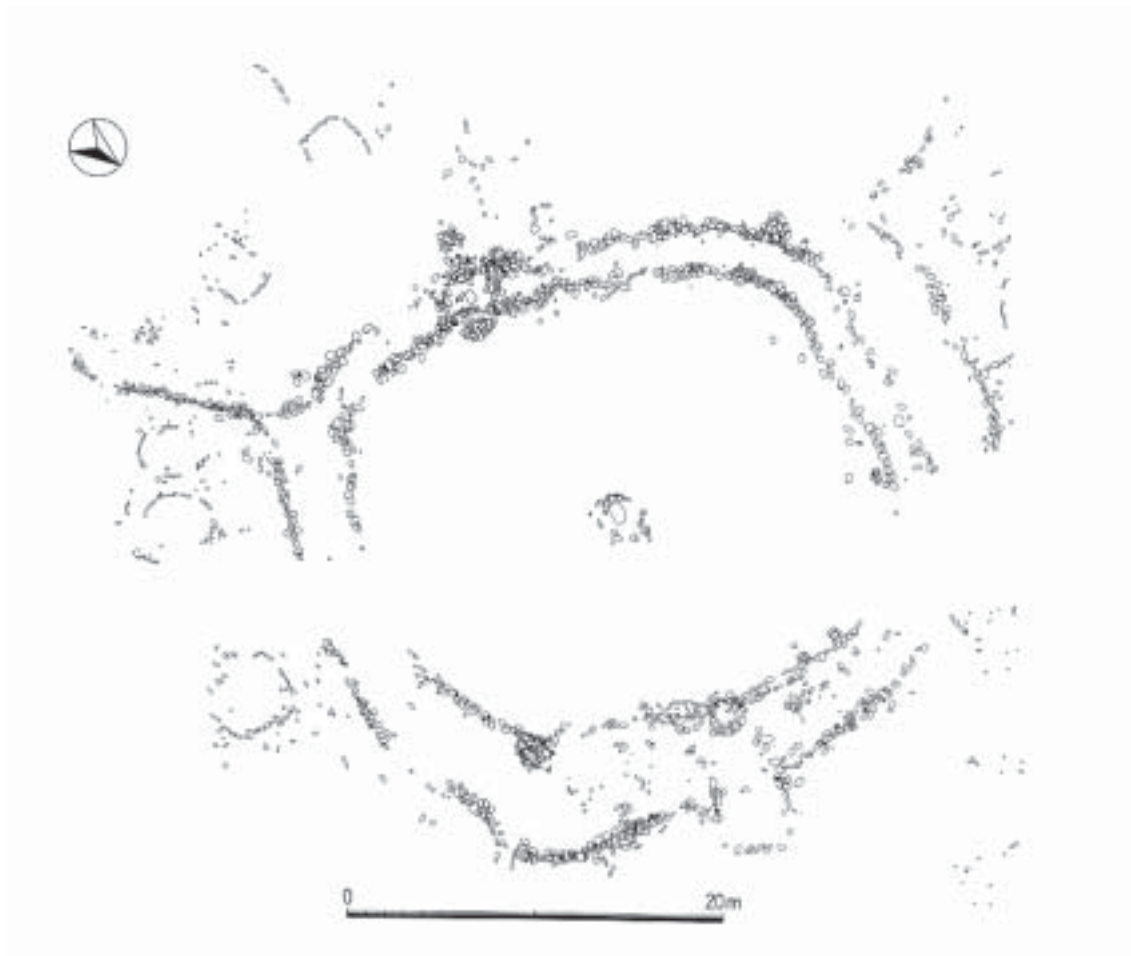
第 層：主に暗褐色を呈している。第 層中や第 層上面には局所的に降下火山灰が堆積しており、十和田 a 火山灰 (To-a) や白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm) と思われるものが観察される。後者のみで観察されることが多いが、前者の下位に後者が観察される場合も稀にみられる。

第 層：主に黒褐色を呈している。縄文時代に相当する遺物を中心に出土している。遺物は、縄文後期が主体を占めるが、その下位から前期～中期の遺物が層位的に確認される場合もある。

第 層：主に黒色を呈している。無遺物層。

第 層：主に暗褐色を呈している。ところどころにロームが含まれており、漸移層として捉えられる。

第 層：主に褐色を呈している。地山ローム層。



第2図 環状列石平面図



第3図 小牧野遺跡地形及び調査区位置図

第 章 調査の概要

第 1 節 調査要項

1. 調査目的

小牧野遺跡は、特殊な形態をもった環状列石を中心とする縄文時代後期前半の遺跡である。本遺跡は、縄文時代の精神生活や社会構造を明らかにするとともに、土地造成や多量の大型石の運搬・設置など大規模な土木工事の実態などを詳しく知る上で極めて貴重な遺跡であることから、平成 7 年 3 月、国史跡となった。今後、遺跡の解明及び保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

本年度は小牧野遺跡の範囲を把握することを目的とし、昨年度に範囲を推定した環状列石の西・南側を除く、北・東側における範囲を対象として発掘調査を実施する。

なお、本事業は、平成 2 年度から継続して国並びに県の補助金交付を受けて実施してきており、本年度は 9 年次にあたる。

2. 遺跡名及び所在地

小牧野（こまきの）遺跡（青森県遺跡台帳番号 01176）
青森市大字野沢字小牧野

3. 事業実施期間 平成 10 年 4 月 1 日～平成 11 年 3 月 31 日
（発掘調査実施期間 平成 10 年 7 月 27 日～11 月 10 日）

4. 調査予定面積 3,000m²

5. 調査指導機関 文化庁文化財保護部記念物課
青森県教育庁文化課

6. 調査体制

遺跡の重要性及び将来の遺跡保存の観点から調査の万全を期するため、調査会を組織して臨むことにする。なお、調査会の組織は調査開始の平成 2 年度から継続しているものである。

調査会の名称は「小牧野遺跡発掘調査会」とする。

調査会組織

調査会長	大高 興	青森市文化財審議会会長	（考古学）
調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	（考古学）
〃	小林 達雄	國學院大学教授	（考古学）
調査員	三辻 利一	奈良教育大学教授	（分析化学）
〃	諸戸 靖史	八戸工業大学教授	（土木工学）
〃	葛西 勵	青森短期大学助教授	（考古学）
〃	高橋 潤	青森山田高等学校教諭	（考古学）

調 査 員	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事（地質学）
〃	秋元 信夫	鹿角市教育委員会生涯学習課 文化史跡整備担当主査（考古学）
調査協力員	渡辺 久男	地元野沢町会長
〃	伊東 信	深浦町教育委員会主事補

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長	池 田 敬
生 涯 学 習 課	齋 藤 勝
社 会 教 育 課	間 山 義 弘
埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫
室 長 補 佐	福 士 敦
埋 蔵 文 化 財 係 長	石 岡 義 文
主 事	田 澤 淳 逸
〃	小 野 貴 之
〃	木 村 淳 一
〃	児 玉 大 成（調査担当）
〃	沼宮内 陽一郎
〃	設 楽 政 健

第2節 調査方法

調査区の設定にあたっては、調査開始年度である平成2年度から8年度まで4×4mを1単位としたグリッドを設定し調査を進めてきた。しかし、平成7年度から、遺跡の範囲を把握することを目的に調査を実施してきた結果、徐々に対象範囲が広くなり、原野および山林が調査実施の対象となったため、平成9年度から地形を考慮に入れた上で任意にトレンチを設定することとなった。また、調査の状況に応じて適宜トレンチを設置した。発掘調査区は、未調査区域である環状列石東～北側を中心に設定し、各トレンチの呼称はその設定順にアルファベットを付し、「A～AE」の31カ所を設置した。

遺構は、トレンチごとに各種類の確認順によって番号を付した。精査にあたっては、性格や構築時期、堆積状況の把握に重点を置き、竪穴式住居跡や土坑は、基本的に2分法ないし4分法にして掘り下げた。溝状遺構は、適宜観察用ベルトを設けて調査し、道路状遺構や土壌硬化面についてはテストトレンチを設けて調査するとともに、土壌の硬度測定も試みた。それらの確認後、遺跡保存を考慮に入れ土層の観察ができる状態で埋め戻した。

遺物については、遺構内では位置と層位を考慮に入れ、遺構外の場合はトレンチ一括を原則として取り上げたが、遺物が集中する箇所や接合などを確認した場合には、状況に応じて出土地点も記録した。

実測は、遺構については簡易遣り方測量を適用し、縮尺は、20分の1を採用した。

写真撮影については、主にモノクロームとカラーリバーサルフィルムを使用した。被写体は、遺構確認面・土層・半截状況や調査状況、基本層序、遺物出土状況などである。

第3節 調査経過

発掘調査は、平成10年7月27日から11月10日まで実施した。以下、調査日誌から一部を抜粋して述べることとする。

- 7月27日 調査開始日。発掘機材を一部運搬し、発掘調査区周辺の木草根等の除去作業を行った。
- 7月31日 発掘作業員を任用し、作業内容を説明した。その後、Aトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 8月6日 Bトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 8月17日 CトレンチおよびDトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 8月18日 この日より、設定した調査区のトラバース測量を随時行う。
- 8月19日 Dトレンチの第1層上面より硬化面を検出した。精査を開始。
- 8月24日 Eトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 8月25日 Fトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。Eトレンチよりフラスコ状ピットを検出、精査を開始。
- 9月2日 G、Hトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。Fトレンチより3基の土坑を検出し、精査を開始。
- 9月8日 Fトレンチより竪穴式住居跡および溝状遺構等を検出し、精査を開始。
- 9月9日 Iトレンチ、Jトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 9月10日 Kトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 9月11日 Lトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 9月14日 Mトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 9月18日 Nトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 9月24日 Oトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 9月30日 Oトレンチより硬化面を検出し、精査を開始。
- 10月2日 小牧野遺跡発掘調査会議を開催。この会議により、調査予定地であった北西側から、Oトレンチ以北への道路状遺構の延長を確認するための調査へと調査の方向を転換することを確認した。
- 10月5日 P、Q、Rトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。また、道路状遺構の硬化面を確認するため作業員数名によるボーリング調査を開始。Rトレンチで道路状遺構を確認。
- 10月7日 S、Tトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。SおよびTトレンチで道路状遺構を確認。
- 10月8日 U、Vトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。Vトレンチで道路状遺構を確認。
- 10月9日 W、X、Yトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。いずれのトレンチで道路状遺構を確認、Uトレンチより竪穴式住居跡を検出し、精査を開始。
- 10月12日 Z、AAトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。AAトレンチで道路状遺構を確認。
- 10月14日 ABトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 10月19日 ACと称した調査区の粗掘りを開始。
- 10月23日 ADトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。ACトレンチより、竪穴式住居跡を検出し、精査を開始。
- 11月4日 AEトレンチと称した調査区の粗掘りを開始。
- 11月10日 発掘調査区の埋め戻しおよび現状の復元を終了した。

第 章 発掘調査区の概要

今年度は、昨年度に引き続き環状列石構築期の遺跡範囲を把握することを目的に発掘調査を実施した。昨年度の調査では、環状列石の西側および南側の範囲について、概ね把握することができた。今回は、環状列石の東側から北側の範囲を対象とし、列石から150mおいた地点から470mまでの計31ヶ所、総面積1,259m²のトレンチを設置した。調査区の設定にあたっては、主に地形を重視して検討したが、調査を開始する当初から礫運搬のルートを確認するため、平成9年度報告で分析した経路1および3の周辺にトレンチを設定した。各トレンチの概要を以下に記述する。

A トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約170m離れた、標高約139mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕12㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第11図6・7）が出土した。

B トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約170m離れた、標高約138mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕6㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕なし

C トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約170m離れた、標高約135～138mの斜面に設置。

〔調査面積〕24㎡

〔検出遺構〕縄文時代後期初頭と思われる土坑1基（第5図）

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第11図8～10）、第 群土器（第11図11～20）が出土した。石器は、不定形石器が3点（第18図20、第19図28、第21図41）、敲磨器類4点（第23図51・55、第24図60・64）が出土した。石製品は三角形岩版3点（第26図26・28・34）、円形岩版（第27図50・52）が出土した。

D トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約160m離れた、標高約136～139mの斜面に設置。

〔調査面積〕72㎡

〔検出遺構〕縄文時代後期初頭と思われる土坑2基（第5図）土壌硬化面1ヶ所（第5図）

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第11図21）、第 群土器（第11図22～41）が出土した。石器は、石筥1点（第17図13）、不定形石器3点（第17図18、第18図21・23）、敲磨器類2点（第22図49、第24図61）が出土した。土製品は、土器片利用土製品3点（第25図6・8・11）、石製品は、三角形岩版5点（第25図14・15、第26図24・35・36）、円形岩版3点（第27図48・49・51）が出土した。

E トレンチ

〔位 置〕列石中心から北北東約155m離れた、標高約130mの緩斜面に設置。

〔調査面積〕28㎡

〔検出遺構〕縄文時代後期初頭の土坑1基、遺物集中ブロック1ヶ所(第5図)。

〔出土遺物〕土器は、第 群土器(第12図42～49)が出土した。石器は、不定形石器が1点(第18図24)、敲磨器類が1点(第22図47)が出土した。土製品は、土器片利用土製品が2点(第25図9・12)出土した。石製品は、三角形岩版2点(第25図16、第26図32)が出土した。

Fトレンチ

〔位置〕列石中心から北北東約150m離れた、標高約135mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕100㎡

〔検出遺構〕縄文時代後期初頭の竪穴式住居跡や溝状遺構等からなる居住施設2棟、土坑3基(第5図)。

〔出土遺物〕土器は、第 群土器(第12図50～52)、第 群土器(第12図53～73、第13図74～97)が出土した。石器は、石鏃4点(第16図1～4)、石槍1点(第16図5)、石匙1点(第16図6)、石篋9点(第16図7～10、第17図11・12・14～16)、不定形石器17点(第17図17・19、第18図22、第19図25・26・29、第20図30～36、第21図37～39・42)、磨製石斧2点(第22図43・45)、敲磨器類10点(第22図48・50、第23図52・53・56・57、第24図58・59・62・63)が出土した。土製品は、土偶1点(第25図1)、鐸形土製品3点(第25図2～4)、土器片利用土製品3点(第25図7・10・13)、石製品は、三角形岩版7点(第25図17・18、第26図25・31・37～39)、円形岩版6点(第27図41～43・45～47)、石刀1点(第27図53)が出土した。

Gトレンチ

〔位置〕列石中心から北北東約160m離れた、標高約134mの沢地の等高線に直交して設置。

〔調査面積〕12㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器(第13図98～106)が出土した。石器は、磨製石斧1点(第22図46)、敲磨器類1点(第23図54)が出土した。土製品は、靴形土製品1点(第25図5)が出土した。石製品は、三角形岩版8点(第25図19～21、第26図22・27・29・30・33)、円形岩版1点(第27図40)が出土した。

Hトレンチ

〔位置〕列石中心から北北東約170m離れた、標高約132mの沢地の等高線に直交して設置。

〔調査面積〕12㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器(第14図107)、第 群土器(第14図108～115)が出土した。石器は、不定形石器2点(第19図27、第21図40)、磨製石斧1点(第22図44)が出土した。石製品は、三角形岩版1点(第26図23)、円形岩版1点(第27図44)が出土した。

Iトレンチ

〔位置〕列石中心から北約240m離れた、標高約129～131mの斜面に設置。

〔調査面積〕24㎡

〔検出遺構〕縄文時代後期初頭と思われる土坑1基(第5図)。

〔出土遺物〕土器は、第 群土器(第14図116)、第 群土器(第14図117・118)が出土した。

Jトレンチ

〔位置〕列石中心から北約190m離れた、標高約136mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕56㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 14 図 119.）第 群土器（第 14 図 120 ~ 122）が出土した。

K トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 250m 離れた、標高約 132m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕56㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器と思われるもの（第 14 図 123）が出土した。

L トレンチ

〔位 置〕列石中心から北北西約 260m 離れた、標高約 133m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕40㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 14 図 124）が出土した。

M トレンチ

〔位 置〕列石中心から北北西約 300m 離れた、標高約 133m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕80㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 14 図 125 ~ 127.）第 群土器（第 14 図 128 ~ 133）が出土した。

N トレンチ

〔位 置〕列石中心から北北西約 320m 離れた、標高約 132m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕80㎡

〔検出遺構〕平安時代～近現代のものと思われる道路状遺構 1 条（第 33 図。）

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 14 図 134 ~ 136）が出土した。

O トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 280m 離れた、標高約 132m の沢地の等高線に直交して設置。

〔調査面積〕48㎡

〔検出遺構〕平安時代の竪穴式住居跡 1 軒（第 29 図）、縄文時代～平安時代および近現代にかけての道路状遺構 8 条（第 33 図）。

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 14 図 137 ~ 139.）第 群土器（第 14 図 140 ~ 143）第 群土器（第 14 図 144・145）が出土した。

P トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 330m 離れた、標高約 130m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕24㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕なし

Q トレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 340m 離れた、標高約 129m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕8㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、縄文時代ではあるが、時期不明のもの（第15図146）が出土した。

Rトレンチ

〔位置〕列石中心から北約350m離れた、標高約128mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕10㎡

〔検出遺構〕平安時代～近現代のものと思われる道路状遺構1条（第33図。）

〔出土遺物〕なし

Sトレンチ

〔位置〕列石中心から北約345m離れた、標高約129mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕9㎡

〔検出遺構〕縄文時代、平安時代～近現代のものと思われる道路状遺構4条（第33図。）

〔出土遺物〕土器は、第群土器（第15図147）が出土した。

Tトレンチ

〔位置〕列石中心から北約290m離れた、標高約132mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕4㎡

〔検出遺構〕平安時代～近現代にかけての道路状遺構3条（第34図。）

〔出土遺物〕なし

Uトレンチ

〔位置〕列石中心から北約360m離れた、標高約126mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕19㎡

〔検出遺構〕平安時代の竪穴式住居跡1軒（第30図。）

〔出土遺物〕土器は、第群土器（第15図148）、第群土器（第28図1～6）が出土した。

Vトレンチ

〔位置〕列石中心から北約370m離れた、標高約125mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕23㎡

〔検出遺構〕縄文時代のものと思われる道路状遺構2条および土壌硬化面2箇所（第34図。）

〔出土遺物〕なし

Wトレンチ

〔位置〕列石中心から北約390m離れた、標高約124mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕6㎡

〔検出遺構〕縄文時代のものと思われる道路状遺構1条、平安時代～近現代のものと思われる道路状遺構1条（第34図。）

〔出土遺物〕なし

Xトレンチ

〔位置〕列石中心から北約395m離れた、標高約123mのほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕12㎡

〔検出遺構〕縄文時代のものと思われる道路状遺構1条（第34図。）

〔出土遺物〕なし

Yトレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 410m 離れた、標高約 122m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕21㎡

〔検出遺構〕平安時代～近現代のものと思われる道路状遺構 1 条（第 34 図。）

〔出土遺物〕なし

Zトレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 380m 離れた、標高約 125m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕7㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 15 図 150 ～ 152）が出土した。

AAトレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 270m 離れた、標高約 133m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕3㎡

〔検出遺構〕縄文時代のものと思われる道路状遺構 1 条、平安時代～近現代のものと思われる道路状遺構 1 条（第 34 図。）

〔出土遺物〕なし

ABトレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 440m 離れた、標高約 124m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕39㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 15 図 153 ～ 154）、第 群土器（第 28 図 7）が出土した。

ACトレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 470m 離れた、標高約 123m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕80㎡

〔検出遺構〕平安時代の竪穴式住居跡 1 軒（第 31 図。）

〔出土遺物〕土器は、第 群土器（第 15 図 155 ～ 156）が出土した。

ADトレンチ

〔位 置〕列石中心から北約 250m 離れた、標高約 133m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕44㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕なし

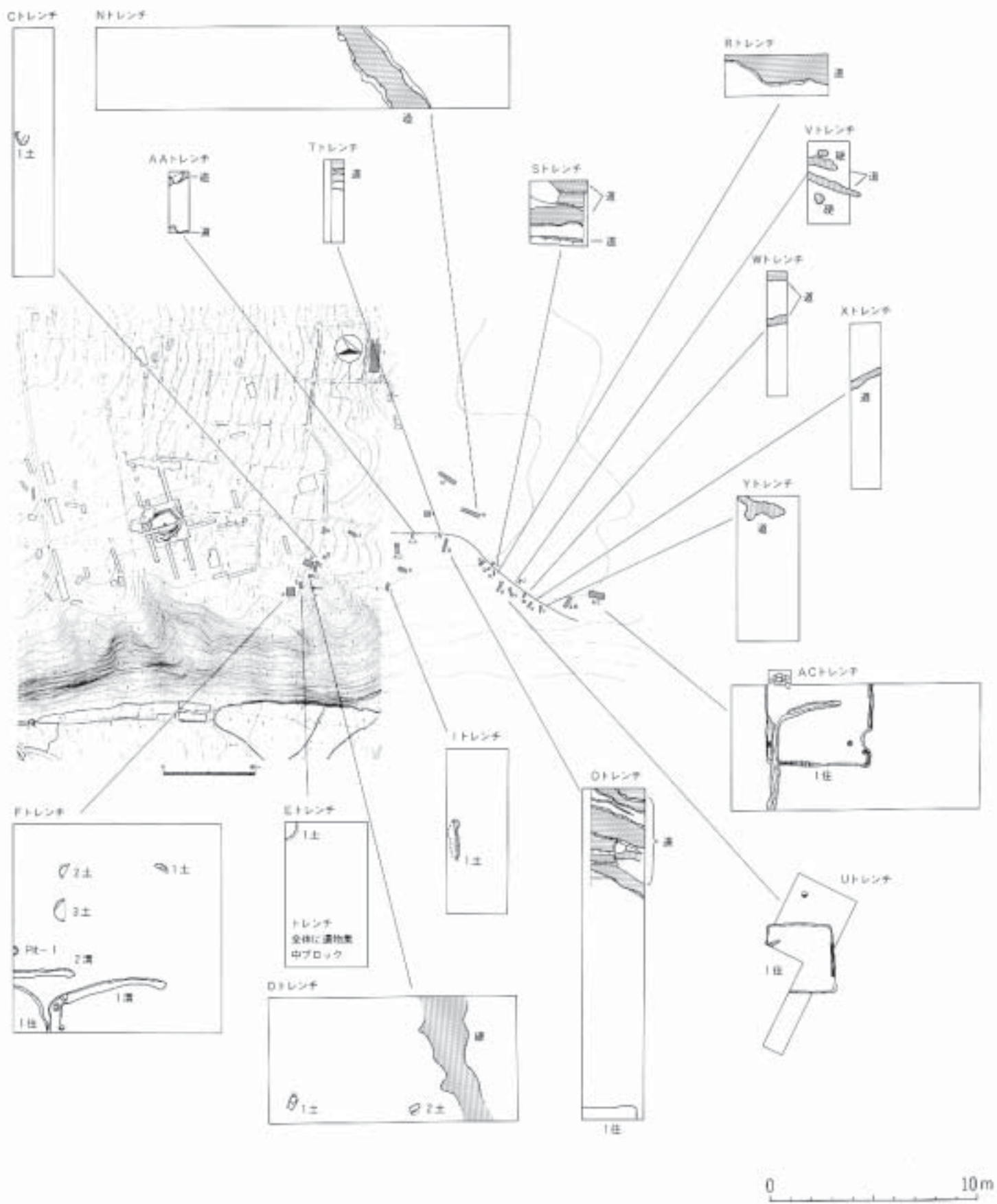
AEトレンチ

〔位 置〕列石中心から北西約 280m 離れた、標高約 138m のほぼ平坦面に設置。

〔調査面積〕300㎡

〔検出遺構〕なし

〔出土遺物〕なし



第4図 遺構配置図

第 章 検出遺構と出土遺物

第 1 節 縄文時代の遺構と遺物

1. 検出遺構

本遺跡では、環状列石構築の時期（縄文時代後期前葉、十腰内 式土器期）に、環状列石、土器棺墓や土坑墓群、貯蔵穴や遺物の捨て場等が地形的に分離して形成され、各施設が遺跡の全体構造の中で有機的に機能していたと考えられる。また、環状列石構築直前の時期には、竪穴式住居跡や遺物の捨て場などが存在していたことを昨年度までの調査で把握している。

今年度は、列石構築期の遺跡範囲を把握するという目的から、列石北側から東側を中心に発掘調査を実施した。結果、列石構築期直前にあたる竪穴式住居跡（1軒）や住居跡に関連するものと考えられる溝状遺構（2条）や、焼土遺構（1基）、小ピット（1基）、また、多様な形態を呈する土坑（8基）、遺物集中ブロック（1ヶ所）を検出した。いずれも列石構築期には属さないものの、それに継続していく過程での当時の社会を考えるうえでは重要である。また、時期の詳細は不明であるが、縄文時代に帰属できる道路状遺構も検出した。この事も、当時の交通路や列石構築に際し礫の運搬方法を考えるうえでは重要である。道路状遺構の記載にあたっては、それ以降の時期のものと同重複し、不明のものも含まれるため別項を設けて後述する（本章第 4 節）。

（1）竪穴式住居跡と関連施設（第 5 図）

今回検出した竪穴式住居跡は、Fトレンチで確認した1軒のみであるが、その周囲には、住居跡と同時性を示すと考えられる溝状遺構や、別の溝状遺構が区画するその空間内に焼土遺構がみられるなど、一体の居住施設としての可能性が想定されるものが存在する。したがって、ここでは住居跡と溝状遺構ならびに焼土遺構を機能的に切り離して考えるのではなく、これらが居住施設に関わるものとして併せて記述する。なお、第1号竪穴式住居跡と第2号溝状遺構、第1号溝状遺構と焼土遺構がそれぞれ組になるものと考えられることから、前者を居住施設A、後者を居住施設Bとする。

居住施設A

第1号竪穴式住居跡

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕全体形は、約3/4が調査区域外へと続くため不明であるが、不整形円形を呈するものと推定される。規模は、3m50cm～4mを計るものと思われる。

〔 壁 〕壁高が約29cmを計り、緩やかに立ち上がる。

〔 床 〕中央がほぼ平坦な床を呈している。壁の西寄りには、局部的に凹凸を呈する掘り方がみられ、中央の床面と水平になるよう貼床状に粘土や炭化粒を含む土壌を充填している。

〔柱 穴〕確認されなかった。

〔 炉 〕壁の北寄りに、直径55cmほどの円形に広がる地床炉を確認。この中からは、クルミ

と思われる炭化物が出土した（写真 22 左下）。

〔堆 積 土〕床面から壁まで完全に埋没するまでは、間層を除くと単一の堆積土で覆われている。本住居と第 2 号溝状遺構の上面には、第 1 層と第 2 層が形成されている。このことから本住居と第 2 号溝状遺構は同時期を示すものと考えられ、本住居に関連する施設としての可能性が想定される。

〔出 土 遺 物〕床面から、敲磨器類 1 点（第 8 図 5）出土した。

第 2 号溝状遺構

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕全体形は、調査区域外へと続くため不明であるが、溝がほぼ直線的に、南東側へ伸びていることから、直線あるいは屈折する可能性も考えられる。現存部分では、長さ 2m87cm を計るが、第 1 号竪穴式住居跡の関連施設として考えると 5m を超えるものと推定される。幅は、約 30cm を計る。

〔 壁 〕斜面高位の側は、壁高約 10cm を計り、急に立ち上がる。斜面低位の側は、さらに浅く緩やかに立ち上がる。

〔 底 〕溝底部は、全体的に傾斜している。

〔堆 積 土〕1 層のみの自然堆積土である。

〔出 土 遺 物〕なし

住居施設 B

第 1 号溝状遺構

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕全体形は、調査区域外へと続くため不明であるが、溝が屈折して北東側へ伸びていることから、L 字状あるいは C 字、またはコ字状を呈するものと思われる。規模は、屈折する前の北西側の一辺で 5m70cm を計る。幅は約 25 ~ 60cm を計る。

〔 壁 〕斜面高位の側は、壁高約 10cm を計り、急に立ち上がる。斜面低位の側は、さらに浅く緩やかに立ち上がる。

〔 底 〕溝底部は、全体的に傾斜気味である。また、溝の南側には、平面円形の小ピット 2 基 (Pit-2・3)、楕円形のピット 1 基 (Pit-4)、溝に隣接する平面円形の小ピット 1 基 (Pit-5) が認められる。深さは、Pit-2 が 38cm、Pit-3 が 46cm、Pit-4 が 28cm、Pit-5 が 32cm を計る。Pit-2・3・5 は、建物の柱穴跡として考えられる。

〔堆 積 土〕1 層のみの自然堆積土である。

〔出 土 遺 物〕なし

第 1 号焼土遺構

第 1 号溝状遺構の内側の平坦面に直径約 25cm を計る、ほぼ円形に広がる焼土を確認した。第 1 号溝状遺構埋没後、それを覆う堆積層の下で検出された。第 1 号溝状遺構と同時期に存在していた可能性が考えられ、関係する施設として想定される。焼土中からは、クルミと思われる炭化物が出土した（写真 22 右

下)

その他の施設

小ピット (Pit-1)

第2号溝状遺構から南西約80cmおいた地点から検出した。建物の柱穴跡として考えられる。基本層序第 層から第 層を掘り込み、その深さは74cmを計る。幅は、開口部が40cm、底部が22cmを計る。堆積土は、1層のみの自然堆積で、柱痕は確認されなかった。このピットが完全に埋没後、第1号竪穴式住居跡および第2号溝状遺構の上面に覆う第2層の一部が重複していることから、いずれの遺構と同時期に存在していた可能性も考えられ、また、それらに関する施設としても想定できる。遺物は、覆土内から第 群土器 (第6図3) が出土している。

(2) 土坑 (第5図)

今回検出した土坑は、Cトレンチで1基、Dトレンチで2基、Eトレンチで1基、Fトレンチで1基の、計8基である。

形態的には、フラスコ状、不整楕円形、長楕円形、円形を呈するものであり多様である。性格的には、Eトレンチのフラスコ状ピットが貯蔵穴、また、Fトレンチの3基も立地上当時はもう少し深かったものと想定し、付近に位置する居住施設2棟の存在を考慮に入れると、当時の貯蔵に関わるものとして考えることもできる。以下、土坑ごとに詳述する。

Cトレンチ・第1号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに不整楕円形を呈し、規模は開口部では長軸推定86cm、短軸67cm、坑底部長軸推定65cm、短軸42cm、深さ14cmを計る。

〔 壁 〕一部で急な立ち上がりが見られる。

〔 底 〕底面はほぼ平坦である。

〔堆 積 土〕シルト質の土壌を主体とする1層のみの自然堆積土である。

〔出土 遺 物〕なし

Dトレンチ・第1号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに長楕円形を呈し、規模は長軸推定117cm、短軸38cmを計る。一部が壁内側にもぐりこみ、深さ40cmを計る。

〔 壁 〕長軸方向では緩やかに傾斜し、その一端が壁の内側にもぐりこんでいる。短軸方向では緩やかに立ち上がる。

〔 底 〕坑底部は不明瞭で、壁との境がみられない。

〔堆 積 土〕シルト質の土壌を主体とする1層のみの自然堆積土である。

〔出土 遺 物〕なし

Dトレンチ・第2号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに長楕円形を呈し、規模は長軸推定 93cm、短軸 38cm を計る。一部が壁内側にもぐりこみ、深さ 58cm を計る。

〔 壁 〕長軸方向では緩やかに立ち上がり、短軸方向では一部に急な立ち上がりがみられ、その一端が壁の内側にもぐりこんでいる。

〔 底 〕坑底部は不明瞭で、壁との境がみられない。

〔堆 積 土〕シルト質の土壌を主体とする1層のみの自然堆積土である。

〔出土 遺 物〕なし

Eトレンチ・第1号土坑

〔重 複〕遺物集中ブロックと重複している。本遺構廃絶後に覆土が堆積、その上に遺物集中ブロックが形成されている。

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに円形を呈し、最大径で開口部推定 120cm、坑底部推定 140cm、深さ 82cm を計る。

〔 壁 〕断面形はフラスコ状を呈し、一部に急な立ち上がりがみられる。

〔 底 〕底面は、ほぼ平坦である。

〔堆 積 土〕8層に分層され、自然堆積と考えられる。

〔出 土 遺 物〕遺物は、覆土から第 群土器(第6図1・2)が出土している。

Fトレンチ・第1号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに概ね楕円形を呈し、最大径で開口部長軸 79cm、短軸推定 53cm、坑底部 36cm、深さ 37cm を計る。

〔 壁 〕一部に急な立ち上がりがみられる。

〔 底 〕底面は丸底形を呈する。

〔堆 積 土〕2層に分層され、自然堆積と考えられる。

〔出土 遺 物〕なし

Fトレンチ・第2号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに円形を呈し、最大径で開口部 70cm、坑底部 62cm、深さ 29cm を計る。

〔 壁 〕全体的に急な立ち上がりがみられる。

〔 底 〕底面はほぼ平坦である。

〔堆 積 土〕2層に分層され、自然堆積と考えられる。

〔出土 遺 物〕なし

Fトレンチ・第3号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに円形を呈し、最大径で開口部102cm、坑底部93cm、深さ24cmを計る。

〔 壁 〕全体的に急な立ち上がりが見られる。

〔 底 〕底面はほぼ平坦である。

〔堆 積 土〕3層に分層され、自然堆積と考えられる。

〔出土 遺 物〕なし

Iトレンチ・第1号土坑

〔重 複〕なし

〔平面形・規模〕平面形は、開口部底面ともに長楕円形を呈し、最大径で開口部長軸190cm、短軸推定46cm、坑底部長軸189cm、深さ7～45cmを計る。

〔 壁 〕長軸方向では緩やかに傾斜し、その一端が若干もぐりこんでいる。短軸方向では、緩やかな立ち上がりが見られる。

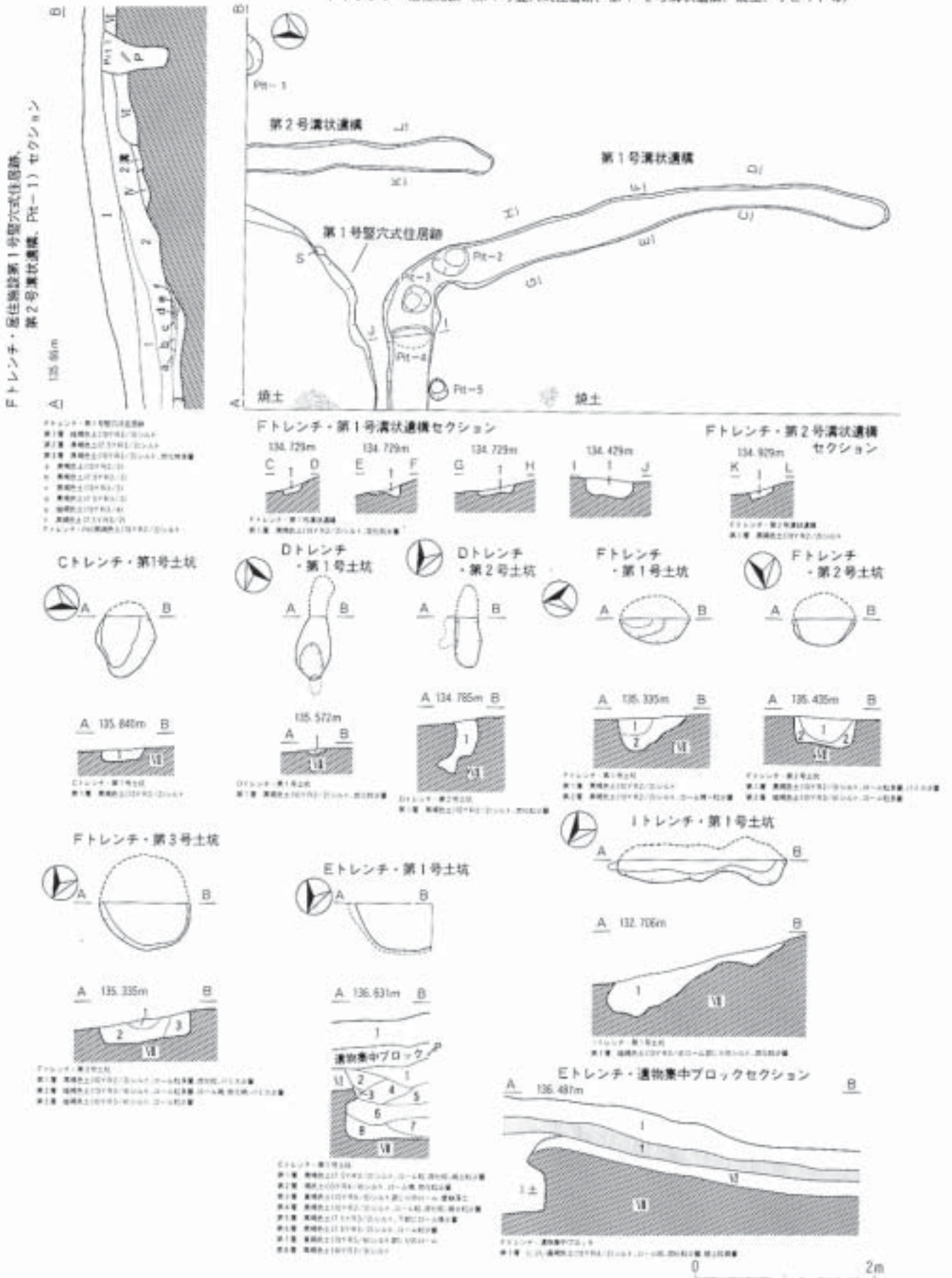
〔 底 〕局部的に凹凸が見られる。

〔堆 積 土〕シルト質の土壌を主体とする1層のみの自然堆積土である。

〔出土 遺 物〕なし

(3) 遺物集中ブロック (第5図)

今回検出した遺物集中ブロックは、Eトレンチの1ヶ所である。調査区域内全体に炭化粒やローム粒、焼土粒を含む厚さ30cmほどの堆積層を確認した。この堆積層は、基本層序のいずれにも属さず、人為的排土の様相を呈していた。本トレンチは、扇状地から沢地へと変わる縁辺部に位置し、本遺構は傾斜する方向に広い範囲で帯状に形成されているものと思われる。平成7年度調査の第1号および第2号遺物集中ブロック、平成8年度調査の第5号遺物集中ブロックと、遺物の出土状況や堆積土、選地の面などで共通点が見られ、性格的にはそれらと同様に捨て場として機能していたことが想定される。遺物は、段ボール箱で約2箱分に換算され、包含層より第 群土器2～3類を中心とした土器(第6図4～26)や、石器では石筥1点(第7図1)、不定形石器3点(第7図2～4)、敲磨器類4点(第8図6～9)、土製品では土器片利用土製品4点(第9図1～4)、石製品では三角形岩版2点(第9図56)、円形岩版2点(第9図7)が出土した。



第5図 居住施設・土坑・遺物集中ブロック

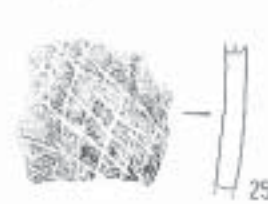
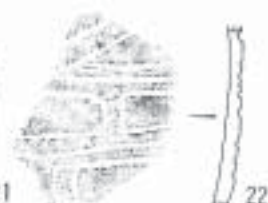
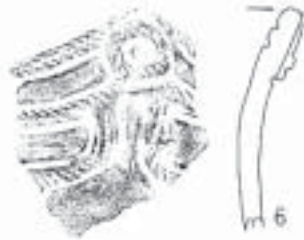
ET-1土



Fトレンチ-Pit 1



Eトレンチ・遺物集中ブロック



0 10cm

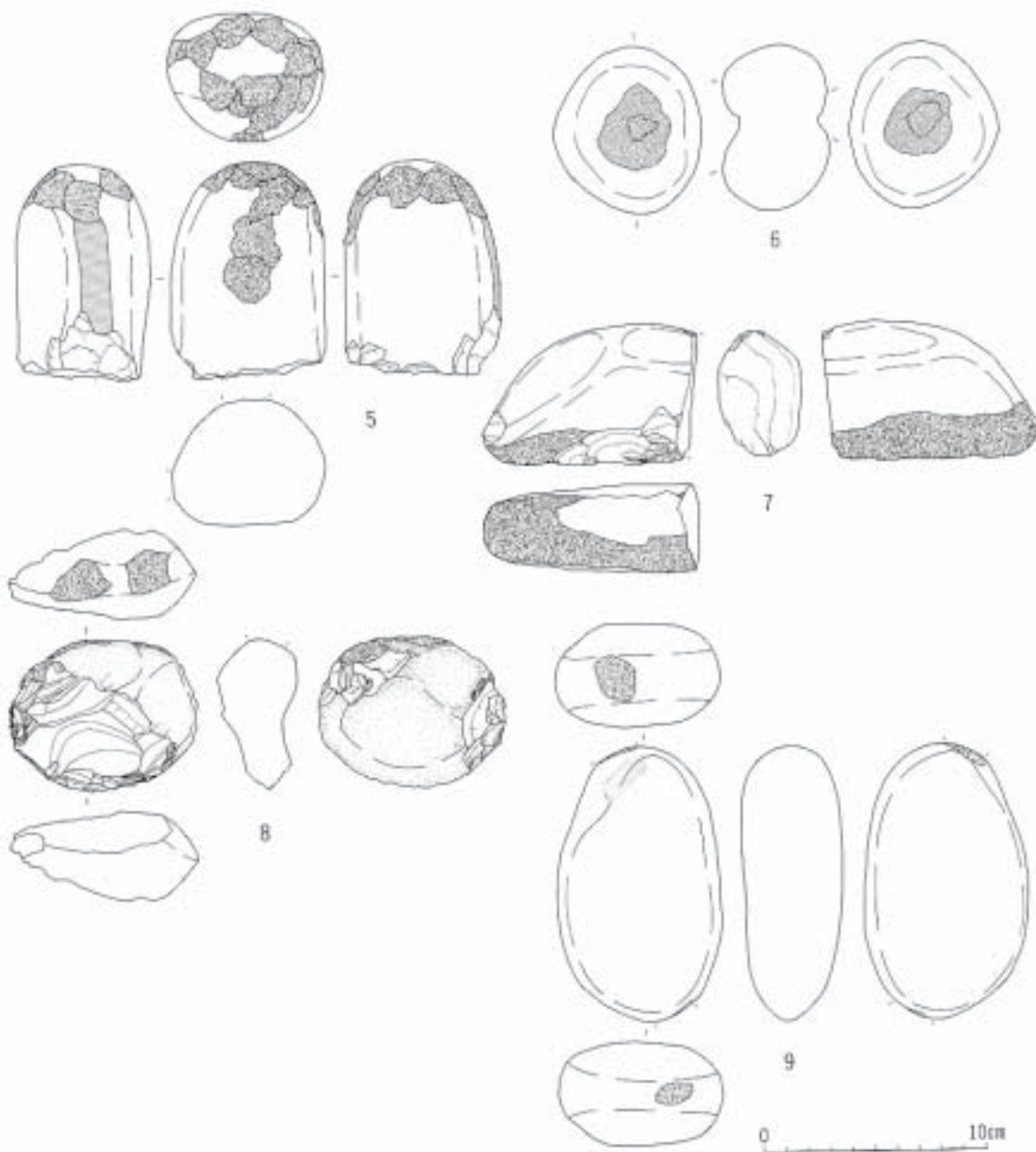
第6図 遺構内出土土器

第1表 遺構内出土土器観察表

番号	出土地点(層位)	器形	文様	備考	分類
1	Eトレンチ - 第1号土坑(覆土)	深鉢	沈線(横線文)、R L		
2	Eトレンチ - 第1号土坑(覆土)	深鉢	沈線(方形文?)		- 2
3	Fトレンチ - Pit 1 (柱痕内)	深鉢	ナデ		
4	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	波状口縁、沈線(楕円形・横線文)、R		- 2~3
5	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	波状口縁、沈線(楕円形文)、R L		- 2~3
6	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	波状口縁、隆帯、沈線(円形・方形文)、R L		- 2~3
7	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	波状口縁、沈線(楕円形文)、R L		- 2~3
8	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	波状口縁、隆帯、沈線(方形文?)、R L		- 2~3
9	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	波状口縁、沈線(楕円形文)、L		- 2~3
10	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	壺	折返し口縁、沈線(渦巻文)		- 2~3
11	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	壺	折返し口縁、沈線(横線文)		- 2~3
12	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	壺	沈線(メガネ状文)		- 2~3
13	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(連携C字状文)、R L		- 2
14	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(連携C字状文)		- 2
15	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	壺	沈線(連携L字状文)		- 2
16	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	鉢	沈線(渦巻・三角形文)、R L		- 2
17	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	鉢	沈線(連携C字状文)、R		- 2
18	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	鉢	沈線(連携方形又はL字状文)、R		- 2
19	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(渦巻文)		- 2~3
20	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(渦巻文)		- 2~3
21	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(方形・三角形文)、R		- 3
22	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(連携C字状文)、R L		- 2~3
23	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	沈線(方形・曲線文)、L R		- 3
24	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	R L		
25	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	深鉢	L 圧痕(格子目文)		
26	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	鉢	沈線(横線文)、L R	裏面沈線	



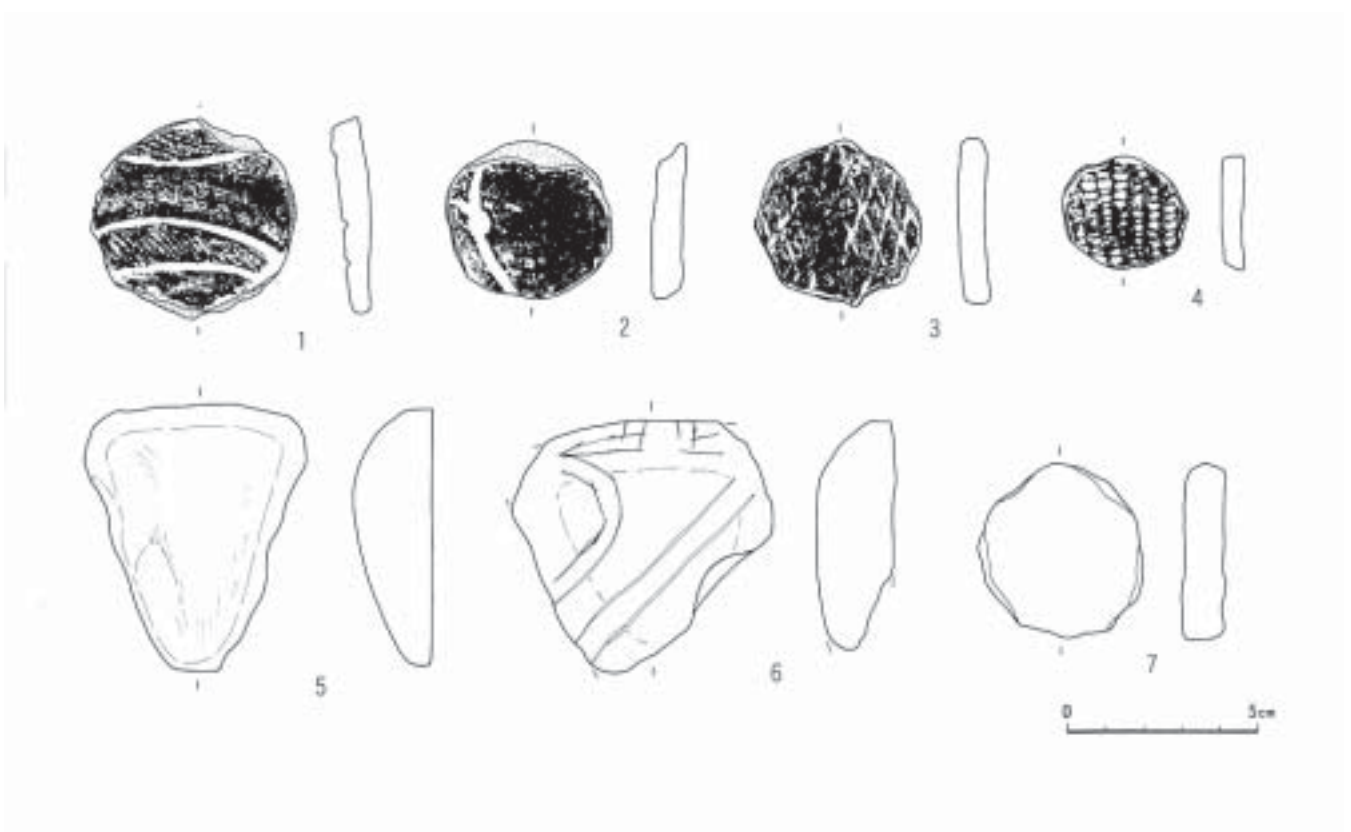
第7図 遺構内出土石器(1)



第8図 遺構内出土石器(2)

第2表 遺構内出土石器観察表

番号	出土地点(層位)	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	石 筥	53.0	26.0	13.0	19.0	珪質頁岩	
2	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	不定形石器	53.0	52.0	11.0	25.0	珪質頁岩	
3	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	不定形石器	52.0	40.0	13.0	16.0	珪質頁岩	
4	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	不定形石器	74.0	63.0	18.0	69.2	珪質頁岩	
5	Fトレンチ - 第1号竪穴式住居跡(床)	敲磨器類	98.0	70.0	58.0	550.7	石英安山岩	
6	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	敲磨器類	75.0	67.0	49.0	194.6	凝灰岩	
7	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	敲磨器類	98.0	63.0	40.0	304.5	石英安山岩	
8	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	敲磨器類	85.0	77.0	41.0	247.3	珪質頁岩	
9	Eトレンチ - 遺物集中ブロック	敲磨器類	124.0	75.0	47.0	588.9	石英安山岩	



第9図 遺構内出土土製品・石製品

第3表 遺構内出土土製品・石製品観察表

番号	出土地点(層位)	種類	特徴・計測値(単位...g, cm)
1	Eトレンチ-遺物集中ブロック	土器片利用土製品	a類、円形、弧状沈線、R L縄文、長さ5.3、幅5.4、厚さ0.9、重さ25.8
2	Eトレンチ-遺物集中ブロック	土器片利用土製品	a類、円形、弧状沈線、長さ4.2、幅4.3、厚さ0.9、重さ17.4
3	Eトレンチ-遺物集中ブロック	土器片利用土製品	a類、円形、R撚糸圧痕文(格子目状)、長さ4.4、幅4.4、厚さ0.7、重さ13.3
4	Eトレンチ-遺物集中ブロック	土器片利用土製品	a類、円形、R L縄文、長さ3.3、幅3.0、厚さ0.6、重さ7.1
5	Eトレンチ-遺物集中ブロック	三角形岩版	a類、無文、長さ7.1、幅5.9、厚さ2.0、重さ73.2、泥岩
6	Eトレンチ-遺物集中ブロック	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、右縁辺部から下頂角欠損、長さ(6.7)、幅(6.9)、厚さ2.1、重さ42.9、泥岩
7	Eトレンチ-遺物集中ブロック	円形岩版	c類、無文、長さ4.3、幅4.6、厚さ1.2、重さ34.7、安山岩

2. 出土遺物

本調査では、環状列石の北東側を中心とした31ヶ所のトレンチにおいて1,259m²の発掘調査面積から、土器、石器、土製品、石製品を合わせて段ボール箱で9箱分の遺物が出土した。ここでは、遺構内及び遺構外から出土した遺物について併せて記述していくこととする。

なお、本調査では列石構築期の遺跡範囲を把握するため、各調査区ごとの詳細な時期を検討しなければならない。したがって、土器は時期を重視するために各トレンチごとに図を掲げ、石器および土製品、石製品は各種類ごとに掲げた。

(1) 土器

本調査で遺構外から出土した土器は、段ボール箱で約6箱分出土し、C～Hトレンチから出土したものが比較的多い。時期的には、前・中・後・晩期のものが出土し、なかでも環状列石構築期直前の縄文時代後期初頭～前葉のものが主体を占める。

第 群土器

縄文時代前期に属する土器である。

出土した土器は次のように1類～2類に分類した。

1類 円筒下層d₁式土器に相当する資料である(第11図21、第14図116・124～127・134～139、第15図153・154)。

胴部にL単軸絡条体1類、LR単軸絡条体1A類、LR・RL結束第2種などが施され、胎土中に繊維が混入しているものも目立つ。

2類 円筒下層d₂式土器に相当する資料である。(第14図119)

胴部にLR・RL結束第2種が施されるものがみられる。

第 群土器

縄文時代中期に属する土器である。

出土した土器は、以下のように1～2類に分類した。

1類 円筒上層b式土器に相当する資料である。(第12図50・51)

口縁が山形あるいは波状を呈するものや、突起が加えられるものがみられ、口縁部にはいずれも爪形の捺糸圧痕が施されている。

2類 円筒上層d式土器に相当する資料である。(第11図8～10)

胴部に隆帯が貼付されるものが多く、RLやLR0段多条の地文などが施されている。

第 群土器

縄文時代後期に属する土器である。

昨年度の報告に準拠し、1類～5類に分類した。ただし、今回の調査では、1類にあたる牛ヶ沢土器に相当する資料は出土しなかった。

2類 蛭沢3群(葛西1979b)・沖附(2)式(成田1989)に相当する資料である。

Eトレンチ第1号土坑(第6図2)および第1号遺物集中ブロック(第6図13～18)、C、D、F、Oトレンチの遺構外(第11図4・11～13・22～25、第12図53～55、第13図77・82、第14図141・142)から出土している。器種は、深鉢、鉢、壺形土器が出土している。

深鉢形土器(第6図13・14、第11図11～13・22～24、第12図53～55、第13図82、第14図141・142)は、

波状口縁で、口縁が厚く、折り返しのものが多くみられる。文様は、沈線手法による曲線文（第11図11・24、第14図141）、方形文や長方形文（第11図12・22・23）、連携L字状文（第12図53・54）、連携C字状文（第6図13・14）などが施され、単位文様の中あるいはその間にRやRLの充填あるいは磨消縄文を効果的に加えることによって、文様をより一層際立たせている。単位文様と隣接する空間が同じ位の幅で構成されるものが多い。

鉢形土器（第6図15～18、第11図25、第13図77）は、いずれも胴部片で、沈線手法による曲線文（第11図25）、連携C字状文（第6図17、第13図77）、連携長方形文（第6図18）などが施され、その中にLRやRLの縄文を加えている。

壺形土器（第11図4）は、底部から胴部下半まで残存するもの1点のみで、横位に1条、その垂直方向に2条の隆帯が貼付され、間に沈線手法による楕円形ないし長方形文が施されている。単位文様と隣接する空間との区別は難しいが、両者とも同じ位の幅で構成されている。

3類 十腰内 式第2段階A種（葛西 1979a）馬立式後半（鈴木 1998）に相当する資料である。

今回の調査で主体を占める土器である。2類と3類との間に位置付けられ、環状列石構築時期である4類（いわゆる十腰内 式土器）の直前の段階である。平成7年度報告の第 群2類、平成8年度報告の第 群1類に相当し、前者では本報告の2類から3類、後者では本報告3類から4類への変遷過程を理解できる層位的な出土状況を確認している。今回は、有意な層位的重複が認められなかったが、本遺跡全体で、区域ごとに土器の様相が異なることを確認した。このことは、調査目的である列石構築期の遺跡の範囲を把握することはもとより、環状列石形成に至るまでの過程を解く意味で意義は大きい。

土器は、C～Hトレンチの遺構外から出土している（第11図3・14～16・30～34、第12図42・43・56～63・66～70、第13図74～76・78・83・92・98～103、第14図108～111）。器種は、深鉢、鉢、壺、注口、蓋形土器が出土している。

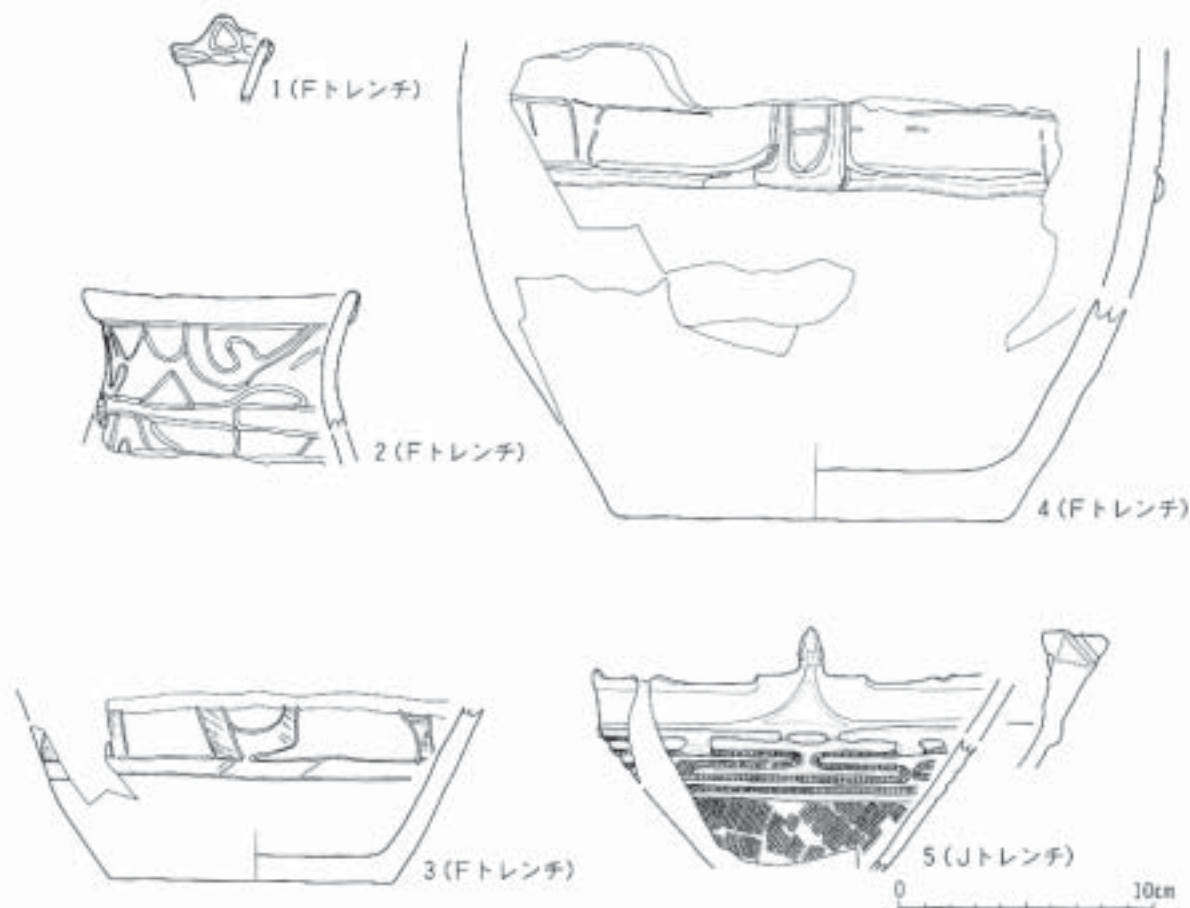
深鉢形土器（第11図14～16、第12図42・43・56～59・61・67、第13図75・78・98～103、第14図108～111）は、波状口縁で、文様は沈線手法による曲線文（第11図3、第13図75・78）、渦巻文（第13図102）、うろこ状文（第13図103）などが施されている。そのほとんどは、単位文様あるいはその間にR、L、RL、LRなどの充填あるいは磨消縄文が効果的に加えられ、文様が一層際立っている。口縁に関しては、2類の土器とほぼ同様な様相を呈する。しかし、胴部に施される文様については、2類と様相が異なり、単位文様（区別がつかない場合には縄文が施される部分を基準）の幅が前記2類の幅と比べて狭く、また、単位文様に隣接する空間の幅を比べてみても幅狭である。

鉢形土器（第11図30～34、第12図60・62・68～70、第13図74・76・83）が出土している。文様は、楕円形又（第11図31、第12図60・66、第13図76）、連携C字文（第11図32）、連携S字状文（第12図62）、うろこ状文（第12図68～70）などが施され、いずれも単位文様の中などにR、L、RL、LRなどの縄文が施されている。

壺形土器（第11図3、第12図63）は、沈線手法による横線文や曲線文（第11図3）、楕円形文（第12図63）が施され、いずれもR、LRなどの縄文が施されている。

注口土器（第13図92）は、平坦口縁で注口部の長さは短い。文様は、注口部を中心に放射状に沈線手法による円形や楕円形文が施されている。

蓋形土器（第13図93～97）は、2類に属される可能性もあるが、本類に含めて記述する。無文のもの（第13図93）や表面に隆沈線手法による楕円形文（第13図94）、両面沈線手法による楕円形文や曲線文（第13図95）



第10図 遺構外出土土器(1)

～97)が施されている。

なお、観察表の分類の列で -2～3、 -3～4と表記したものの大部分は本類に帰属されるものと思われる。

4類 十腰内 式第2段階B種(葛西 1979a)十腰内1A式(成田 1989)に相当する資料である。

環状列石構築期の土器であるが、出土点数は、平成2年度から9年度の調査の中で最も少なく、出土地点もD、F、S、Zトレンチから各1点で、分布域は広いが環状列石やその他の遺構との直接的な関わりは認められない。いずれも小破片で、深鉢と鉢形土器がみられる。文様は、隆沈線手法による楕円形文(第11図35)、沈線手法による連結楕円形文やC字状文(第13図80)、円形文(第15図147)が施されている。

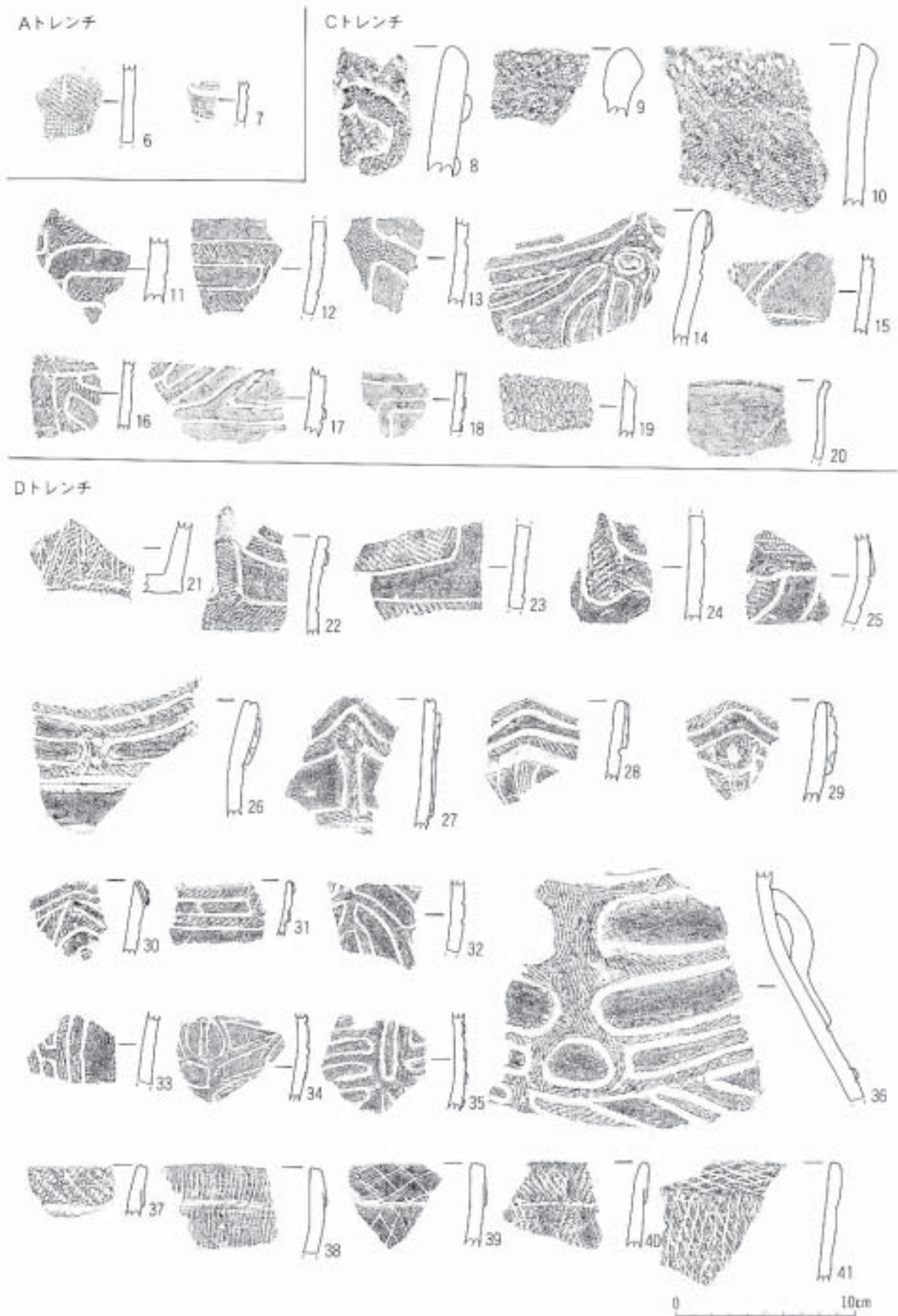
5類 十腰内 式第3段階(葛西 1979a)十腰内 B式(成田 1989)に相当する資料である。

本類においても、出土点数が少なく、I、J、O、Zトレンチから各1点である。器種は、深鉢(第14図111、第15図150)、壺(第14図122・143)の2種類である。壺形土器の口縁は、いずれも連続する小波状口縁を呈する。文様は、三本組沈線による曲線文(第14図117)、S字状文(第14図143)などが認められる。

第 群土器

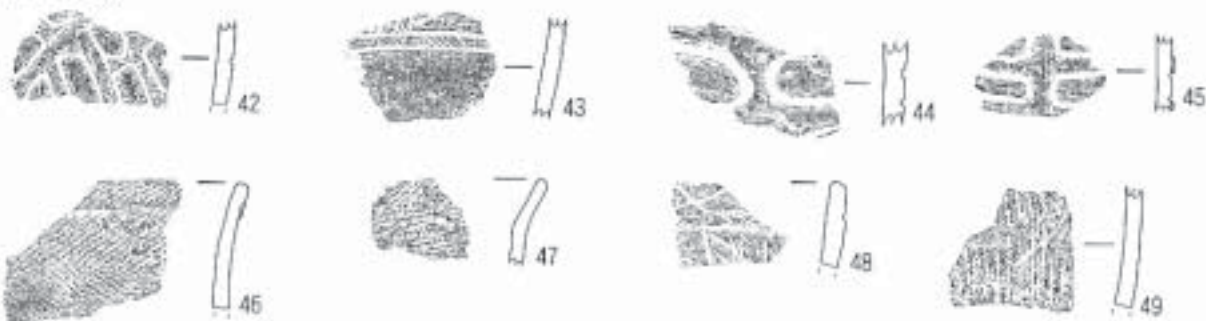
縄文時代晩期に属する土器である。(第11図5、第14図128～133・144・145、第15図155・156)

J、M、ACトレンチから出土した。第14図128～130は、磨消縄文がみられ、晩期初頭～前葉に属する可能性が想定される。第10図5、第14図144は、鉢形で、口縁に大型突起が加飾されるものである。胴部に横位連続工字文が展開し、大洞A式に属するものである。



第11図 遺構外出土土器(2)

Eトレンチ



Fトレンチ



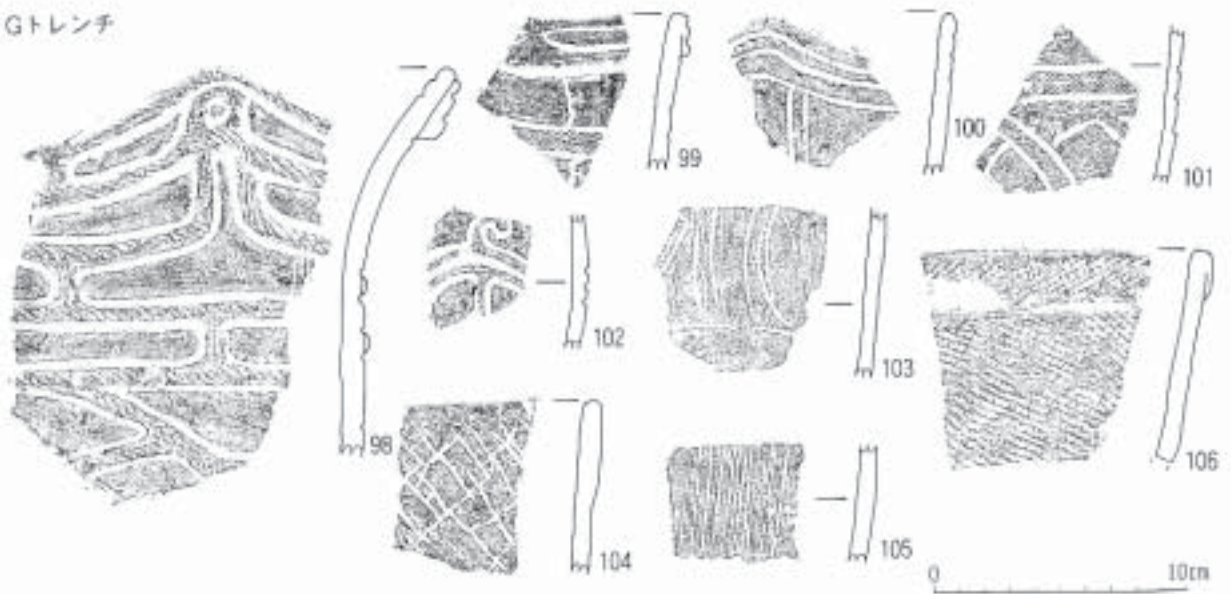
0 10cm

第12図 遺構外出土土器(3)

Fトレンチ

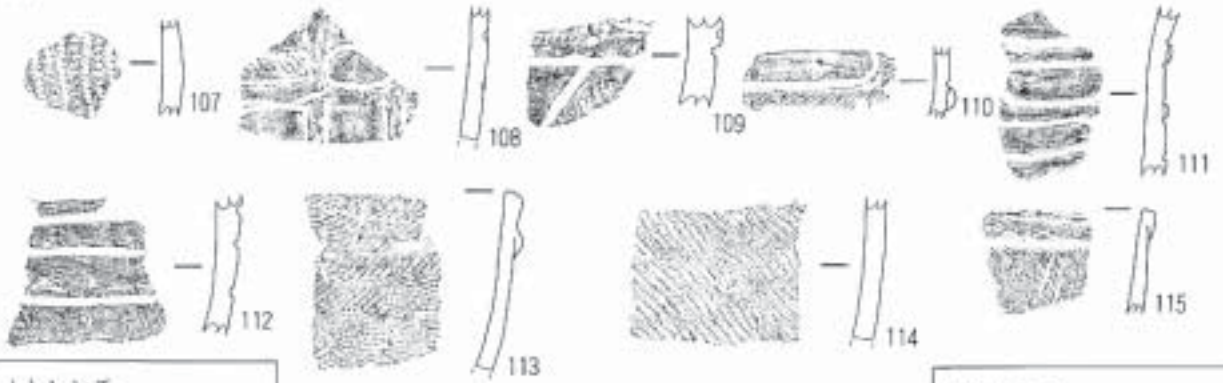


Gトレンチ



第13図 遺構外出土土器(4)

Hトレンチ



Iトレンチ



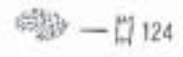
Kトレンチ



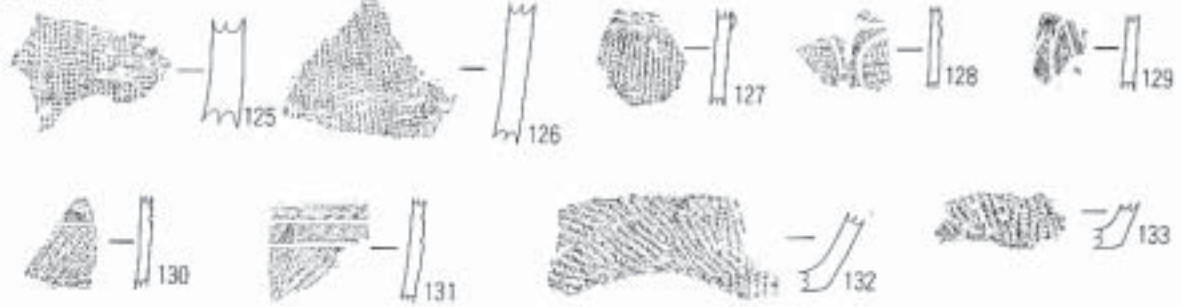
Jトレンチ



Lトレンチ



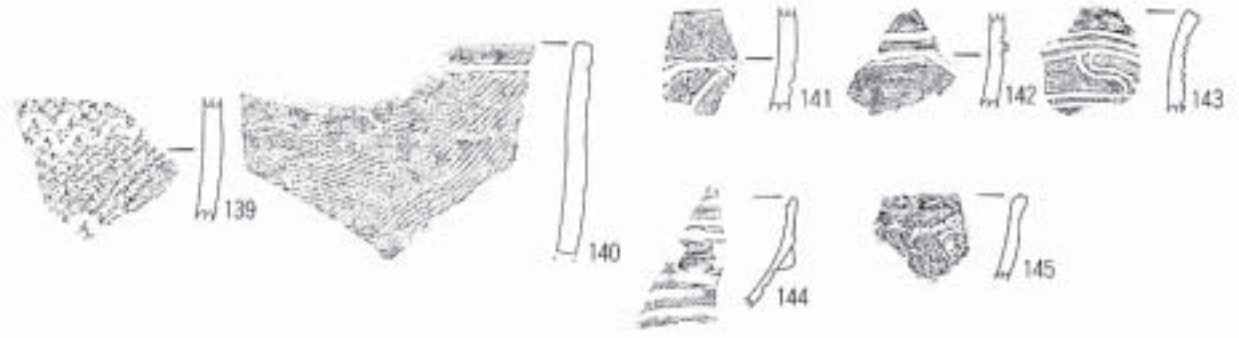
Mトレンチ



Nトレンチ

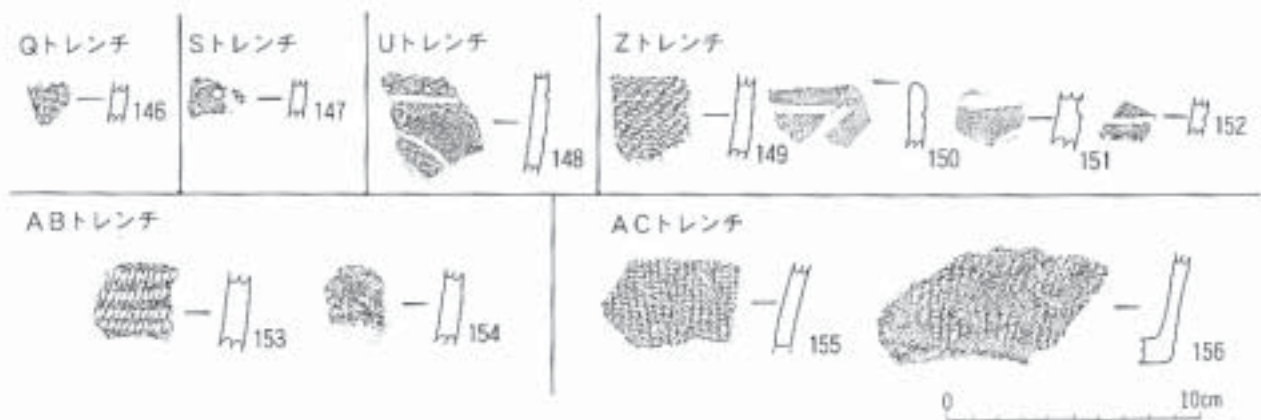


Oトレンチ



0 10cm

第 14 図 遺構外出土土器(5)



第15図 遺構外出土土器(6)

第4表 遺構外出土土器観察表(1)

番号	出土地点(層位)	器形	文様	備考	分類
1	Fトレンチ()	壺	口縁突起、沈線(三角形・横線文)		- 2~3
2	Fトレンチ()	壺	沈線(渦巻文・三角形文)		- 2~3
3	Fトレンチ()	壺	沈線(横線・曲線文)、R		- 3
4	Fトレンチ()	壺	隆帯、沈線(楕円形・長方形文)		- 2
5	Jトレンチ()	鉢	口縁突起、粘土粒、沈線(横位連続工字文)、R L		
6	Aトレンチ()	深鉢	L R		
7	Aトレンチ()	深鉢	沈線		
8	Cトレンチ()	深鉢	隆帯、R L		- 2
9	Cトレンチ()	深鉢	R L ?		- 2
10	Cトレンチ()	深鉢	L R 0段多条		- 2
11	Cトレンチ()	深鉢	沈線(曲線文)、R		- 2
12	Cトレンチ(~)	深鉢	沈線(方形文)、R L		- 2
13	Cトレンチ()	深鉢	波状口縁、隆沈線、R		- 2
14	Cトレンチ()	深鉢	沈線(曲線文・楕円形文)		- 3
15	Cトレンチ()	深鉢	沈線(斜線文)、L R		- 3
16	Cトレンチ()	深鉢	沈線(方形文・楕円形文)、R L		- 3
17	Cトレンチ()	深鉢	隆沈線(楕円形文・ひし形文等)		- 3~4
18	Cトレンチ(風倒木痕)	深鉢	沈線(方形文?)		- 3~4
19	Cトレンチ(~)	深鉢	L 圧痕		
20	Cトレンチ()	鉢	外面ナデ		
21	Dトレンチ(~)	深鉢	L・R 単軸絡条体1A類		- 1
22	Dトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(長方形文)、R		- 2
23	Dトレンチ()	深鉢	沈線(曲線・長方形文)、R L		- 2
24	Dトレンチ()	深鉢	沈線(曲線文)、R L		- 2
25	Dトレンチ()	鉢	隆帯、沈線(曲線文)、R L		- 2
26	Dトレンチ()	深鉢	波状口縁、隆帯、沈線(楕円形文)、R L		- 2~3
27	Dトレンチ()	深鉢	波状口縁、隆帯、刺突、沈線、R L		- 2~3
28	Dトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(曲線文)、R L		- 2~3
29	Dトレンチ()	深鉢	波状口縁、隆帯、沈線、L R		- 2~3
30	Dトレンチ()	鉢	小波状口縁、沈線(斜線・曲線文)、R L	貫通孔	- 3
31	Dトレンチ()	鉢	沈線(楕円形文)、R		- 3
32	Dトレンチ()	鉢	沈線(連結C字状・楕円形文)、L R		- 3
33	Dトレンチ()	鉢	沈線(曲線文)、L R ?		- 3
34	Dトレンチ()	鉢	沈線(三角形・半月形文)		- 3
35	Dトレンチ()	鉢?	隆沈線(楕円形文)		- 4
36	Dトレンチ()	壺	橋状把手、隆沈線(円形・楕円形文)、L R		- 2~3
37	Dトレンチ()	深鉢	折返し口縁、R L		
38	Dトレンチ()	深鉢	折返し口縁、R		

第5表 遺構外出土土器観察表(2)

番号	出土地点(層位)	器形	文様	備考	分類
39	Dトレンチ()	深鉢	折返し口縁、R圧痕(格子目文)		
40	Dトレンチ()	深鉢	折返し口縁、RL、条痕文		
41	Dトレンチ()	深鉢	R圧痕(格子目文)		
42	Eトレンチ()	深鉢	沈線(楕円形文)、LR		-3
43	Eトレンチ()	深鉢	沈線(横線文)、RL		-3
44	Eトレンチ()	壺	沈線(楕円形文)		-2~3
45	Eトレンチ()	壺	隆沈線(楕円形文)		-3~4
46	Eトレンチ()	深鉢	折返し口縁、LR		
47	Eトレンチ()	深鉢	LR		
48	Eトレンチ()	深鉢	L圧痕(格子目文)		
49	Eトレンチ()	深鉢	L		
50	Fトレンチ()	深鉢	山形口縁、隆帯、LR圧痕		-1
51	Fトレンチ()	深鉢	口縁突起、隆帯、LR圧痕		-1
52	Fトレンチ()	深鉢	LR		
53	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(連携L字状文)	54番と同じ	-2
54	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(連携L字状文)	53番と同じ	-2
55	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(連携弧状文)、R		-2
56	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(楕円形文)		-3
57	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、隆帯、沈線(曲線文)		-3
58	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線、RL		-3
59	Fトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線、LR		-3
60	Fトレンチ()	鉢	波状口縁、列点文、沈線(楕円形・円形文)		-3
61	Fトレンチ()	深鉢	沈線(横線文)、LR		-3
62	Fトレンチ()	鉢	波状口縁、沈線(連結S字状文)、RL		-3
63	Fトレンチ()	壺	沈線(楕円形文)、LR		-3
64	Fトレンチ()	鉢	把手、隆沈線(円形文)		-3~4
65	Fトレンチ()	鉢	隆沈線(方形文)		-2~3
66	Fトレンチ()	鉢	波状口縁、沈線(楕円形・半月形文)、LR	口縁貫通孔	-3
67	Fトレンチ()	深鉢	沈線(斜線文)、L		-3
68	Fトレンチ()	鉢	沈線(うろこ状文)、R?		-3
69	Fトレンチ()	鉢	沈線(うろこ状)、RL		-3
70	Fトレンチ()	鉢	沈線(うろこ状文)、RL		-3
71	Fトレンチ()	鉢	沈線(うろこ状文)		-3~4
72	Fトレンチ()	鉢	沈線(うろこ状文)		-3~4
73	Fトレンチ()	鉢	沈線(うろこ状文)		-3~4
74	Fトレンチ()	鉢	沈線(斜線文)、L		-3
75	Fトレンチ()	深鉢	沈線(曲線文)、RL		-3
76	Fトレンチ()	鉢	沈線(楕円形文)、L		-3
77	Fトレンチ()	鉢	沈線(連携C字状文)、LR		-2
78	Fトレンチ()	深鉢	沈線(曲線文)、LR		-3
79	Fトレンチ()	深鉢	隆帯、沈線(楕円形文)、RL		-2~3
80	Fトレンチ()	鉢	沈線(連結楕円形文・C字状文)		-4
81	Fトレンチ()	深鉢	隆沈線(楕円形文)		-3~4
82	Fトレンチ()	深鉢	沈線(楕円形文)		-2
83	Fトレンチ()	鉢	沈線(円形・楕円形文)		-3
84	Fトレンチ()	鉢	沈線(S字状文)		-3~4
85	Fトレンチ()	深鉢	外面ナデ		
86	Fトレンチ()	深鉢	折返し口縁、R		
87	Fトレンチ()	深鉢	折返し口縁、L圧痕(格子目文)		
88	Fトレンチ()	深鉢	LR		
89	Fトレンチ()	深鉢	条痕文		
90	Fトレンチ()	壺	橋状把手、沈線		
91	Fトレンチ()	壺	橋状把手、沈線、列点文		
92	Fトレンチ()	注口	隆沈線(楕円形文)		-3
93	Fトレンチ()	蓋	内外面ミガキ		-2~3
94	Fトレンチ()	蓋	隆沈線(楕円形文)		-2~3
95	Fトレンチ()	蓋	沈線(楕円形文)、内面に沈線		-2~3
96	Fトレンチ()	蓋	両面に沈線(楕円形・曲線文)		-2~3
97	Fトレンチ()	蓋	両面に沈線(楕円形・曲線文)		-2~3

第6表 遺構外出土土器観察表(3)

番号	出土地点(層位)	器形	文様	備考	分類
98	Gトレンチ()	深鉢	波状口縁、隆帯、沈線(楕円形文)、L R		- 3
99	Gトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(楕円形文)、R		- 3
100	Gトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(縦線文)		- 3
101	Gトレンチ()	深鉢	波状口縁、沈線(横線文・斜線文)、R		- 3
102	Gトレンチ()	深鉢	沈線(渦巻文)		- 3
103	Gトレンチ()	深鉢	沈線(うろこ状文)、R		- 3
104	Gトレンチ()	深鉢	L 圧痕(格子目文)		
105	Gトレンチ()	深鉢	条痕文		
106	Gトレンチ()	深鉢	折返し口縁、L R		
107	Hトレンチ()	深鉢	L R		
108	Hトレンチ()	深鉢	隆帯、沈線(楕円形文)、R L		- 3
109	Hトレンチ()	深鉢	隆帯、沈線、R		- 3
110	Hトレンチ()	深鉢	隆帯、沈線、R		- 3
111	Hトレンチ()	深鉢	隆沈線(楕円形文)		- 3
112	Hトレンチ()	深鉢	沈線(横線文)		- 2~3
113	Hトレンチ()	深鉢	折返し口縁、L R		
114	Hトレンチ()	深鉢	R L		
115	Hトレンチ()	深鉢	折返し口縁、R 圧痕(格子目文)		
116	Iトレンチ()	深鉢	L・R単軸絡条体1A類		- 1
117	Iトレンチ()	深鉢	三本組沈線(曲線文)、R L		- 5
118	Iトレンチ()	深鉢	沈線(横線文)		
119	Jトレンチ()	深鉢	L R・R L 結束第2種		- 2
120	Jトレンチ()	深鉢	L R		
121	Jトレンチ()	深鉢	沈線、R L		
122	Jトレンチ()	壺	連続小波状口縁、沈線(曲線文)		- 5
123	Kトレンチ()	深鉢	L R?		不明()
124	Lトレンチ()	深鉢	L単軸絡条体第1類		- 1
125	Mトレンチ()	深鉢	L単軸絡条体第1類		- 1
126	Mトレンチ()	深鉢	L単軸絡条体第1類		- 1
127	Mトレンチ()	深鉢	隆帯、L単軸絡条体第1類		- 1
128	Mトレンチ()	鉢	沈線(曲線文)、L R	129番と同じ	
129	Mトレンチ()	鉢	沈線(曲線文)、L R	128番と同じ	
130	Mトレンチ()	鉢	沈線(横線文)、L R	131番と同じ	
131	Mトレンチ()	鉢	沈線(横線文)、L R	130番と同じ	
132	Mトレンチ()	鉢	R L		
133	Mトレンチ()	鉢	R L		
134	Nトレンチ()	深鉢	L・R単軸絡条体1A類		- 1
135	Nトレンチ()	深鉢	L R・R L 結束第1種		- 1
136	Nトレンチ()	深鉢	ミガキ	底部直上	- 1
137	Oトレンチ()	深鉢	L R 圧痕、列点文	繊維少量	- 1
138	Oトレンチ()	深鉢	L R単軸絡条体1A類		- 1
139	Oトレンチ()	深鉢	L R・R L 結束第2種		- 1
140	Oトレンチ()	深鉢	R		
141	Oトレンチ()	深鉢	沈線(曲線文)、L R		- 2
142	Oトレンチ()	深鉢	隆帯、沈線	赤色顔料	- 2
143	Oトレンチ()	壺	連続小波状口縁、三本組沈線(S字状文)		- 5
144	Oトレンチ()	鉢	横位連続工字文、粘土粒、L R		
145	Oトレンチ()	鉢	R L?		
146	Qトレンチ()	深鉢?	R L		不明(円下 -)
147	Sトレンチ()	鉢?	沈線(円形文?)		- 4
148	Uトレンチ()	深鉢	沈線(斜線文)		- 3~5
149	Zトレンチ()	深鉢	L R		不明
150	Zトレンチ()	深鉢	沈線(斜線文)、L R		- 5
151	Zトレンチ()	深鉢	沈線		- 4
152	Zトレンチ()	深鉢	沈線、L R		
153	A Bトレンチ()	深鉢	L R 圧痕		- 1
154	A Bトレンチ()	深鉢	R L?		- 1
155	A Cトレンチ()	深鉢	R L		
156	A Cトレンチ()	深鉢	R L		

(2) 石器

本調査で出土した石器は、石鏃4点、石槍1点、石匙1点、石筥11点、不定形石器29点、磨製石斧4点、敲磨器類23点が出土し、総点数73点を数えた。

石鏃(第16図1～4)

遺構外から4点出土し、いずれも凸基有茎である。第16図1・4は基部が欠損しており、第16図23は完形品である。4は基部とその周辺にアスファルト状の黒色有機物が付着している。石質はすべて珪質頁岩である。

石槍(第16図5)

遺構外から1点出土した。基部は尖っており、側縁に微細剥離がみられる。石質は珪質頁岩である。

石匙(第16図6)

遺構外から1点出土した。上部のつまみ部分から左右対象に下方に広がり、下底部と柄の軸が直行している。刃部は腹面のみに施され両側縁には短い剥離によって連続的に調整されている。石質は珪質頁岩である。

石筥(第7図1、第16図7～10、第17図11～16)

Eトレンチ遺物集中ブロックから1点(第7図1) 遺構外から10点(第16図7～10、第17図11～16)が出土した。第7図1は上方が欠損している。両面に調整が施され、刃部の一部が欠損している。第16図7は背面の一部を除き両面に調整が施されている。第16図8～10は両面に調整が施されている。刃部は両面からの調整である。10は背面左側縁・腹面右側縁にアスファルトあるいは漆と思われる有機物が付着している。第17図11～14はいずれも上方が欠損している。11・13は両面に調整が施されており、刃部は両面からの調整である。12は背面全面に調整が施され、腹面は右側縁のみ全く調整がなされていない。刃部は両面からの調整である。14は背面が膨らみを持つように調整され、長軸の断面形が球状を呈する。刃部は両面から調整されている。第17図15・16は、刃部が欠損するものである。両面の周縁に調整が施されている。石質はすべて珪質頁岩である。

不定形石器(第7図2～4、第17図17～19、第18図20～24、第19図25～29、第20図30～36、第21図37～42)

遺物集中ブロックから3点(第7図2～4) 遺構外から23点(第17図17～19、第18図20～24、第19図25～29、第20図30～36、第21図37～42)が出土した。石質はすべて珪質頁岩である。

平成8年度報告に準拠し、刃部の角度と調整の範囲によって分類した。

類 連続的な剥離が側縁の長さの1/2以上にわたって施されているもの。

a: 急斜度な刃部が作出されているもの

b: 緩斜度な刃部が作出されているもの

c: 急斜度な刃部と緩斜度な刃部の両方が作出されているもの

類 連続的な剥離が側縁の長さの1/2以下のもの

aに分類したものは、第7図2～4、第17図17～19、第18図20～24、第19図25～29、第20図30～32の16点である。第17図17・18は石筥と搔器の中間的なものとして考えられる。いずれも両面全面に調整が施されており、細部調整によって急斜度な刃部が作出されている。腹面は背面に比べやや平らに調整されている。第17図19はいわゆるエンドスクレーパーであるが、便宜上、本類に含めた。平面は円形状をしており、背面のみの片面調整である。連続した剥離によって急斜度な刃部が作出されている。第7図24、第18図20～23、第19図26・27・28・29は背面の1辺ないし2辺に連続的な剥離によって急斜度な

刃部が作出されている。腹面には刃部の調整がほとんどみられない。第18図24は背面と腹面の両面2辺に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出されている。背面には原礫面を残している。腹面は右側縁から下底部にかけて調整がみられる。第19図25、第20図32は背面の周縁に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出されており、腹面にほとんど刃部の調整がみられない。第20図30は背面の右側縁と腹面の下底部に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出されている。第20図31は背面縁辺と腹面下方から左側縁に連続した剥離によって急斜度な刃部が作出されている。第7図3は背面には調整がみられず、腹面右側縁と下底部に調整が施されており、連続した剥離によって急斜度な刃部が作出されている。

bに分類したものは、第20図33～36、第21図37～40の8点である。第20図33・34・36、第21図38～40は背面の1辺ないし2辺に連続的な短い剥離によって緩斜度な刃部が作出されている。腹面の1辺にも微細な剥離がみられる。第20図36、第21図38には腹面の刃部調整がみられない。第20図35は背面1辺に連続的な短い剥離によって緩斜度な刃部が作出されている。腹面には刃部の調整がみられない。第21図37は一部を除く周縁に連続した剥離によって緩斜度な刃部が作出されている。腹面に一部不連続な短い剥離がみられる。

cに分類したものは、第21図41の1点である。背面下底部と腹面上部に連続した短い剥離によって緩斜度な刃部が作出されている。腹面上部には微細剥離がみられる。

類に分類したものは、第21図42の1点である。背面と腹面両側縁ともに不連続な短い剥離がみられる。磨製石斧（第22図43～46）

遺構外から4点出土した。第22図43は基部が欠損しており、刃部に一部剥離がみられる。第22図44～46は刃部が欠損している。いずれの石器にも稜や面に敲打痕が局部的にみられるが、整形の段階に施されたものである。石質は第22図44～46が閃緑岩、第22図43が輝緑岩である。

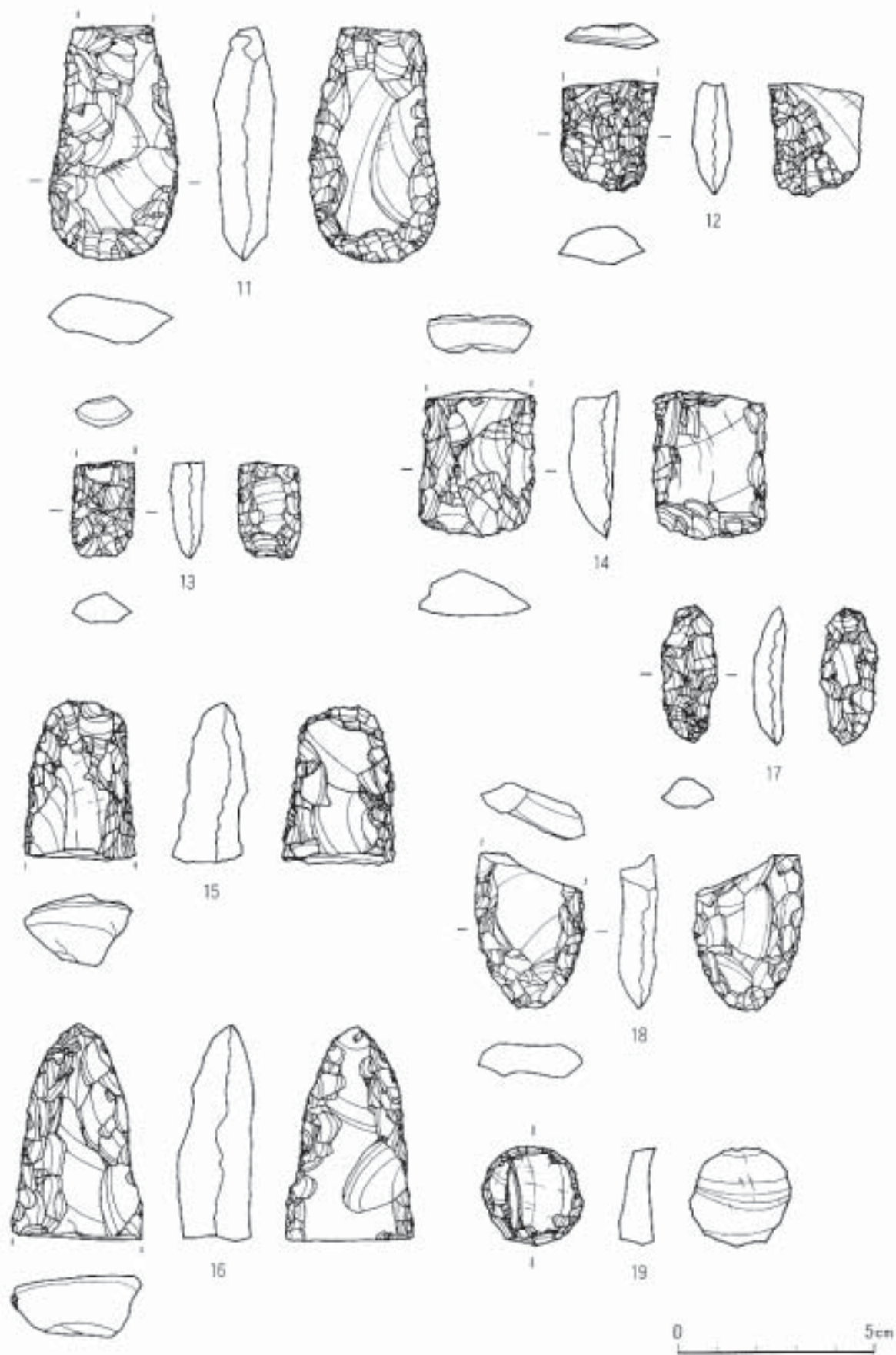
敲磨器類（第8図5～9、第22図47～50、第23図51～57、第24図58～64）

自然礫の稜または面に凹み（クボミ）、敲打痕（タタキ）、磨痕（スリ）等の跡がみられるものを一括した。痕跡の種類とその組み合わせで記述する。

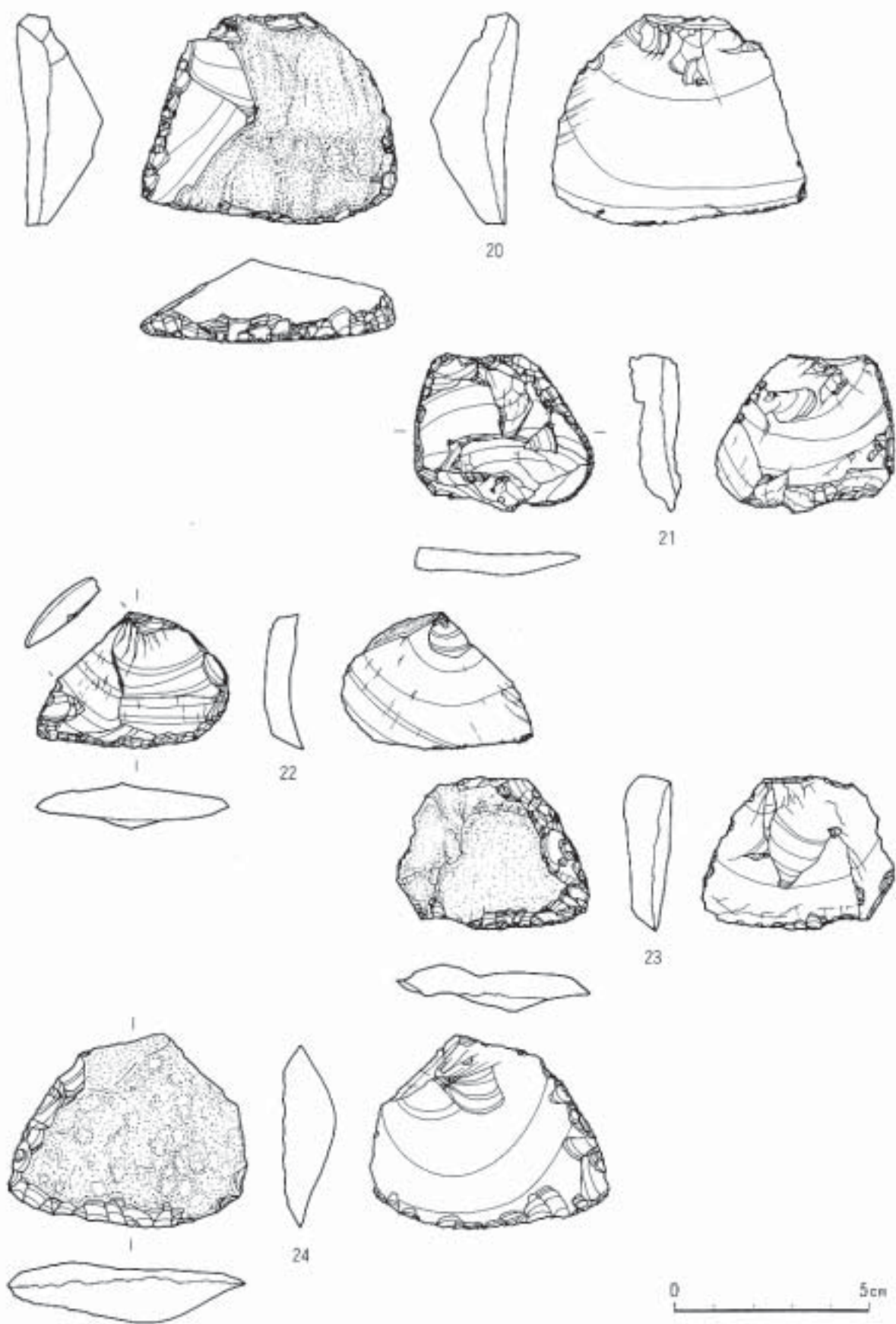
Fトレンチ第1号竪穴式住居跡床面から1点（第8図5）、Eトレンチ遺物集中ブロックから4点（第8図6～9）、遺構外から17点（第22図47～50、第23図51～57、第24図58～64）が出土した。第8図6はクボミ、第8図7～9、第24図58～63はタタキのみがみられた。第22図47～49はクボミ・タタキ・スリ、第22図50、第23図51～54はクボミ・タタキ、第23図55～57はタタキ・スリがみられた。第8図6が凝灰岩、第8図8が珪質頁岩、第22図47～49、第23図52～54・57、第24図58～63が安山岩、第8図5・7・9、第22図50、第23図51・55・56が石英安山岩である。



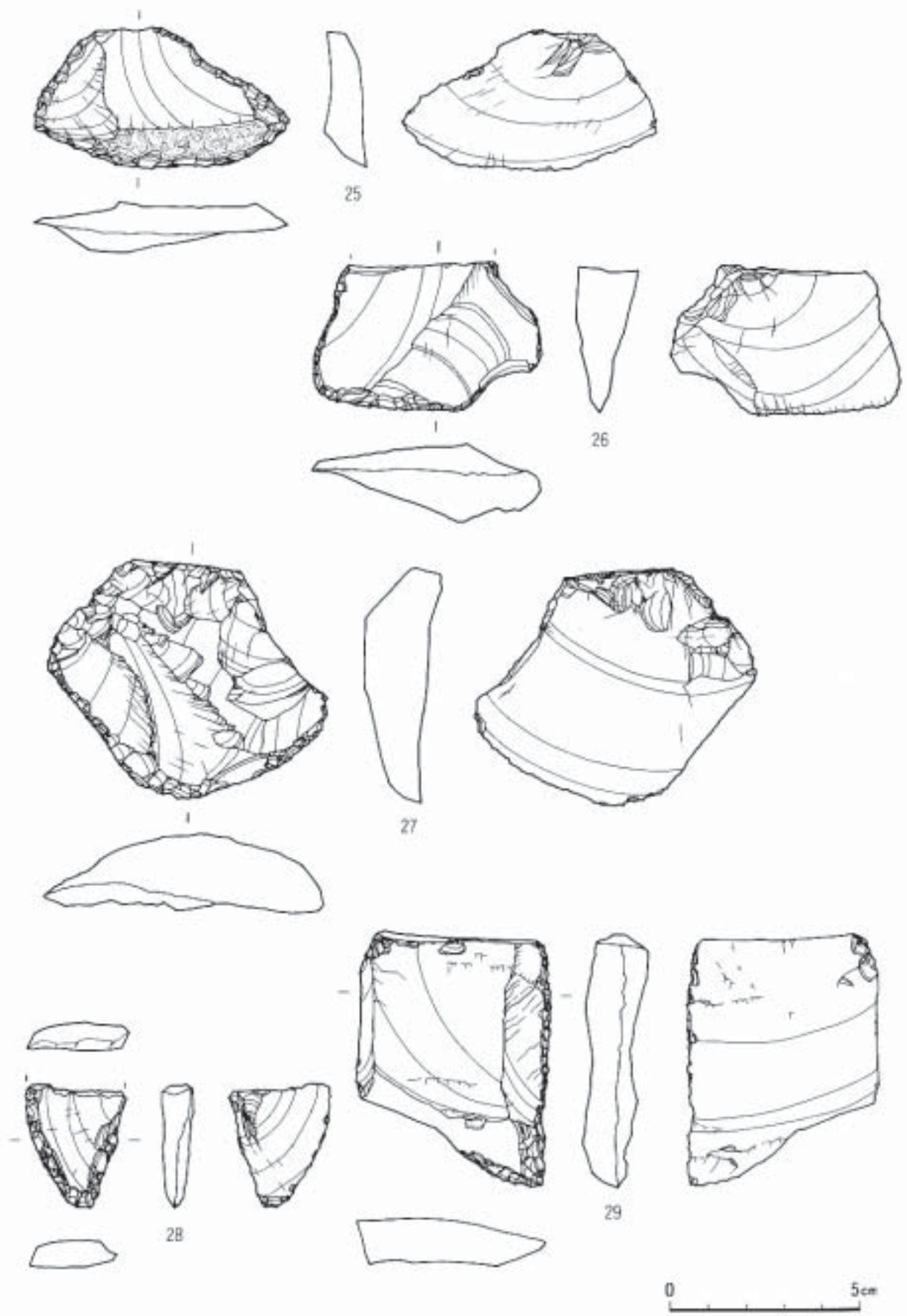
第 16 图 遺構外出土石器(1)



第 17 図 遺構外出土石器(2)



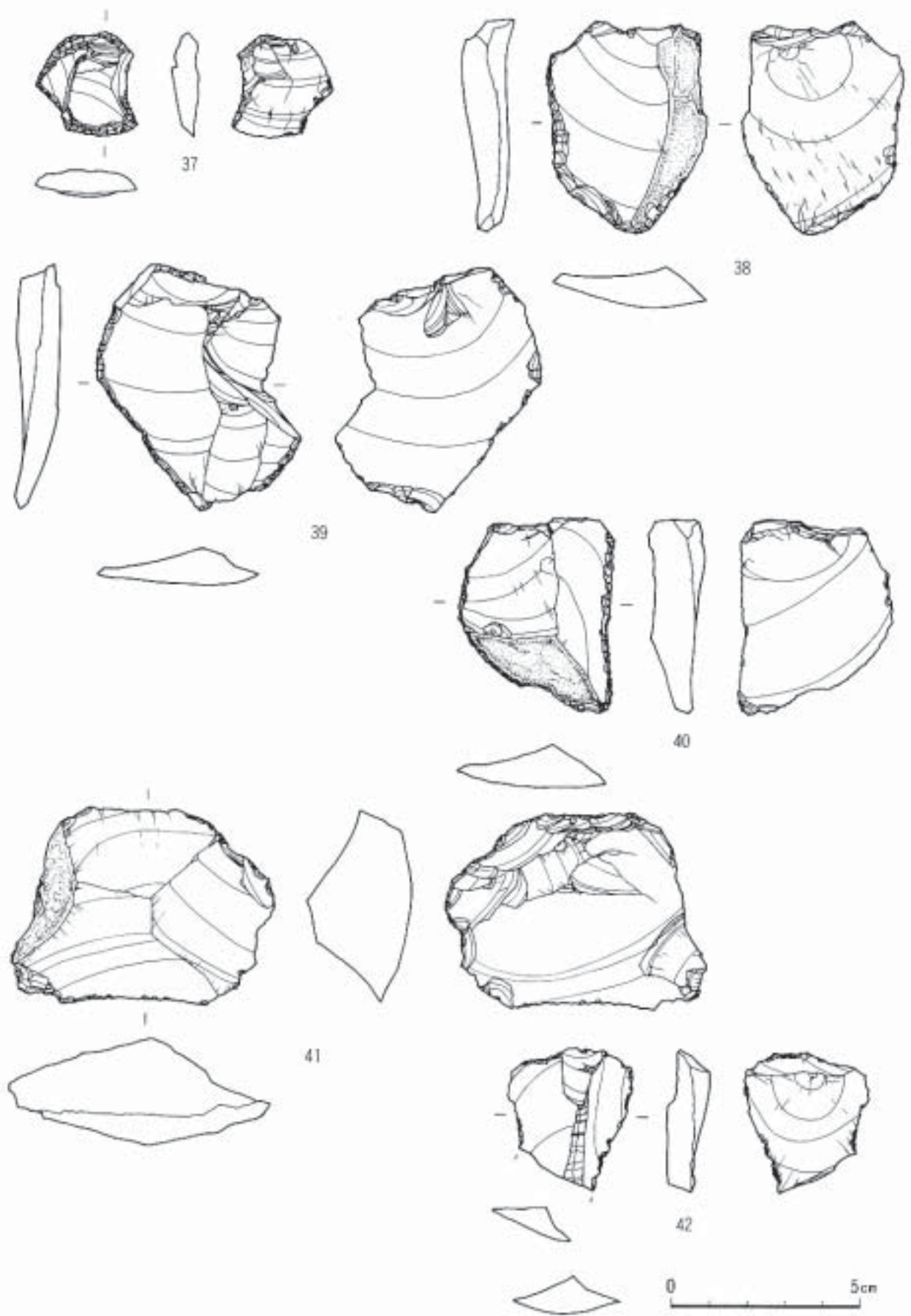
第 18 図 遺構外出土石器(3)



第 19 図 遺構外出土石器(4)



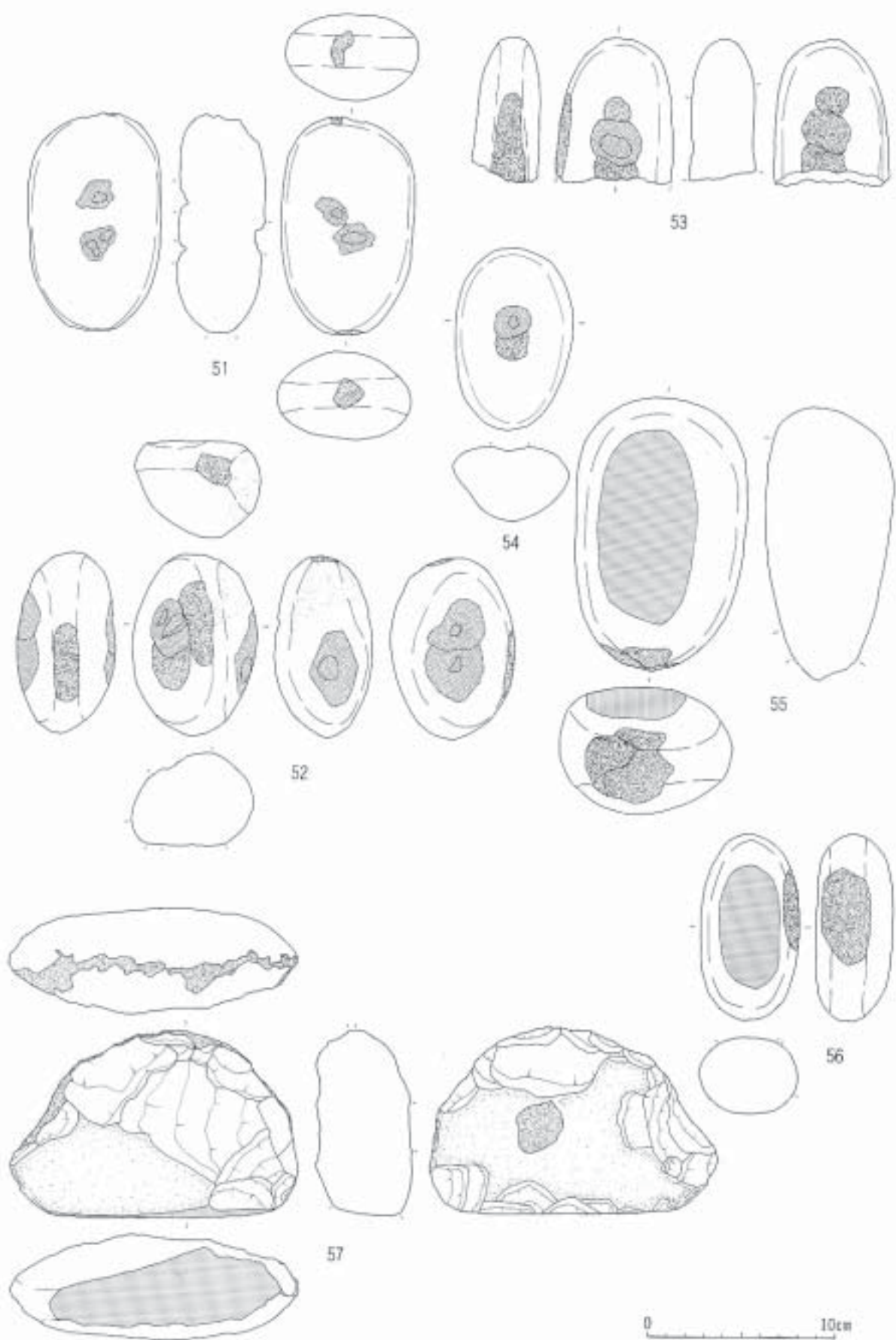
第20圖 遺構外出土石器(5)



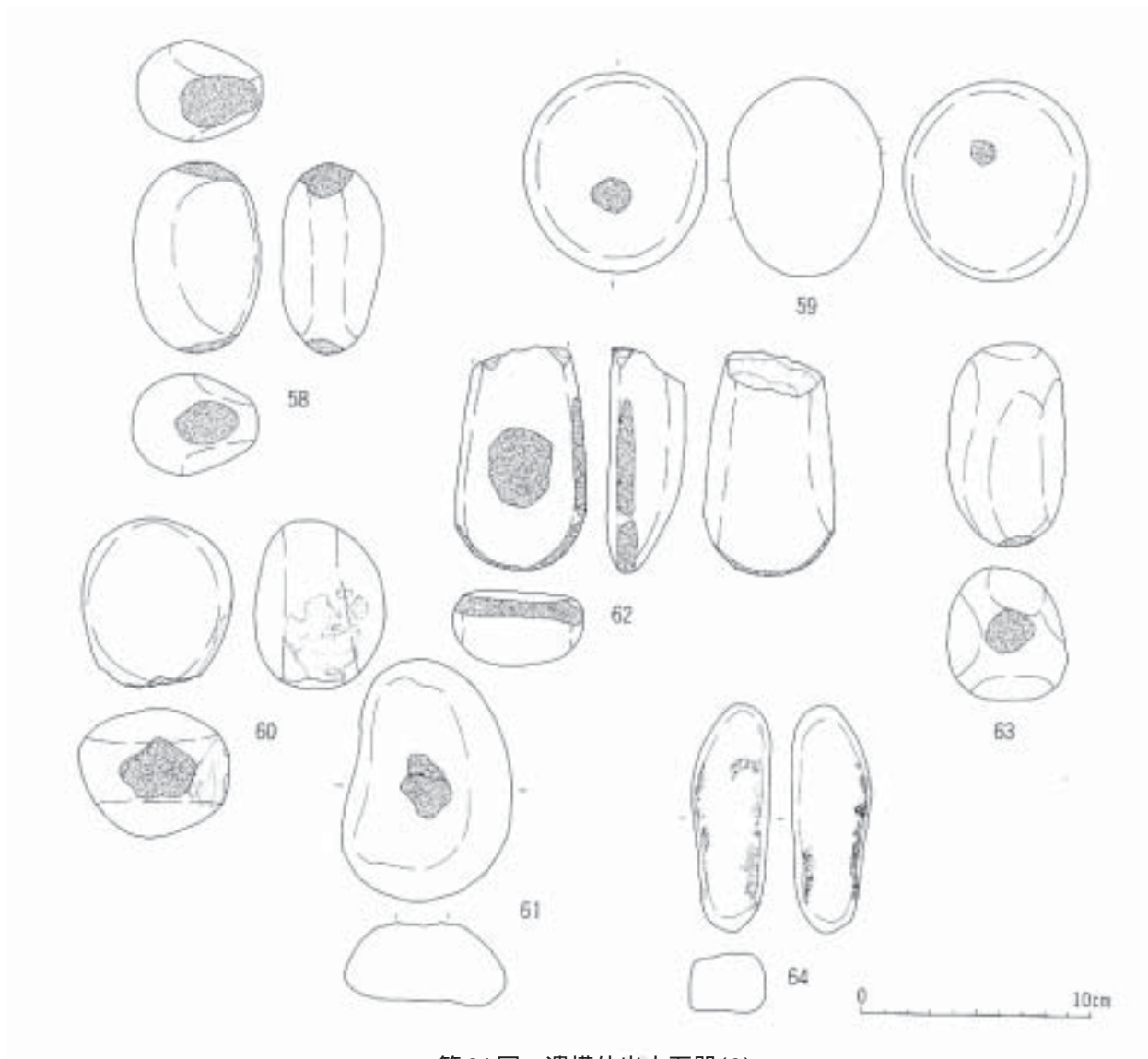
第21图 遺構外出土石器(6)



第22図 遺構外出土石器(7)



第23図 遺構外出土石器(8)



第24図 遺構外出土石器(9)

第7表 遺構外出土石器観察表(1)

番号	出土地点(層位)	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	Fトレンチ()	石 鏃	34.0	17.0	6.0	2.0	珪質頁岩	
2	Fトレンチ()	石 鏃	29.0	11.0	5.0	1.1	珪質頁岩	
3	Fトレンチ()	石 鏃	28.0	8.0	5.0	0.6	珪質頁岩	
4	Fトレンチ()	石 鏃	32.0	8.0	4.0	1.0	珪質頁岩	
5	Fトレンチ()	石 槍	69.0	23.0	16.0	23.8	珪質頁岩	
6	Fトレンチ()	石 匙	59.0	56.0	8.0	19.8	珪質頁岩	
7	Fトレンチ()	石 篋	67.0	32.0	16.0	37.8	珪質頁岩	
8	Fトレンチ()	石 篋	43.0	26.0	12.0	14.6	珪質頁岩	
9	Fトレンチ()	石 篋	45.0	21.0	11.0	9.5	珪質頁岩	
10	Fトレンチ()	石 篋	47.0	25.0	15.0	18.7	珪質頁岩	

第8表 遺構外出土石器観察表(2)

番号	出土地点(層位)	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
11	Fトレンチ()	石 筥	66.0	33.0	16.0	32.6	珩質頁岩	
12	Fトレンチ()	石 筥	29.0	25.0	10.0	7.3	珩質頁岩	
13	Dトレンチ()	石 筥	25.0	16.0	9.0	4.2	珩質頁岩	
14	Fトレンチ()	石 筥	38.0	29.0	12.0	15.9	珩質頁岩	
15	Fトレンチ()	石 筥	41.0	29.0	19.0	22	珩質頁岩	
16	Fトレンチ()	石 筥	55.0	33.0	19.0	36.9	珩質頁岩	
17	Fトレンチ()	不定形石器	36.0	15.0	9.0	3.9	珩質頁岩	a
18	Dトレンチ()	不定形石器	40.0	28.0	10.0	12.2	珩質頁岩	a
19	Fトレンチ()	不定形石器	26.0	26.0	9.0	7.0	珩質頁岩	a
20	Cトレンチ()	不定形石器	66.0	55.0	22.0	63.8	珩質頁岩	a
21	Dトレンチ()	不定形石器	47.0	41.0	14.0	16.7	珩質頁岩	a
22	Fトレンチ()	不定形石器	50.0	36.0	12.0	14.8	珩質頁岩	a
23	Dトレンチ(~)	不定形石器	50.0	40.0	12.0	21.6	珩質頁岩	a
24	Eトレンチ()	不定形石器	62.0	51.0	16.0	38.9	珩質頁岩	a
25	Fトレンチ()	不定形石器	68.0	38.0	18.0	26.5	珩質頁岩	a
26	Fトレンチ()	不定形石器	61.0	40.0	21.0	35.2	珩質頁岩	a
27	Hトレンチ()	不定形石器	75.0	64.0	21.0	83.8	珩質頁岩	a
28	Cトレンチ()	不定形石器	68.0	52.0	17.0	60.1	珩質頁岩	a
29	Fトレンチ()	不定形石器	33.0	27.0	9.0	7.8	珩質頁岩	a
30	Fトレンチ()	不定形石器	55.0	12.0	14.0	36.3	珩質頁岩	a
31	Fトレンチ()	不定形石器	45.0	20.0	10.0	5.6	珩質頁岩	a
32	Fトレンチ()	不定形石器	37.0	25.0	9.0	7.3	珩質頁岩	a
33	Fトレンチ()	不定形石器	40.0	22.0	4.0	3.6	珩質頁岩	b
34	Fトレンチ()	不定形石器	55.0	48.0	10.0	17.4	珩質頁岩	b
35	Fトレンチ()	不定形石器	56.0	31.0	18.0	17.8	珩質頁岩	b
36	Fトレンチ()	不定形石器	49.0	41.0	9.0	17.1	珩質頁岩	b
37	Fトレンチ()	不定形石器	28.0	27.0	8.0	5.4	珩質頁岩	b
38	Fトレンチ()	不定形石器	57.0	43.0	14.0	27.3	珩質頁岩	b
39	Fトレンチ()	不定形石器	66.0	55.0	12.0	30.8	珩質頁岩	b
40	Hトレンチ()	不定形石器	52.0	41.0	15.0	25.8	珩質頁岩	b
41	Cトレンチ(~)	不定形石器	70.0	53.0	29.0	87.9	珩質頁岩	c
42	Fトレンチ()	不定形石器	38.0	34.0	12.0	10.5	珩質頁岩	
43	Fトレンチ()	磨製石斧	58.0	35.0	22.0	62.4	輝緑岩	
44	Fトレンチ()	磨製石斧	57.0	38.0	38.0	82.3	閃緑岩	
45	Fトレンチ()	磨製石斧	43.0	33.0	26.0	47.1	閃緑岩	
46	Gトレンチ()	磨製石斧	88.0	45.0	30.0	183.3	閃緑岩	
47	Eトレンチ()	敲磨器類	104.0	89.0	59.0	654.5	安山岩	
48	Fトレンチ()	敲磨器類	94.0	70.0	58.0	572.9	安山岩	
49	Dトレンチ()	敲磨器類	135.0	77.0	45.0	583.1	安山岩	
50	Fトレンチ()	敲磨器類	125.0	79.0	38.0	458.9	石英安山岩	
51	Cトレンチ()	敲磨器類	116.0	72.0	46.0	512.0	石英安山岩	
52	Fトレンチ()	敲磨器類	78.0	62.0	36.0	259.4	安山岩	
53	Fトレンチ()	敲磨器類	97.0	67.0	51.0	418.9	安山岩	
54	Gトレンチ()	敲磨器類	98.0	63.0	40.0	359.4	安山岩	
55	Cトレンチ()	敲磨器類	146.0	93.0	68.0	1178.0	石英安山岩	
56	Fトレンチ()	敲磨器類	100.0	53.0	41.0	282.0	石英安山岩	
57	Fトレンチ()	敲磨器類	155.0	100.0	56.0	1156.0	安山岩	
58	Fトレンチ()	敲磨器類	84.0	55.0	45.0	291.4	安山岩	
59	Fトレンチ()	敲磨器類	87.0	81.0	67.0	660.0	安山岩	
60	Cトレンチ()	敲磨器類	74.0	66.0	57.0	340.0	安山岩	
61	Dトレンチ()	敲磨器類	106.0	75.0	38.0	383.4	安山岩	
62	Fトレンチ()	敲磨器類	98.0	57.0	34.0	304.7	安山岩	
63	Fトレンチ()	敲磨器類	89.0	58.0	52.0	397.5	安山岩	
64	Cトレンチ(~)	敲磨器類	100.0	36.0	26.0	147.4	安山岩	

(3) 土製品

本調査で出土した土製品は、土偶1点、鐸形土製品3点、靴形土製品1点、土器片利用土製品12点である。

土偶（第25図1）

人間の形態を具象化、もしくは抽象化して製作された土製品である。遺構外から1点（第25図1）出土した。脚部のみ残存する資料である。底面はほぼ円形を呈し、すわりもよく、直立するように製作されたものと考えられる。文様や足指を思わせる沈線および刻みなどは施されていない。

鐸形土製品（第25図2～4）

鐸や鐘などの形状を呈している土製品である。遺構外から3点（第25図2～4）出土した。平成7年度報告の突起の形状や貫通孔による分類に準拠すると、いずれもb類突起の長軸方向に開口部と並行に穿孔しているものに属する。文様は、突起直下および開口部付近に2条の平行沈線が巡らされ、胴部に3単位の渦巻状沈線が展開されているもの（第25図2）や、胴部に長楕円形～長方形の連結する沈線が巡らされているもの（第25図3）、LRによる地文が施されているもの（第25図4）がみられる。開口部は、いずれも円形を呈している。

靴形土製品（第25図5）

袋状の製品の底部側面に突起が付される、靴形を呈する土製品である。遺構外から1点（第25図5）出土した。全体の約1/3が欠損しているため底部側面の突起を確認することはできなかったが、平成7年度報告の靴形土製品に形態が類似していることから、本製品として扱うこととした。

文様は、側面にV字状の沈線と列点文が、底面には渦巻状の沈線が施されている。

土器片利用土製品（第8図1～4、第25図6～13）

土器の破片を打ち欠いたり研磨したりして、三角形ならびに円形等に形作られた土製品である。

Eトレンチ第1号遺物集中ブロック（以下遺物集中ブロック）から4点（第9図1～4）、遺構外から8点（第25図6～13）出土した。形状はいずれも円形を呈し、胴部の破片を素材としている。平成7年度報告の分類に準拠し、土器片の周縁にみられる加工状況によって分類した。

a類 打ち欠きのみもの（第9図1～4、第25図6～8）

b類 打ち欠き後、一部に研磨を施しているもの（第25図9）

c類 全周に研磨を施しているもの（第25図10～13）

が出土している。

文様は沈線が施されているものが半数を占めていた。

(4) 石製品

本調査で出土した石製品は、三角形岩版28点、円形岩版14点、石刀1点である。

三角形岩版（第9図56、第25図14～21、第26図22～39）

平面形が三角形ならびに三角形に近い岩版である。

遺物集中ブロックから2点（第9図5・6）、遺構外から26点（第25図14～21、第26図22～39）が出土した。ほとんどの資料の表面が球状を呈しており、裏面が平滑的に研磨されている。三角形岩版の固有性を表現しているものの一つに、文様が挙げられる。三角形岩版に施される文様は、土器にみられるような1本単位の沈線で描かれるのではなく、細い傷のような刻線の集合体が1本単位として構成される場

合が多く、基本的には5種類の単位文様の組み合わせによって表現される(児玉 1997。)平成7年度報告では、その文様を15種類に分類したが、今回の調査により、h類を細分、またo類およびp類を追加した。以下、確認した分類に属するものにとどめ記載する。

- a類 無文のもの(第9図5、第25図14～21)。
- c類 弧状線が右縁辺部に位置するもの(第26図22～24)。
- e類 弧状線が左右対称に配置するもの(第26図25)。
- g類 右傾の斜位直線のみが施されているもの(第26図26・27)。
- h類 -1 右傾の斜位直線と右縁辺部に弧状線を配置するもの(第26図28～30)。
- h類 -2 右傾の斜位直線と左縁辺部に弧状線を配置するもの(第26図31)。
- i類 右傾の斜位直線と左右縁辺部に弧状線を配置するもの(第26図32～37)。
- o類 縁辺部全周にわたり弧状線を配置するもの(第26図38)。
- p類 左傾の斜位直線と左右縁辺部に弧状線を配置するもの(第26図39)。

が出土している。今回の調査では、a類ならびにi類が比較的多く出土している。e類に分類した1点(第26図25)は、主文様として弧状線が左右対称に配置されているが、その上に副文様として横位にほぼ直線状の刻線が施されているため全体が格子目状の刻線を施しているように見える。この資料には裏面にも左右対称の弧状線が配置されている。h類は縁辺部の弧状線の配置の左右によって細分した。h類-2(第26図30)の裏面には弓矢状の刻線がみられる。o類およびp類は過去には例のないものである。

石質は泥岩と凝灰岩の2種類で、泥岩は19点(第9図5・6、第25図16・18・20・21、第26図22～28・30～33・35～37・39)凝灰岩7点(第25図14・15・17・19、第26図29・34・38)と、泥岩の方が多くみられた。欠損もしくは剥離しているものが多く、全体の6割近くを占めている。

円形岩版(第9図7、第27図40～52)

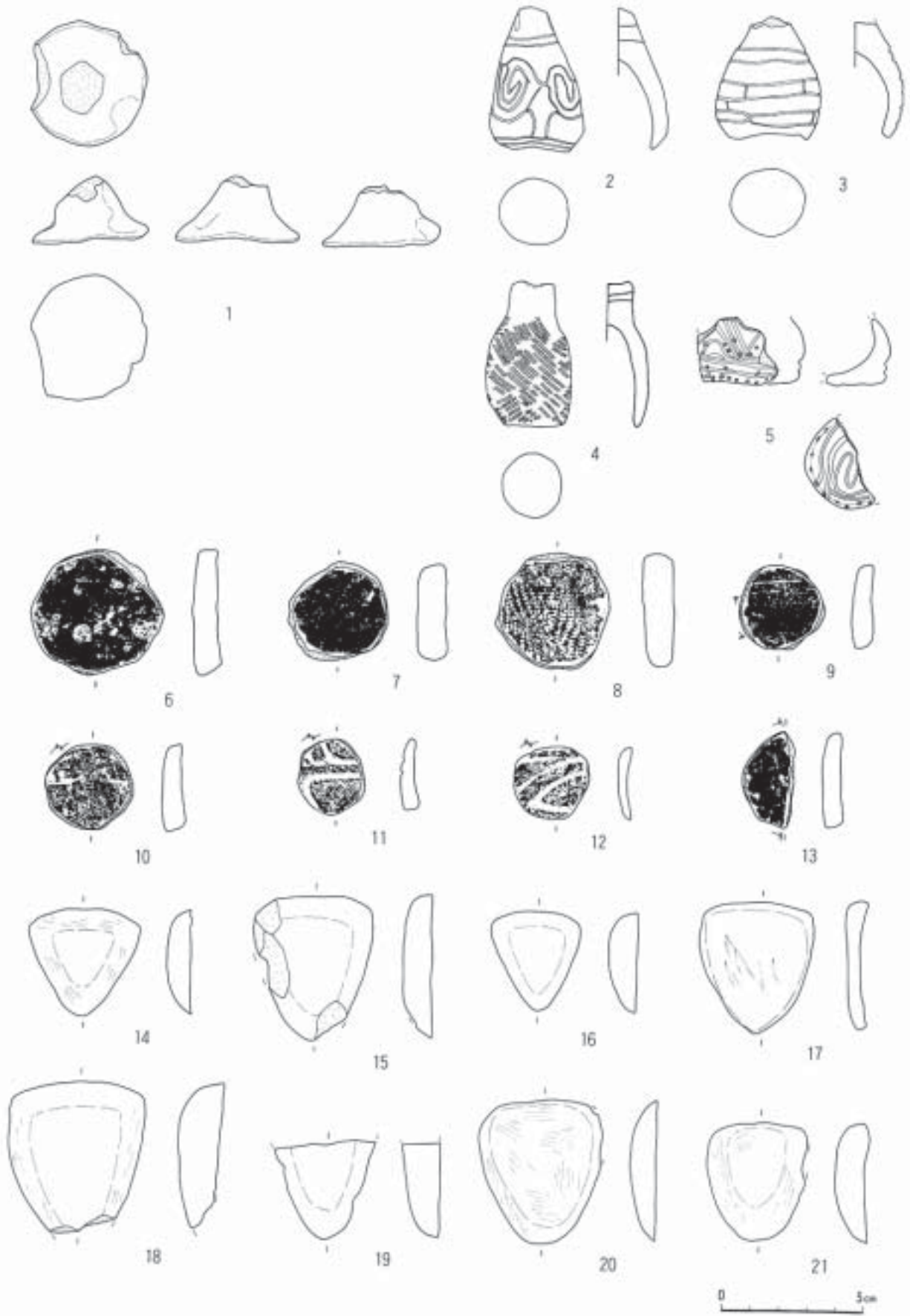
平面形が円形ならびに円形に近い岩版である。

遺物集中ブロックから1点(第9図7)遺構外から13点(第27図40～52)が出土した。いずれの資料も文様は施されていない。平成7年度報告に準拠し、加工状況によって分類した。

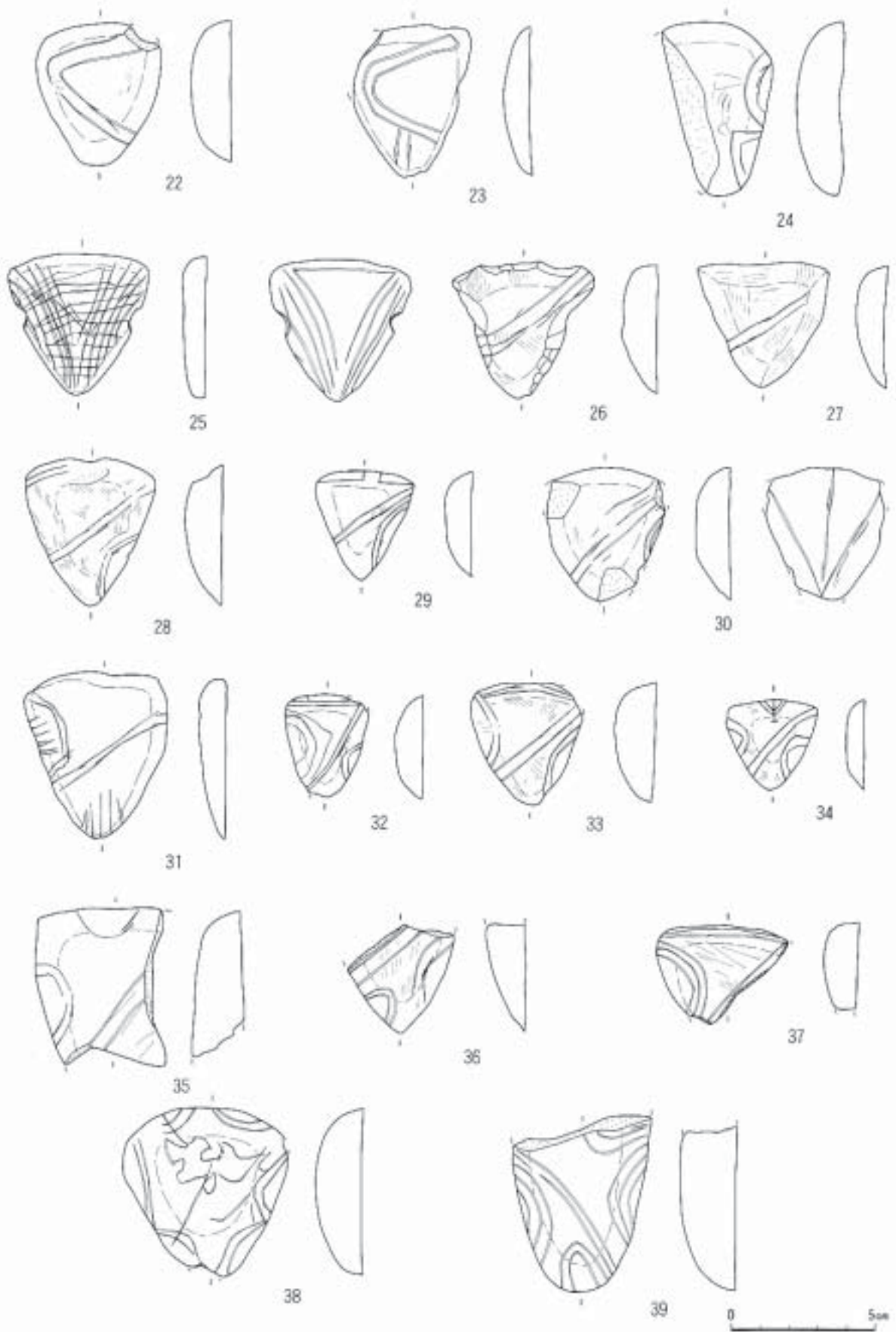
- a類 表裏両面および側面に平滑的な研磨を施し、断面形が長方形および台形に近い形状を呈するもの(第27図40～47)。
- b類 表裏両面に平滑的な研磨を施し、側面が丸みを帯びているもの(第27図48・49)。
- c類 周縁のすべてを打ち欠きによって整形し、表裏両面に平滑的な研磨を施すもの(第9図7、第27図50)。
- d類 周縁の一部を打ち欠きによって整形し、表裏両面に平滑的な研磨を施すもの(第27図51)。
- e類 周縁を打ち欠きと研磨によって整形し、表裏両面に平滑的な研磨を施すもの(第27図52)。

が出土している。平成7年度同様a類が多くみられた。

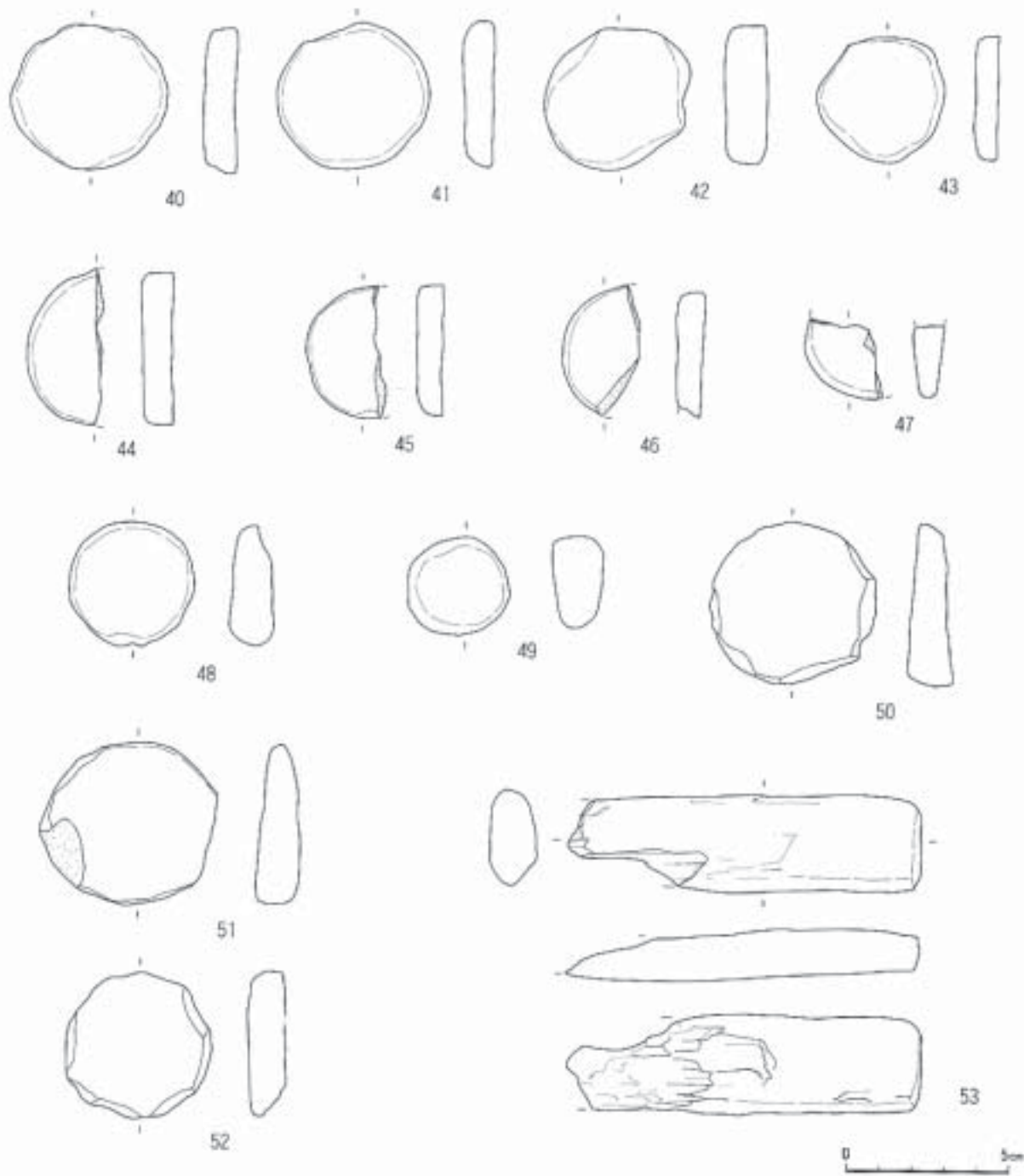
石質は安山岩(第9図7、第27図51)凝灰岩(第27図41～43・45～47・49・50・52)泥岩(第27図44・48)の3種類である。



第25図 遺構外出土土製品・石製品(1)



第26図 遺構外出土土製品・石製品(2)



第27図 遺構外出土土製品・石製品(3)

石刀(第27図53)

断面形が楔形で、刀子形を呈した磨製の石製品である。

遺構外から1点(第27図53)出土した。刃先部は欠損している。身の形状は直刀、断面形は背が平らで刃は尖っている。刃は柄の端より約4cmのところから作り出されている。石質は粘板岩である。

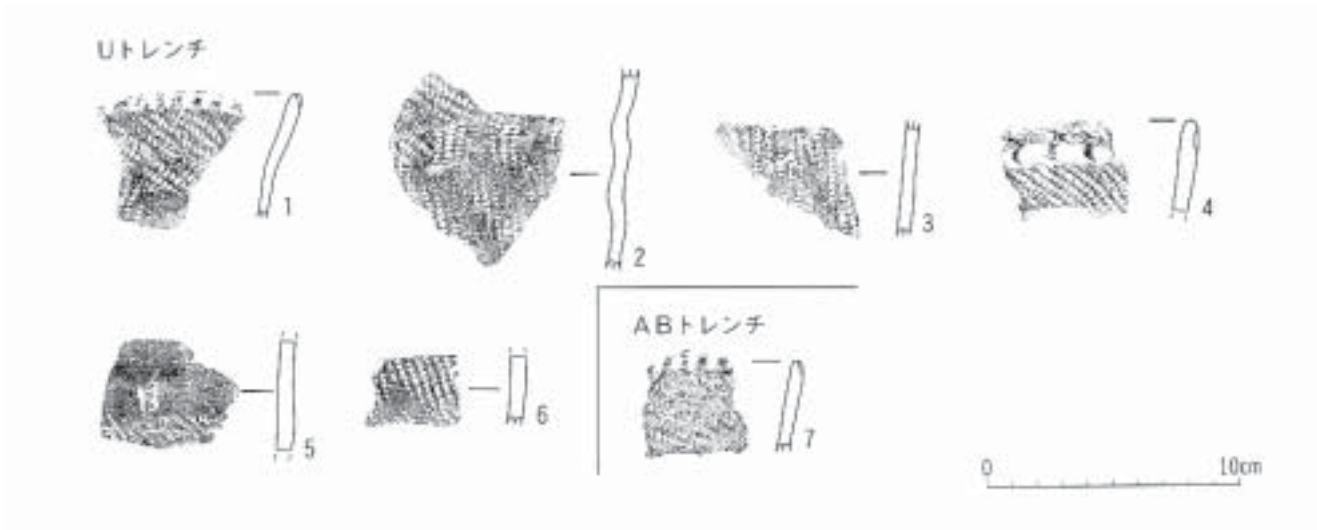
第9表 遺構外出土土製品・石製品観察表

番号	出土地点(層位)	種類	特徴・計測値(単位...g, cm)
1	Fトレンチ()	土偶	脚部のみ残存、裏面やや窪み、重さ23.3g
2	Fトレンチ()	鐙形土製品	b類、沈線(平行・渦巻)、開口部円形。高さ5.0、開口径2.4×2.4、最大径3.3。重さ29.2
3	Fトレンチ()	鐙形土製品	b類、沈線(長楕円・長方形が連結するもの)、開口部円形。高さ(4.2)、開口径2.4×2.6、最大径3.7、重さ26.8
4	Fトレンチ()	鐙形土製品	b類、地文(L R縄文)、開口部円形、高さ5.2、開口径2.3×2.1、最大径3.0、重さ22.7
5	Gトレンチ()	靴形土製品	沈線(平行・渦巻)、刺突、約半分欠損、高さ(2.3)、最大径(3.3)、底部径(1.9)、重さ9.8
6	Dトレンチ()	土器片利用土製品	a類、円形、無文、長さ4.7、幅4.5、厚さ0.9、重さ22.6
7	Fトレンチ()	土器片利用土製品	a類、円形、無文、長さ3.5、幅3.5、厚さ1.0、重さ14.4
8	Dトレンチ()	土器片利用土製品	a類、円形、R L縄文、長さ3.9、幅4.1、厚さ1.1、重さ21.2
9	Eトレンチ()	土器片利用土製品	b類、円形、沈線(平行)、長さ3.1、幅3.0、厚さ0.8、重さ8.2
10	Fトレンチ()	土器片利用土製品	c類、円形、無文、長さ3.1、幅3.0、厚さ0.8、重さ9.3
11	Dトレンチ()	土器片利用土製品	c類、円形、沈線、L R縄文、長さ2.4、幅2.7、厚さ0.6、重さ4.0
12	Eトレンチ()	土器片利用土製品	c類、円形、沈線、長さ2.7、幅2.6、厚さ0.4、重さ2.9
13	Fトレンチ()	土器片利用土製品	c類、円形、沈線、半分欠損、長さ3.5、幅(1.8)、厚さ0.7、重さ5.3
14	Dトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、長さ4.8、幅3.9、厚さ0.8、重さ14.0、凝灰岩
15	Dトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、長さ5.1、幅4.1、厚さ1.0、重さ25.6、凝灰岩
16	Eトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、長さ3.5、幅3.1、厚さ1.0、重さ11.4、泥岩
17	Fトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、長さ4.7、幅3.8、厚さ0.7、重さ17.5、凝灰岩
18	Fトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、下頂部欠損、長さ(5.3)、幅4.7、厚さ1.4、重さ49.3、泥岩
19	Gトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、上縁辺部欠損、長さ(3.4)、幅(3.5)、厚さ1.3、重さ14.7、凝灰岩
20	Gトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、長さ5.1、幅5.1、厚さ0.9、重さ24.8、泥岩
21	Gトレンチ()	三角形岩版	a類、無文、長さ4.2、幅3.5、厚さ1.0、重さ7.4、泥岩
22	Gトレンチ()	三角形岩版	c類、弧状線、長さ5.0、幅4.4、厚さ1.4、重さ14.8、泥岩
23	Hトレンチ()	三角形岩版	c類、弧状線、左頂部欠損、長さ5.3、幅(3.8)、厚さ0.9、重さ9.3、泥岩
24	Dトレンチ()	三角形岩版	c類、弧状線、右頂部欠損、長さ5.1、幅(3.7)、厚さ1.5、重さ16.1、泥岩
25	Fトレンチ()	三角形岩版	e類、弧状線、直線状刻線、長さ4.9、幅4.8、厚さ0.8、重さ18.1、泥岩
26	Cトレンチ(~)	三角形岩版	g類、斜位直線、長さ4.7、幅4.9、厚さ1.2、重さ28.7、泥岩
27	Gトレンチ()	三角形岩版	g類、斜位直線、長さ4.3、幅4.5、厚さ1.0、重さ22.1、泥岩
28	Cトレンチ()	三角形岩版	h類 - 1、斜位直線、弧状線、長さ5.0、幅4.5、厚さ1.3、重さ26.4、泥岩
29	Gトレンチ()	三角形岩版	h類 - 1、斜位直線、弧状線、長さ3.9、幅3.4、厚さ0.9、重さ12.0、凝灰岩
30	Gトレンチ()	三角形岩版	h類 - 1、斜位直線、弧状線、弓矢状刻線、長さ4.7、幅4.1、厚さ1.2、重さ23.6、泥岩
31	Fトレンチ()	三角形岩版	h類 - 2、斜位直線、弧状線、刻線、長さ5.8、幅4.9、厚さ0.9、重さ13.8、泥岩
32	Eトレンチ()	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、長さ3.6、幅2.8、厚さ1.0、重さ10.1、泥岩
33	Gトレンチ()	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、長さ4.2、幅3.9、厚さ1.4、重さ10.3、泥岩
34	Cトレンチ()	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、長さ3.2、幅3.1、厚さ0.6、重さ6.2、凝灰岩
35	Dトレンチ()	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、右頂角より下頂角欠損、長さ(5.5)、幅(4.4)、厚さ(1.8)、重さ50.9、泥岩
36	Dトレンチ()	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、上縁辺部欠損、長さ(3.8)、幅(3.4)、厚さ(1.3)、重さ14.0、泥岩
37	Fトレンチ()	三角形岩版	i類、斜位直線、弧状線、右縁辺部より下頂角欠損、長さ3.4、幅4.6、厚さ1.2、重さ14.9、泥岩
38	Fトレンチ()	三角形岩版	o類、弧状線、長さ5.9、幅4.9、厚さ1.0、重さ27.2、凝灰岩
39	Fトレンチ()	三角形岩版	p類、斜位直線、弧状線、上縁辺部欠損、長さ(5.7)、幅(4.7)、厚さ2.0、重さ30.4、泥岩
40	Gトレンチ()	円形岩版	a類、無文、長さ4.5、幅4.9、厚さ1.0、重さ27.2、凝灰岩
41	Fトレンチ()	円形岩版	a類、無文、長さ4.5、幅4.7、厚さ0.9、重さ28.3、凝灰岩
42	Fトレンチ()	円形岩版	a類、無文、長さ4.4、幅4.4、厚さ1.4、重さ41.7、凝灰岩
43	Fトレンチ()	円形岩版	a類、無文、長さ3.9、幅3.9、厚さ0.7、重さ17.8、凝灰岩
44	Hトレンチ()	円形岩版	a類、無文、半分欠損、長さ4.9、幅(2.3)、厚さ1.0、重さ13.0、凝灰岩
45	Fトレンチ()	円形岩版	a類、無文、半分欠損、長さ4.1、幅(2.2)、厚さ0.8、重さ14.3、凝灰岩
46	Fトレンチ()	円形岩版	a類、無文、約半分欠損、長さ(3.8)、幅(2.4)、厚さ0.8、重さ10.3、凝灰岩
47	Fトレンチ()	円形岩版	a類、無文、一部残存、長さ(2.2)、幅(2.1)、厚さ(0.9)、重さ6.2、凝灰岩
48	Dトレンチ()	円形岩版	b類、無文、長さ3.8、幅3.9、厚さ1.4、重さ8.6、泥岩
49	Dトレンチ()	円形岩版	b類、無文、長さ3.0、幅3.2、厚さ1.6、重さ18.5、凝灰岩
50	Cトレンチ(~)	円形岩版	c類、無文、長さ5.1、幅5.2、厚さ1.4、重さ35.0、凝灰岩
51	Dトレンチ()	円形岩版	d類、無文、長さ5.1、幅5.4、厚さ1.3、重さ50.4、安山岩
52	Cトレンチ()	円形岩版	e類、無文、長さ4.5、幅4.5、厚さ1.1、重さ26.3、凝灰岩
53	Fトレンチ()	石刀	刃先部欠損、長さ11.1、幅3.1、厚さ1.5、重さ76.9、粘板岩

第2節 弥生時代・続縄文時代の遺物

本調査では、弥生時代・続縄文時代に属する土器片が数点出土した（第28図1～7）。第 群土器に分類される。

U、ABトレンチの遺構外から出土した。器種は、いずれも甕形を呈する。Uトレンチから出土した第28図1～3、第28図4～6はそれぞれ同一の個体で、前者は口縁に刻み目を有し、胴部にRLが施されている。後者は口縁にRLが施され、その下に列点文が加えられている。また、胴部にはRLが施される。ABトレンチから出土した第28図7は、口縁に刻み目を有し、胴部にRLが施されている。時期は、弥生時代後期に併行するものと考えられるが型式を特定するまでには至らなかった。



第28図 遺構外出土土器

第10表 遺構外出土土器観察表

番号	出土地点(層位)	器形	文様	備考	分類
1	Uトレンチ()	甕	口縁刻目、RL	2・3番と同じ	
2	Uトレンチ()	甕	RL		
3	Uトレンチ()	甕	RL		
4	Uトレンチ()	甕	口縁RL、列点文、RL	5・6番と同じ	
5	Uトレンチ()	甕	ミガキ、RL		
6	Uトレンチ()	甕	RL		
7	ABトレンチ()	甕	口縁刻目、RL		

第3節 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構として検出したのは、3軒の竪穴式住居跡である。これらの住居跡は、0トレンチ、Uトレンチ、ACトレンチで検出した。いずれの住居跡も一様に現在の野沢地区を眺望する方位に立地している。なお調査期間の日程上および遺跡保存を考慮に入れ、0トレンチ第1号竪穴式住居跡は確認するにとどまり、精査は行わないものとした。また、N、O、R、S、T、Y、AAの各トレンチで検出された平安時代のものと思われる道路状遺構に関しては、本章第4節で詳細を述べる。

1. 竪穴式住居跡

0トレンチ・第1号竪穴式住居跡（第29図）

0トレンチは確認面より掘り下げなかったため、記載は確認した範囲に限られた。

〔位置〕基本層序第 層上面で黒色土の落ち込みを確認した。なおこの黒色土の上面で白頭山火山灰を検出した。

〔平面形・規模〕確認したのは南北に2m65cm、東西に71cmの範囲である。南北を結ぶ壁の方位は、N-24°-Eである。

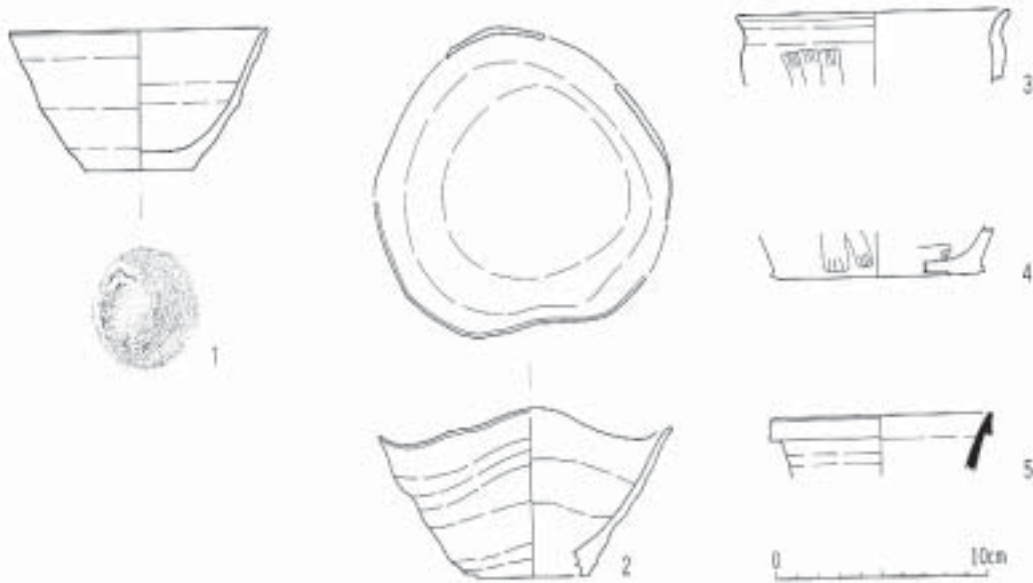


第29図 0トレンチ・第1号竪穴式住居跡（確認面）

Uトレンチ・竪穴式住居跡（第30図）

- 〔位置〕基本層序第～層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- 〔重複〕調査した範囲では認められなかった。
- 〔平面形・規模〕全体形を確認していないが、一辺が約3m50cmの方形であると思われる。南北を結ぶ壁の方位はN-28°-Eである。
- 〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは約40cmを計る。
- 〔床〕ほぼ平坦である。また多量の炭化材、焼土が床面より検出されたことから本住居跡は焼失家屋の可能性が考えられる。
- 〔壁溝〕北壁側に認められ、幅は約10cm、床面からの深さは約10cmを計る。
- 〔柱穴・ピット〕西壁から住居外へ1m20cmのところでは1基のピットを確認した。平面形は円形で開口部径約20cm、底部径約10cm、深さ約20cmを計る。
- 〔カマド〕南壁ほぼ中央に構築されている。煙道部は調査区域外にあるため不明である。袖部は、粘土で作られている。
- 〔堆積土〕6層に分層され、いずれも自然堆積土である。3層と4層の間から白頭山火山灰を検出した。
- 〔出土遺物〕出土遺物のうち、図示したのものについては、第30図1～5までである。1・2は、土師器坏である。1はロクロナデによる稜が胴部中央に顕著に残る。口唇はわずかに外反する。底部切り離し右回転の糸切りである。色調は灰白色を呈する。2は口縁から胴下半部にかけて大きく歪む。意図的なものか、或いは単なる不良品なのかは不明である。砂粒を少量含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。3・4は、土師器甕である。3は口径が13.1cmで口縁部が短く外反する。胎土は砂粒を少量含む。色調は褐灰色を呈する。4は砂底で、胴下半部から底部にかけてヘラナデが施されている。1mm程度の砂粒を中量含む。色調は外面が褐灰色、内面がにぶい橙色を呈する。胎土は砂粒を少量含む。5は、須恵器壺である。口縁部の形態から長頸壺であると思われる。縁帯下をつまみ出し、突帯を作り出している。調整は内外面ともロクロナデが施され、色調は灰黄褐色である。
- 〔時期〕堆積土および、床面より出土した土師器坏の口縁部および胴部の形態、底部の切り離し技法から10C初頭～10C前半に属するものと考えられる。

ウトレンチ・第1号竪穴式住居跡



第30図 ムトレンチ・第1号竪穴式住居跡および出土遺物

第11表 Uトレンチ・第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	色調	備考
				口径	底径	器高					
1	土師器	坏	床面	12.4	5.1	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	灰白色	砂粒少量
2	土師器	坏	覆土	11.9~14.1	5.8~6.7	5.8~6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切	にぶい橙色	歪み、砂粒少量
3	土師器	甕	覆土	-	10.2	-	ヘラナデ	ナデ	-	褐灰色	砂粒少量
4	土師器	甕	覆土	10.6	-	-	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	褐灰色	細礫微、砂粒中量
5	須恵器	壺	覆土	9.5	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	灰黄褐色	突帯、砂粒少量

ACトレンチ・第1号竪穴式住居跡 (第31図)

- 〔位置〕基本層序第～層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- 〔重複〕調査した範囲では確認されなかった。
- 〔平面形・規模〕全体形を確認していないが、一辺が約5mの方形であると思われる。南北を結ぶ壁の方位はN-15°-Eである。
- 〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは東壁では8cmを、南壁の高位で30cmを計る。
- 〔床〕ほぼ平坦で、部分的に硬化面がみられる。
- 〔壁溝〕北壁、東壁で確認された。幅は12cm～20cm、深さは約10cmを計る。
- 〔柱穴・ピット〕6基のピットを確認した。Pit-1・2は主柱穴、Pit-2からPit-4は壁柱穴の可能性が想定される。確認面からの深さはPit-1からPit-5は約30cm、Pit-6は60cmを計る。
- 〔カマド〕南壁の西寄りに位置する。長楕円形を呈し、扁平な礫を順に折り重ねるようにして造られた石組みのカマドである。確認した礫の数量は10個で、礫付近の床面では火床面が確認された。なお、このカマドは保存状態が良好であったため遺跡保存の意から精査は行わないものとした。
- 〔その他の施設〕西壁の北寄りで出入口と思われる施設を検出した。この施設は床面から約20cmほど隆起しているローム質の盛土である。この盛土は、その上面が焼けて赤変しており、検出時において覆土との相違が認められ容易に見分けることができた。盛土の下部には壁溝が通っている。また、本住居の中央付近から屈折して東隅を通り住居外へと続く溝跡を検出した。確認できた範囲では、総延長約7m50cm、幅28～44cm、深さ約20cmを計る。溝の出入口付近にあたる住居壁の東南隅からは、溝を覆う粘土層も検出した。この溝跡は、西高東低の傾斜面上に走向しており、斜面を利用した排水溝としての役割を果たしていた可能性が考えられる。
- 〔堆積土〕6層に分層され、自然堆積土であると思われる。3層上面で白頭山火山灰を検出した。
- 〔出土遺物〕出土遺物のうち、図示しえたものについては、第32図1～7までである。1は、土師器坏である。口縁がやや外反し、ロクロ整形による稜がみられる。内面を黒色処理しミガキが施されている。2・3は、土師器甕である。2は口縁部から胴部にかけてハケメが施されている。内面および胴下半部の調整は、磨滅により確認することはできなかった。胎土は細礫を少量、砂粒を中量含む。3は口縁部がくの字状に外反し口唇は丸みを帯びている。3mm程度の細礫を多量に含む。磨滅がひどく、調整はわずかに

外面のヘラナデを確認するに限られた。色調は、にぶい黄橙色を呈する。4は、須恵器壺である。頸基部の形態から長径壺であると思われる。頸基部に突帯を有し、肩部から胴部にかけて強く張り出す球胴形を呈する。色調は外面が黄灰色、内面が灰色を呈している。蛍光X線分析の結果、搬入品と推定されている(第 章参照)。5～8は、須恵器壺である。5と6、7と8は同一個体と考えられる。断面の膨らみ、器厚からすべて大甕であると思われる。外面の調整は共通して平行叩き目が施されている。5・6は平行叩き目の平行線の痕跡だけが残るのに対し、7・8は平行線の中に格子目状若しくは縄目状の痕跡が残る。また5・6は当て具痕が明確で、凹凸が著しい。逆に、7・8の内面は変化に乏しく叩きを施した後、内面の当て具痕をナデ消したものである。蛍光X線分析では5・6が搬入品、7・8が五所川原産と推定されている。

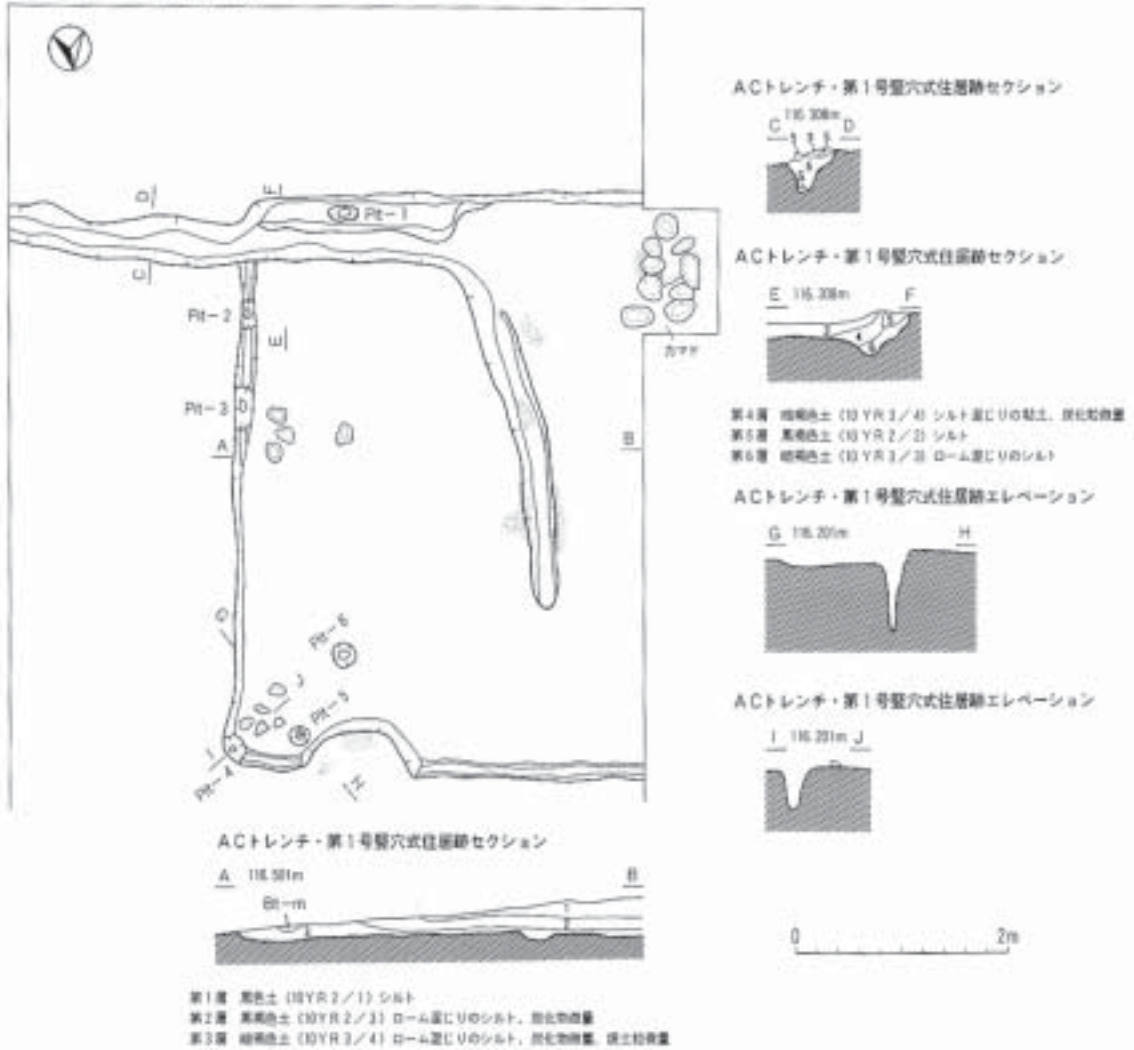
〔時期〕堆積土、出土遺物から10C初頭～10C前半に属するものと思われる。

2. 小結

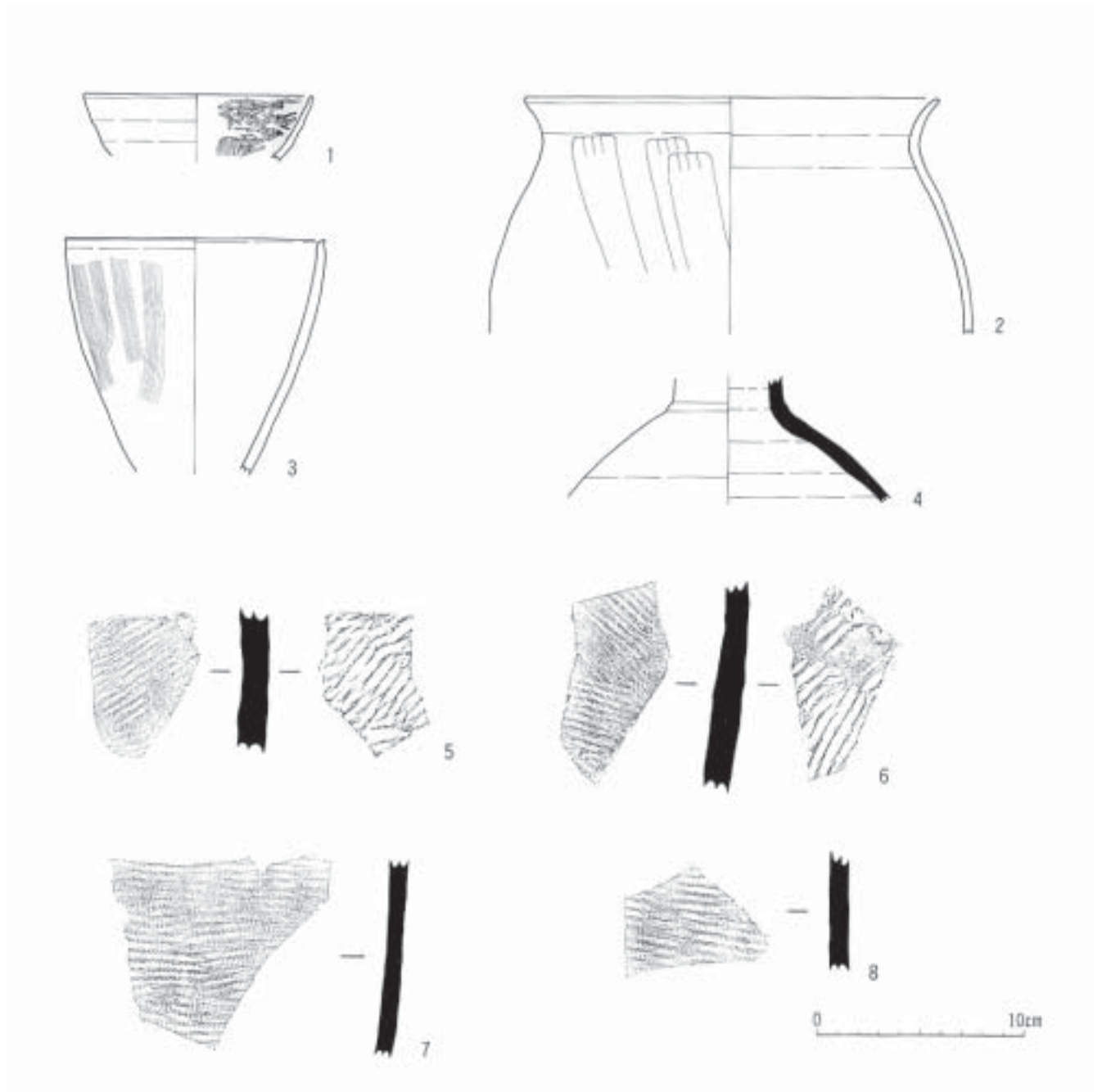
前述のとおり、今年度の小牧野遺跡の発掘調査で検出した平安時代の遺構は竪穴式住居跡3軒である。いずれの住居跡も現在の野沢集落から環状列石をつなく、尾根道沿いで検出した。これらの住居跡にみられる共通性として挙げられるのは住居の方向である。いずれも南北を結ぶ西あるいは東側の壁は、N-15°-E～N-30°-Eの方向にあり、カマドや出入口等の施設が統一された位置に設けられていた可能性が想定される。さらに、住居跡は、尾根道に設置した約20ヶ所の小規模なトレンチから高密度に検出されていることから、一つの集落として意図的に配列していた、という可能性も考えられる。

また、ACトレンチ・第1号竪穴式住居跡は、石組のカマド、出入口状の盛土、住居内から住居外へと続く溝跡などの施設が確認されている。溝跡については朝日山(3)遺跡などでも検出されている(青森県教育委員会 1997)ものの、類例は未だ少ない。今後の調査で、これらの施設の用途が解明され、小牧野遺跡における平安時代の人々の暮らしを知る手掛かりとなるのではないだろうか。

ACトレンチ・第1号竪穴式住居跡



第31図 ACトレンチ・第1号竪穴式住居跡



第32図 ACトレンチ・第1号竪穴式住居跡および出土遺物

第12表 ACトレンチ・第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	色調	備考
				口径	底径	器高					
1	土師器	坏	覆土	10.1	-	-	ロクロナデ	ミガキ	-	明黄褐色	内面黒色処理
2	土師器	甕	覆土	21.0	-	-	ヘラナデ	ナデ	-	にぶい黄橙色	礫多量・磨滅
3	土師器	甕	覆土	12.6	-	-	ハケメ	ナデ	-	にぶい橙色	磨滅
4	須恵器	壺	溝跡粘土	-	-	-	ロクロナデ	ナデ	-	黄灰色	
5	須恵器	甕	覆土	-	-	-	タタキメ	当て具痕	-	褐灰色	
6	須恵器	甕	覆土	-	-	-	タタキメ	当て具痕	-	褐灰色	
7	須恵器	甕	溝跡粘土	-	-	-	タタキメ	ナデ	-	褐灰色	
8	須恵器	甕	溝跡粘土	-	-	-	タタキメ	ナデ	-	褐灰色	

第4節 縄文時代～近現代に相当する道路状遺構

今回の調査では11ヶ所の調査区から帯状に土壌が硬化した部分を数条にわたって検出した。ここでは視覚的ならびに触覚的にそれが認められるものを道路状遺構、その認定が難しいものをその他の土壌硬化面として分けて記述していく。なお、これらの遺構は、その上あるいは下に、時期が特定できる堆積層を確認ないかぎり、時代時期の判別は難しく、また、一部の調査区において各時代の道路状遺構と重複している箇所も認められることから、ここでまとめて記述することにした。

1. 各調査区における道路状遺構の様相

道路状遺構は、N、O、R、S、T、V、W、X、Y、AAトレンチの10ヶ所の調査区で検出している。これらの調査区は、平成9年度報告で想定した礫の運搬経路1の周辺に設定したものである。

時期は、縄文時代、平安時代、近現代に属するものが認められるが、特定できるものは少ない。今回検出した道路状遺構は、いずれも尾根上に形成されており、土壌の堆積作用が小さく、浸食作用が大きいという立地条件が起因して層位的な時期の特定を困難にしている。以下、トレンチごとに詳述していく(第33・34図)。

Nトレンチ

〔位置・確認〕調査区中央～北寄りに、1条を確認した。

〔形状・規模〕ほぼ直線的で、走向方向はN-46°-Eである。幅は48～75cmを計る。

〔重複〕なし

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、第層あるいは第層中に形成されている。上面には第層が堆積しており、平安時代～近現代のものと考えられる。

Oトレンチ

〔位置・確認〕調査区西寄りに、8条(R-1～8)を確認した。

〔形状・規模〕いずれも直線的で、走向方向はN-55°-Wである。幅は、R-1が55cm以上、R-2が25～70cm、R-3が30～40cm、R-4が95～125cm、R-5が55～70cm、R-6が35cm、R-7が45cm、R-8が40～70mを計る。

〔重複〕古い方からR-7・8 5・6 4 3 2 1の順に重複している。

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、R-1～3が第層上面、R-3・4・5が第層および第層上面、R-6が第層上面に堆積する間層の上面、R-7・8が第層上面と第層下面の間に形成されている。堆積土から、時期を判断すると、R-1～5が近現代、R-6が平安時代、R-7・8が縄文時代のものと考えられる。

Rトレンチ

〔位置・確認〕調査区西寄りに1条を確認した。

〔形状・規模〕ほぼ直線的で、走向方向はN-42°-Wである。幅は推定150cm程と思われる。

〔重複〕なし

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、第 層あるいは第 層中に形成されている。上面には第 層が堆積しており、平安時代～近現代のものと考えられる。

S トレンチ

〔位置・確認〕調査区西寄り、現在道と並行して、4条（R-1～4）を確認した。

〔形状・規模〕いずれもほぼ直線的で、走向方向はN-21°-Wである。幅は、R-1が推定60cm程、R-2が55～65cm、R-3が60～80cm、R-4が削平され不明である。

〔重複〕R-2の上位にR-1・3が挟む。R-4は現在道に削平されている。

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、R-4が第 層上面に形成されているが、角礫を含んでいることから、近現代のものと考えられる。R-1・3が第 層あるいは第 層中に形成されており、平安時代～近現代のものと考えられる。R-2は第 層に形成され、縄文時代の可能性も考えられる。

T トレンチ

〔位置・確認〕調査区の西寄りに、3条（R-1～3）を確認した。

〔形状・規模〕いずれも直線的で、走向方向はN-7°-Eである。幅はいずれも35～50cmを計るものと思われる。

〔重複〕R-2の上位にR-1・3が挟む。

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、R-1・3が第 層と第 層の間層aの上面に、R-2が第 層上面に形成されていることから、近現代のものと考えられる。また、テストトレンチを設け、堆積を観察した結果、硬化面は複雑な様相を呈しており、第 層上面にも硬化面が形成され、平安時代に属するものも確認した。

V トレンチ

〔位置・確認〕調査区中央に2条（R-1・2）を確認した。また、それらの東西に2ヶ所の硬化面も確認した。

〔形状・規模〕2条の硬化面は、いずれも直線的で、途切れている。走向方向はN-43°-Wである。幅はR-1が23～42cm、R-2が35～45cmを計る。また、その東西2ヶ所に直径約45cmの硬化面を確認した。

〔重複〕なし

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、いずれも第 層上面に形成され、縄文時代の可能性も考えられる。

W トレンチ

〔位置・確認〕調査区の西寄りに1条（R-1）、ほぼ中央西寄りに1条（R-2）を確認した。

〔形状・規模〕いずれもほぼ直線的で、走向方向はR-1がN-7°-W、R-2がN-8°-Eである。幅はR-1が推定40～50cm、R-2が30～40cmを計る。

〔重複〕なし

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、いずれも第 層上面に形成され、縄文時代の可能性も考えられる。

Xトレンチ

〔位置・確認〕調査区中央西寄りに1条を確認した。

〔形状・規模〕ほぼ直線状で、走向方向はN-19°-Wである。幅は35～45cmを計る。

〔重複〕なし

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、いずれも第層上面に形成され、縄文時代の可能性も考えられる。

Yトレンチ

〔位置・確認〕調査区西側に1条を確認した。

〔形状・規模〕外縁が凹凸を呈して、途切れている。走向方向はN-9°-Eである。幅は40～65cmで、一部100cmを計るところもある。

〔重複〕なし

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、第層あるいは第層中に形成されている。上面には第層が堆積しており、平安時代～近現代のものと考えられる。

AAトレンチ

〔位置・確認〕調査区の東西両端に2条を確認した。

〔形状・規模〕いずれも直線的で、走向方向はR-1がN-52°-E、R-2がN-25°-Eである。幅はいずれも35cmを計る。

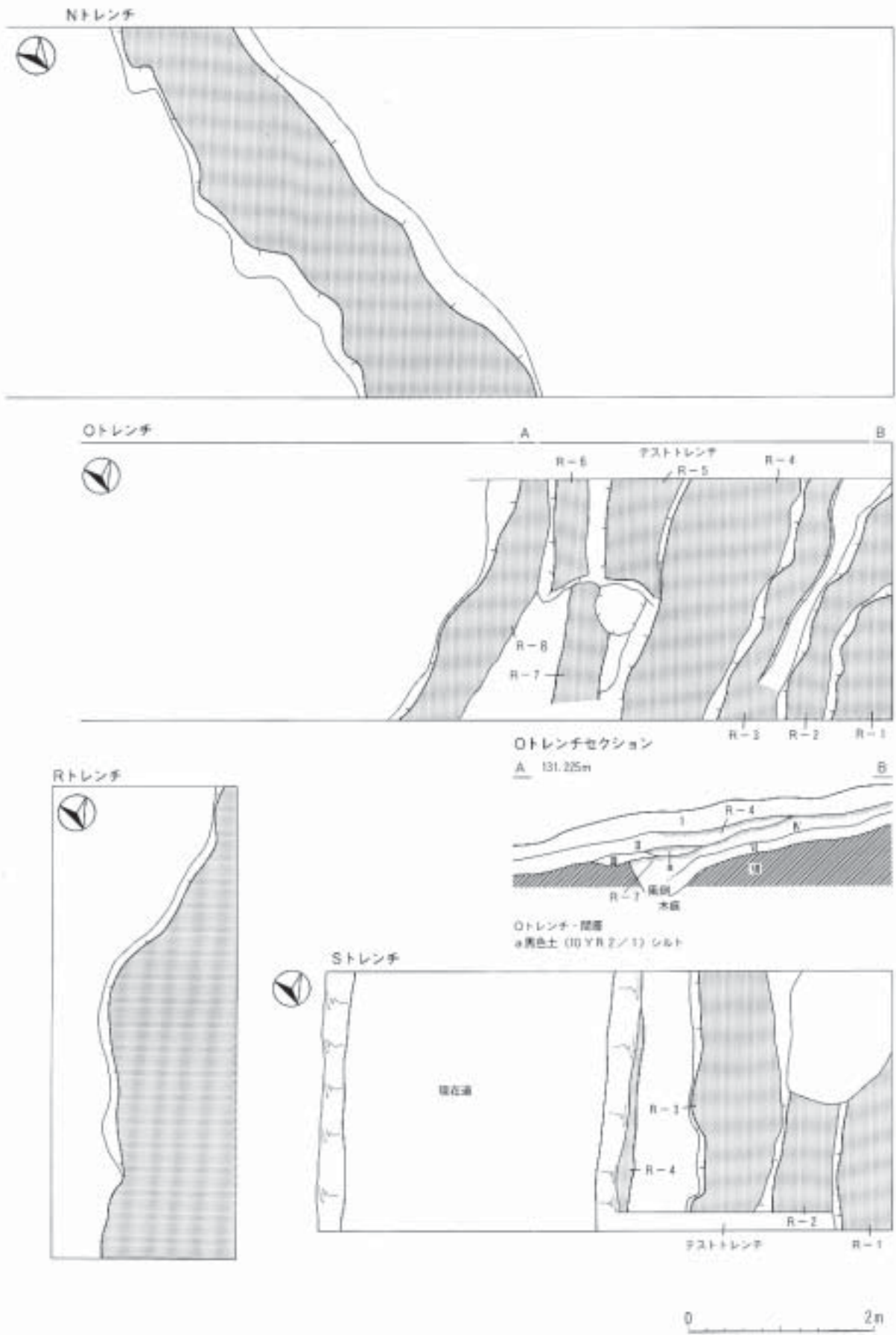
〔重複〕R-1の上面に礫が残置している。

〔硬化面・堆積土〕硬化面は、いずれも第層あるいは第層中に形成されている。上面には第層が堆積しており、平安時代～近現代のものと考えられる。

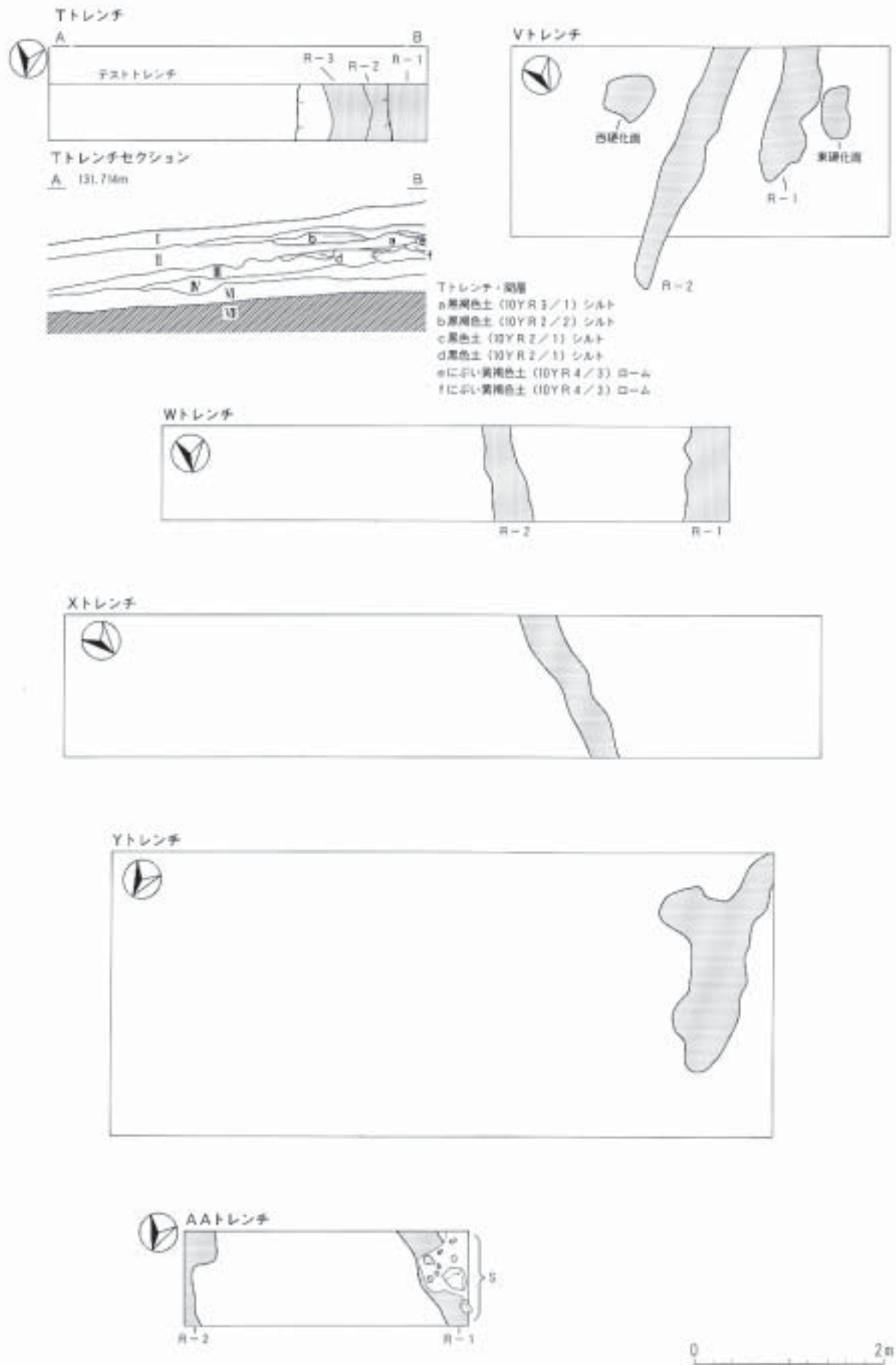
2. その他の土壌硬化面

土壌硬化面は、Dトレンチの1ヶ所で検出している(第35図)。環状列石中心から、北へ約160mの地点に位置している。この調査区は、平成9年度刊行の報告で想定した礫の運搬経路3の周辺に設定したものである。

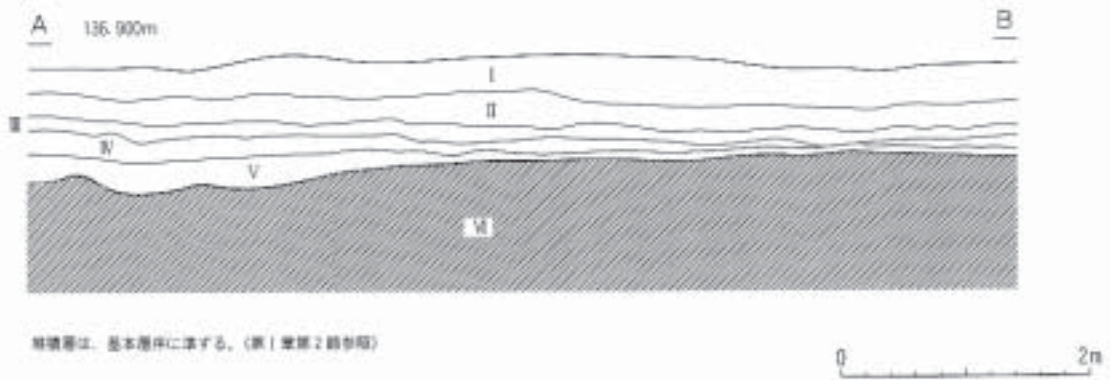
今回検出した土壌硬化面の場合、硬化面は幅約1～2mの帯状に広がっている。走向方向はN-90°-Eである。堆積層を観察してみると、現代から弥生時代にかけての堆積層(第～層)では、厚さがほぼ均一化しているのに対し、縄文時代の堆積層(第層)は、硬化面部分が凹んでおり、何らかの圧力が加わり、圧縮されたものと考えられる。また、この硬化面の性格を考えるうえでの一つの判断資料として、土壌硬度の測定を試みた。測定にあたっては、平面では硬化面とその周辺に方眼を重ねた部分、断面では第層の堆積層に『山中式土壌硬度計』を用いて実施した。測定の結果、圧縮された部分の硬度が他所に比べて高い数値を表示し、土壌硬度計を使用することによって、より正確な土壌硬化の広がりを確認した(第3章第3節参照)。時期については、第層堆積土中に縄文後期初頭～前葉の土器(第群3類主体)が主体的に出土していることから、環状列石構築期の直前期に属するものと考えられる。



第33図 各トレンチにおける道路状遺構(1)



第34図 各トレンチにおける道路状遺構(2)



第35図 Dトレンチにおける土壤硬化面

第 章 小牧野遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

小牧野遺跡から出土した 8 点の須恵器片資料の蛍光 X 線分析の結果について報告する。

分析データは第 13 表にまとめている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG-1 による標準化値で表示されている。

第 36 図には、K-Ca、Rb-Sr 分布図を示す。

両分布図には、約 100 点の五所川原窯群出土の須恵器片資料の分析データに基づいて五所川原領域を示してある。描き易いために、長方形で領域を描いてあるが、平均値を中心にして両軸に沿って、 ± 2 (標準偏差) をとってある。この領域は定量的に領界を示している訳ではないが、比較対照のための領域としては十分役に立つ。

両分布図で五所川原領域に分布するのは、4、5 の 2 点だけで、他の資料は五所川原領域には分布しない。

こうして、4、5 の 2 点の須恵器資料は五所川原窯群の製品である可能性が出て来た訳であるが、このことを確認するために、判別分析を行った。判別分析に使われる重要因子はマハラノビスの汎距離の二乗値 (D^2) である。K、Ca、Rb、Sr の 4 因子を使って五所川原窯群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値 [D^2 (五所)] を計算した結果も第 13 表に記載してある。

五所川原窯群への帰属条件は、5% の危険率をかけたホテリングの T^2 検定に合格する領域をもって決められる。それは D^2 (五所) 10 である。第 13 表より、4、5 の資料は五所川原群への帰属条件を満足することがわかる。

ところが、五所川原窯群の製品であるためには、もう一つ条件がある。五所川原窯群の製品には一般的に、Fe の含有量が多く、そのため、胎土は外見上、暗褐色ないしは黒褐色を呈する。五所川原窯群の須恵器片の分析データから、 $Fe > 3.0$ (JG-1 による標準値) であることがわかっている。K、Ca、Rb、Sr の 4 因子から導き出された五所川原窯群への帰属条件を満足した 4、5 の 2 点は Fe 因子でも五所川原窯群の製品である条件を満たす。したがって、4、5 は五所川原窯群の製品であると判断される。

他の資料は K、Ca、Rb、Sr の 4 因子による帰属条件のみならず、Fe 因子でも五所川原窯群に帰属しないことは第 13 表からわかる。とりあえず、ここでは産地不明としておいたが、両分布図での分布位置より、産地不明となった 6 点の須恵器胎土について、もう少し考察を進めることができる。

第 36 図の両分布図より、3 だけは化学特性が異なることがわかる。他の資料、1、2、6、7、8 の 5 点はまとめて分布しているのみならず、Fe、Na 因子でも類似していることは表 1 からわかる。つまり、これら 5 点の須恵器の胎土は同じであり、同じ産地の製品と考えられる。では、その産地はどこか。目下のところ、その産地は特定されていないが、東北地方太平洋側の産地の製品ではあり得ない。東北地方日本海側の秋田、山形両県から、富山、石川両県に至る北陸地方にその産地を求めなければならないであろう。

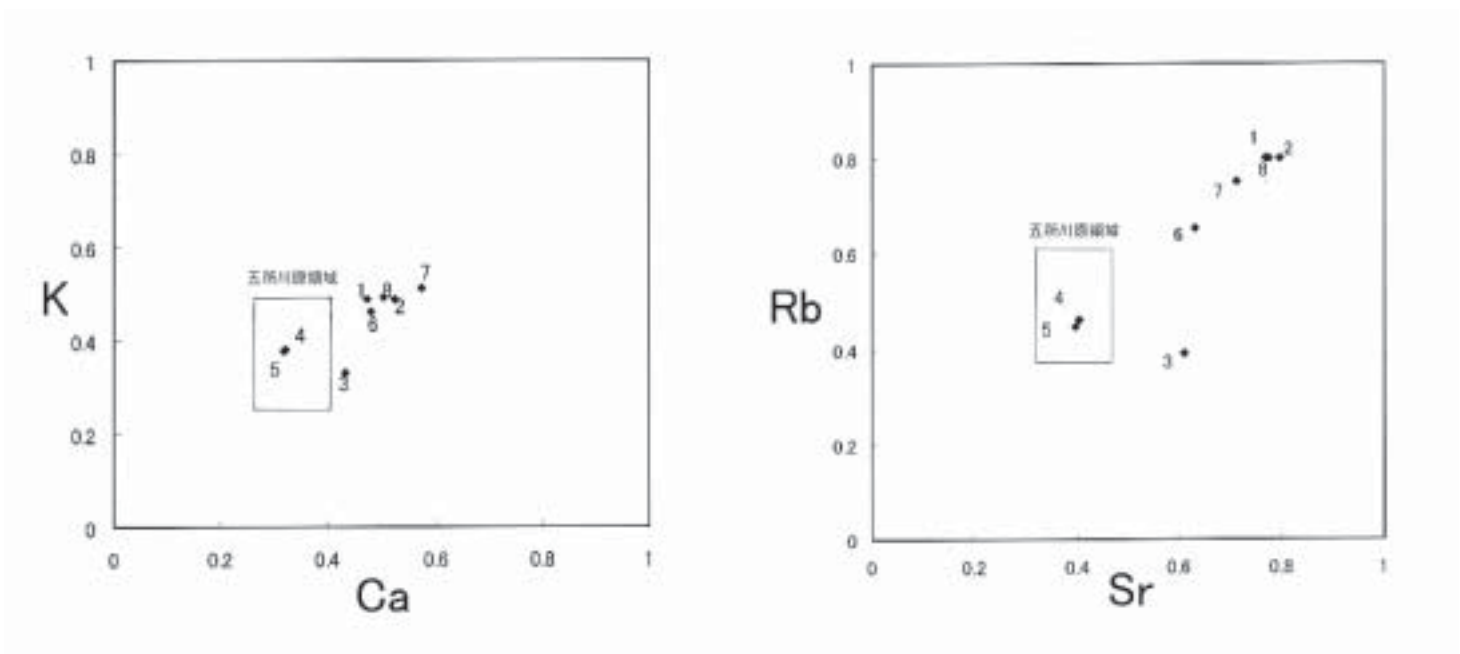
3 は K、Rb 量が比較的少ないところから、そのような特徴をもつ東北地方太平洋側の生産地の製品である可能性をもつ。

このように数少ない須恵器資料の分析データからでも、地元、五所川原窯群の製品以外に、外部地域からの搬入品がかなりあることがわかる。しかも、外部地域の産地は1ヶ所ではない。複数の産地から供給されていたことは明白である。

今後、これらの須恵器が小牧野遺跡のどの場所から出土するのか、出土状況と重ねて考察することによって、より多くの考古学的情報を出すことができるだろう。

第 13 表 小牧野遺跡出土須恵器の分析データ

	出土地点	図版番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D ² (五所)	D (瀬谷子)	推定産地	備考
1	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	第32図4 写真21-4	0.488	0.474	1.70	0.802	0.768	0.421	100	206	不明	2と同じ
2	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	第32図4 写真21-4	0.489	0.522	1.67	0.801	0.797	0.459	112	228	不明	
3	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	第32図5 写真21-5	0.331	0.433	1.60	0.390	0.609	0.361	46.5	28.2	不明	
4	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	第32図8 写真21-8	0.379	0.321	3.58	0.464	0.406	0.251	0.48	43.6	五所川原	
5	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	第32図7 写真21-7	0.377	0.316	3.66	0.447	0.397	0.246	1.6	42.2	五所川原	
6	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	写真22-6	0.462	0.480	1.66	0.656	0.629	0.427	33.8	117	不明	
7	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	写真22-7	0.510	0.576	1.68	0.751	0.711	0.428	63.3	172	不明	
8	A C トレンチ 第1号竪穴式住居跡	写真22-8	0.491	0.502	1.70	0.800	0.773	0.429	102	214	不明	



第 36 図 須恵器の両分布図

第 章 分析と考察

第 1 節 遺跡数と住居跡数からみた環状列石構築期の社会的様相

現在、青森県内の遺跡数は、旧石器時代から中・近世にかけて、約4,200箇所の遺跡が確認されている。うち、学術調査や増え続ける開発行為に伴う緊急調査などによって、十分な内容を把握できる遺跡はごく一部にしか過ぎない。それでも、近年の詳細な分布調査も充実し、青森県教育委員会により最新の県内遺跡地図も刊行され(青森県教育委員会 1998)時代や時期を追った遺跡の増減を把握できるようにまでにはなった。また、青森県内で検出された縄文時代の住居跡も集成され(青森大学考古学研究所編 1998)これについても、各時代の住居跡の増減を把握することができるようになった。

本項では、環状列石が構築された縄文時代後期における社会とその特色を理解するため、一つの資料として遺跡数と住居跡の増減表を作成し、資料の解釈を試みることにした。資料の作成にあたっては、平成10年度に刊行された青森県遺跡地図(青森県教育委員会 1998)ならびに青森大学考古学研究所研究紀要(青森大学考古学研究所編 1998)の一覧表を基本資料とした。なお、地域的な偏在傾向が認められるため、原則的に行政区分による地域割りを行った。

1. 青森県内の遺跡数

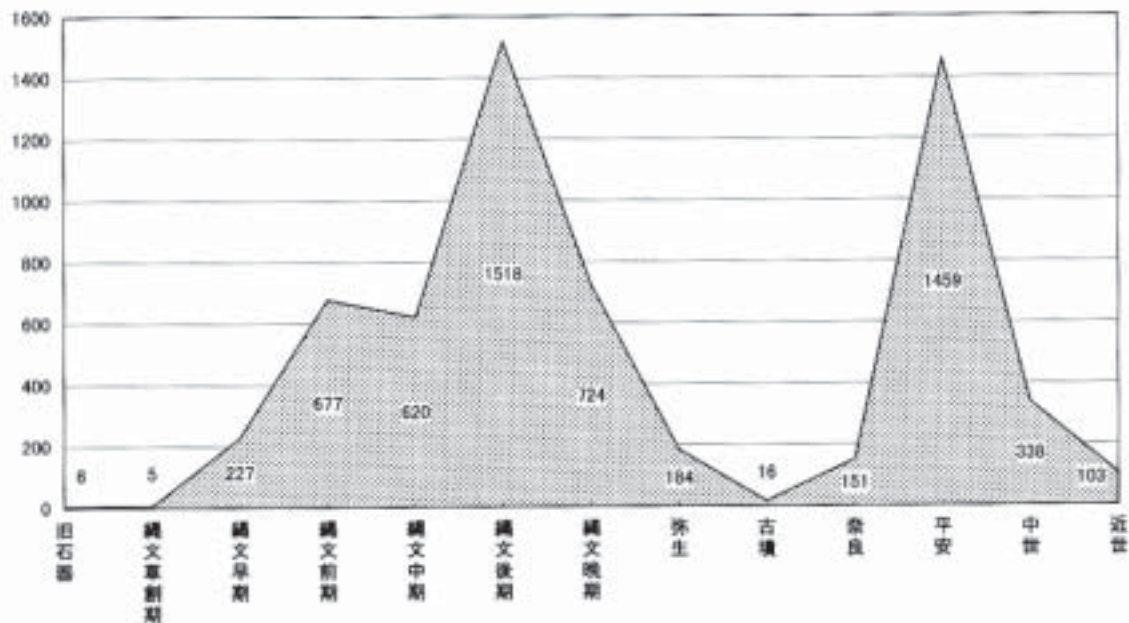
周知の遺跡として登録されているのは平成10年3月31日現在で4,226遺跡である(青森県教育庁文化課1998)。各時期・時代の遺跡数で計上すると、下記ようになる。なお、ここでは時代・時期ごと計上するため、1遺跡で複数の時代・時期に該当する場合は、それらの区切りで分割し、それぞれをカウントした。よって、全体の合計は実際の遺跡数より多くなっている。

旧石器時代	6 遺跡 (0.1%)
縄文時代(草創期～晩期)	4,367 遺跡 (65.0%)
弥生時代	184 遺跡 (2.7%)
古墳時代	16 遺跡 (0.2%)
奈良時代	151 遺跡 (2.2%)
平安時代	1,459 遺跡 (21.7%)
中世	338 遺跡 (5.0%)
近世	103 遺跡 (1.5%)
不明	96 遺跡 (1.4%)

以上のことから、県内の遺跡において、縄文時代が全体の6割以上、次いで平安時代が2割を占めることがわかる。

2. 縄文時代における遺跡数と住居跡数

青森県内における縄文時代の遺跡数については、すでに小山修三・及川昭文氏によって提示されている(小山・及川 1996)そこでは、平成4年に刊行された遺跡地図(青森県教育委員会 1992)を基本資料としており、縄文時代の特色を述べるとともに、地域性についても説明している。



第 37 図 青森県内における遺跡数の推移

縄文時代では 4,367 遺跡を数え、その内訳は

草創期	5 遺跡 (0.1%)
早期	227 遺跡 (5.2%)
前期	677 遺跡 (15.5%)
中期	620 遺跡 (14.2%)
後期	1,518 遺跡 (34.8%)
晩期	724 遺跡 (16.6%)
不明	596 遺跡 (13.6%)

となり、縄文時代全体で後期が 3 割以上を占め、それまでの時期に比べると飛躍的に増加していることが理解できる。晩期になると再び遺跡数が減少する(第 37 図)。地域別にみていくと(第 38 図～ 41 図)、早期では上北郡と三戸郡の太平洋側に集中し、他は、それらの 20%にも満たない。前期においては、各地域で全体的に遺跡数が増加する。それでも、早期から継続するかのよう、上北郡と三戸郡に集中している。東津軽郡、西津軽郡も比較的多い。中期と後期はほぼ同じ様相を呈し、上北郡と三戸郡に集中しているが、いずれの地域においても、後期が中期を上回っている。晩期になると三戸郡に集中し、他は激減しほぼ均等的な様相を示している。また、前期、後期の 2 期にピークを持つ地域がほとんどであるが、南津軽郡では後期に 1 ピーク、北津軽では晩期に向けて増加している。中津軽郡は前期にもピークがある様に見えるが、遺跡の絶対数を考慮に入れ、後期に 1 ピークの地域とした。

次に、縄文時代各時期における住居跡の軒数をみてみると、

早期	126 軒 (8.8%)
前期	249 軒 (17.4%)
中期	604 軒 (42.2%)
後期	420 軒 (29.3%)
晩期	33 軒 (2.3%)

となり、住居跡数では中期にピークがあることが分かる。また、前期から中期にかけて急激に増加したものが、後期から晩期にかけて大幅に減少したということもみて取れる。特に後期から晩期にかけての減少率は、約9割と非常に大きいといえる。

地域別にみると(第38図～41図)、早期では遺跡数に比例して上北郡と三戸郡に集中し、下北郡に数軒、他の地域では1軒も確認されていない。前期では、南津軽郡が突出して多く、早期と比べると三戸郡は減少し、他はほぼ同様が増加する様相を示している。中期になると、再び上北郡と三戸郡に集中し、東津軽郡にも多くみられる。後期においても中期とほぼ同じ傾向を示しているが、中期にピークを持つ地域と、後期にピークを持つ地域の二つに大きく分けられる。晩期ではサンプル数が少なく、いずれの地域においても激減する中で、三戸郡が最も多く、次いで南津軽郡、東津軽郡、北津軽郡にみられる。

以上に述べた、縄文時代の遺跡数と住居跡数の増減を関係付けて、地域別にみていく。すると、遺跡数で縄文時代前期、後期の2期にピークを持つ地域では、二つのピークの間に住居跡が増える地域と、ピークにそって住居数が増減する地域の2グループに分類できる。前者には、東津軽郡、上北郡、三戸郡が該当し、前期から後期にかけてピークのある西津軽郡もここに分類できると思われる。さらに、東津軽郡、上北郡、三戸郡においては、増減の傾向だけでなく、遺跡数に対して住居の占める割合においてもほとんど一致している。西津軽郡においては、遺跡数に対し住居跡数が非常に少ない。また、遺跡数のピークに沿って住居跡数も増減する地域には、下北郡が挙げられる。

次に、遺跡数において後期にピークを持つ地域をみると、中津軽郡では遺跡数に沿って住居跡も増減するのに対し、南津軽郡では住居跡数が遺跡数のピークに反していることが分かる。

晩期に向けて遺跡数が増加傾向にある北津軽郡は、どちらかといえば遺跡数に沿って住居跡数も増減する地域であるといえる。

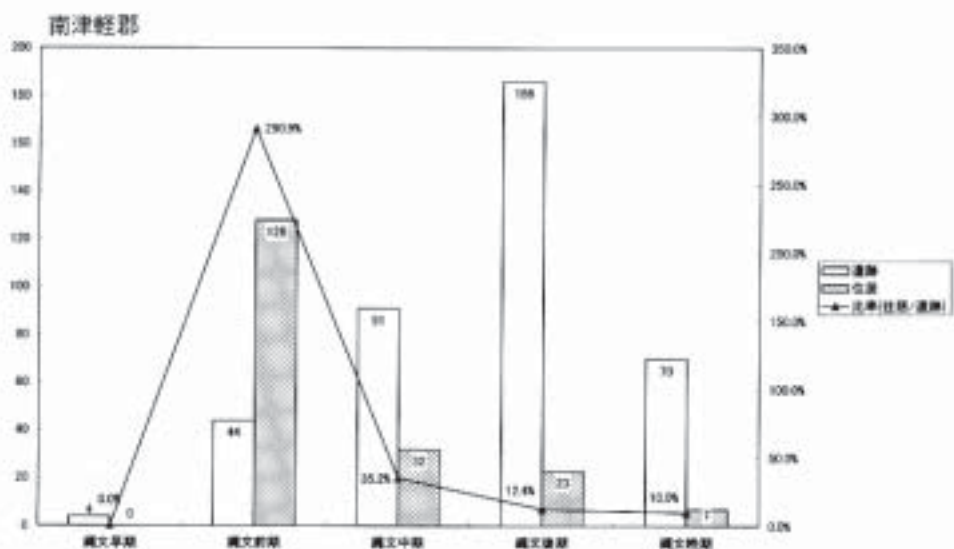
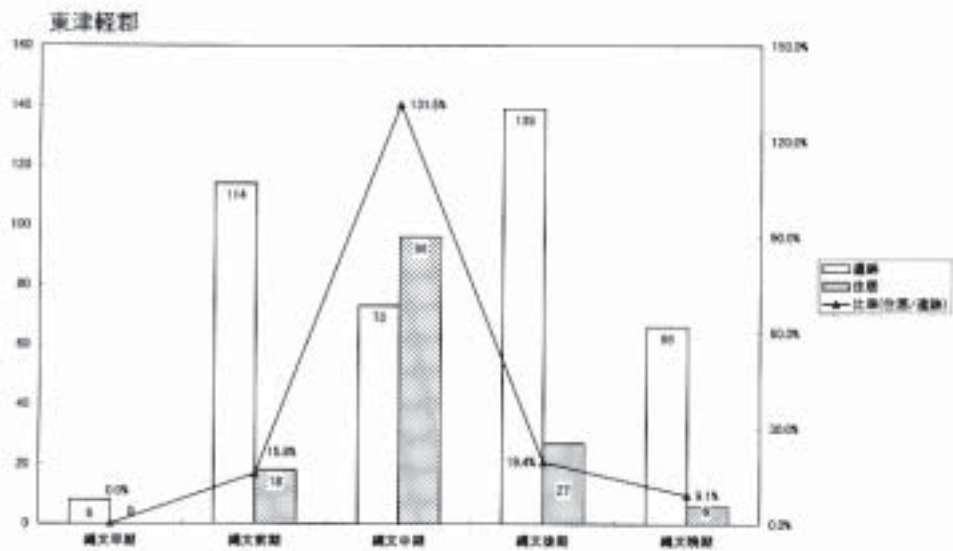
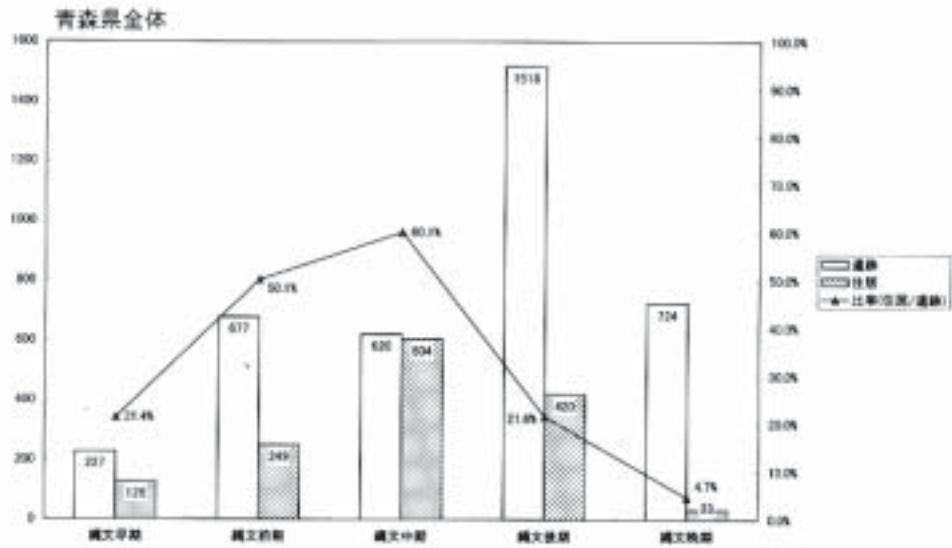
以上のような特徴を挙げると、

青森県内において、縄文時代の遺跡が65%、平安時代の遺跡が20%を占める。

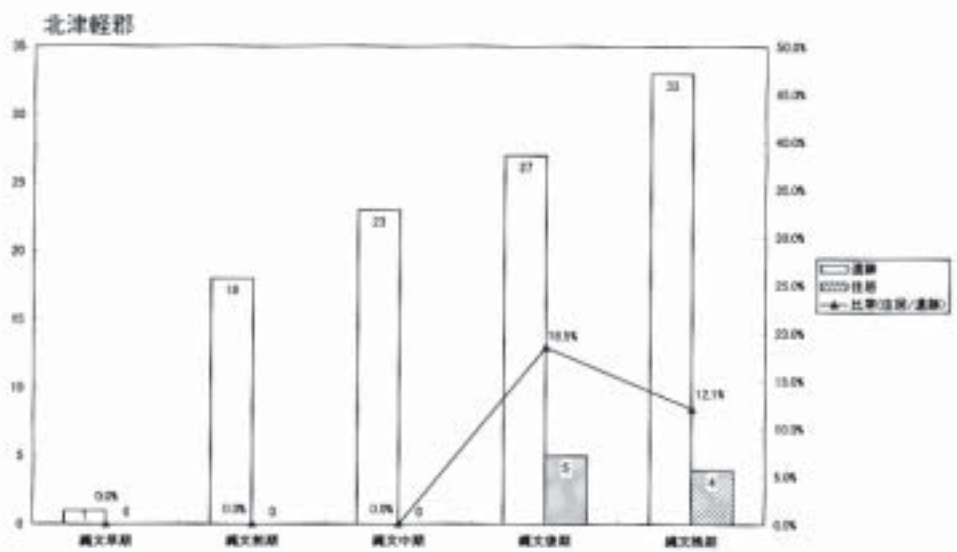
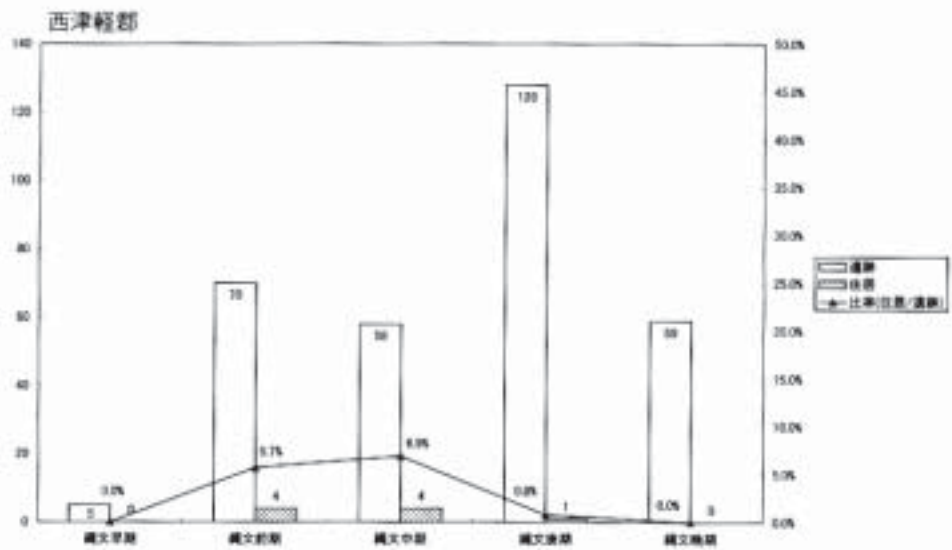
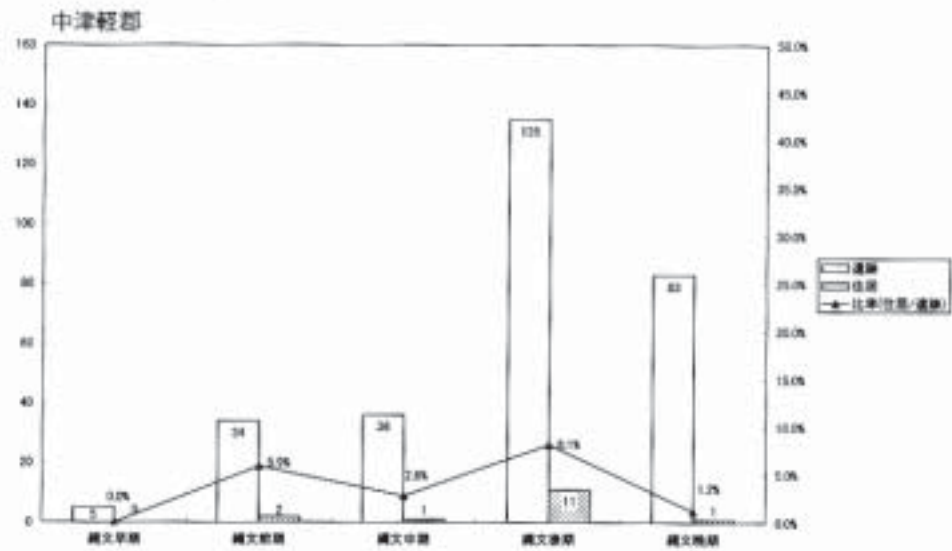
縄文時代における遺跡数においては、早期から前期にかけて増加し、中期で減少、後期に再び増加し、晩期にまた減少するという傾向がみられ、縄文後期が30%以上と最も多く、以下、前期、晩期、中期、早期、草創期の順で減少する。また、北津軽郡を除くいずれの地域においても後期でピークがみられる。早期に関しては上北郡、三戸郡の太平洋側に多く分布し、地域によって様相が異なる時期もある。

縄文時代の住居跡数においては、早期から中期にかけて増加し、後期から晩期へ向けて減少するという傾向がみられ、中期が42.2%と最も多く、以下、後期、前期、早期、晩期の順に減少し、必ずしも遺跡数と比例するものではない。前期に関しては南津軽郡が突出し、地域によって様相が異なる時期もある。

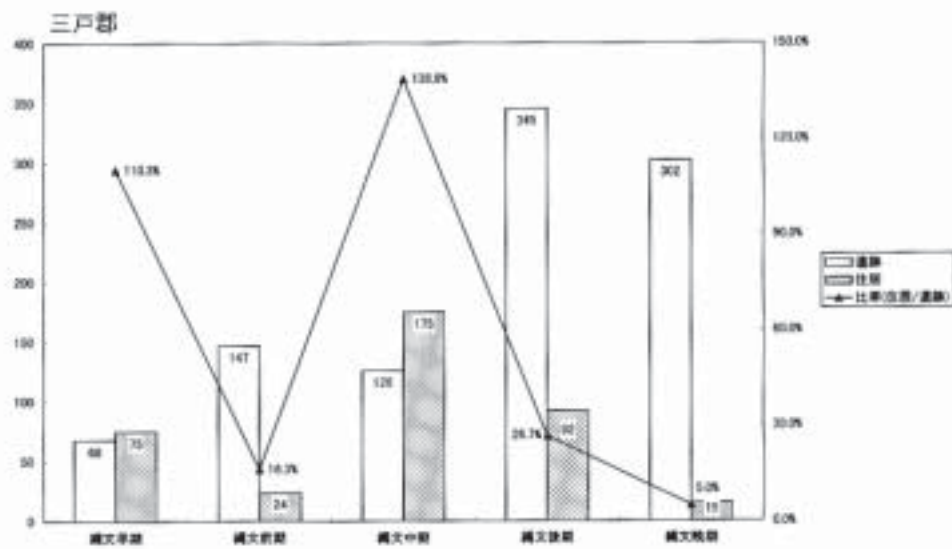
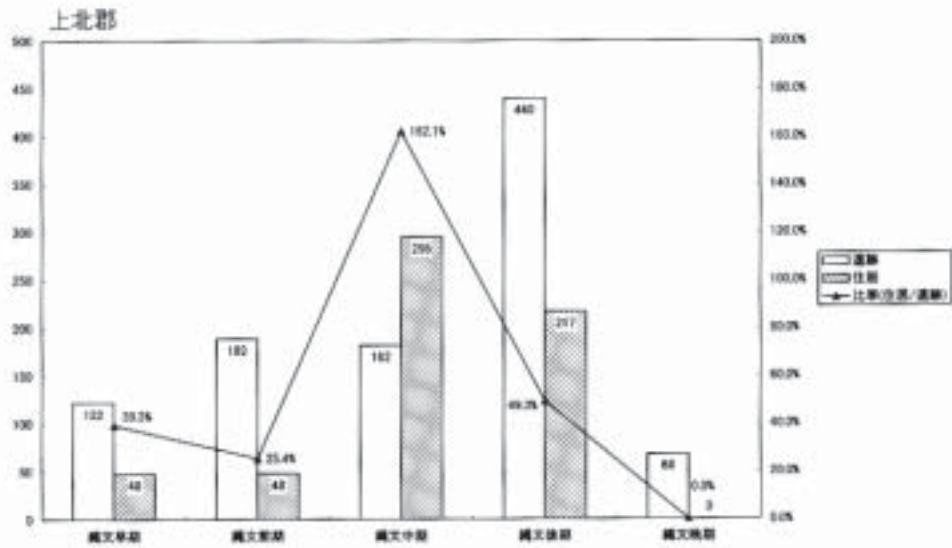
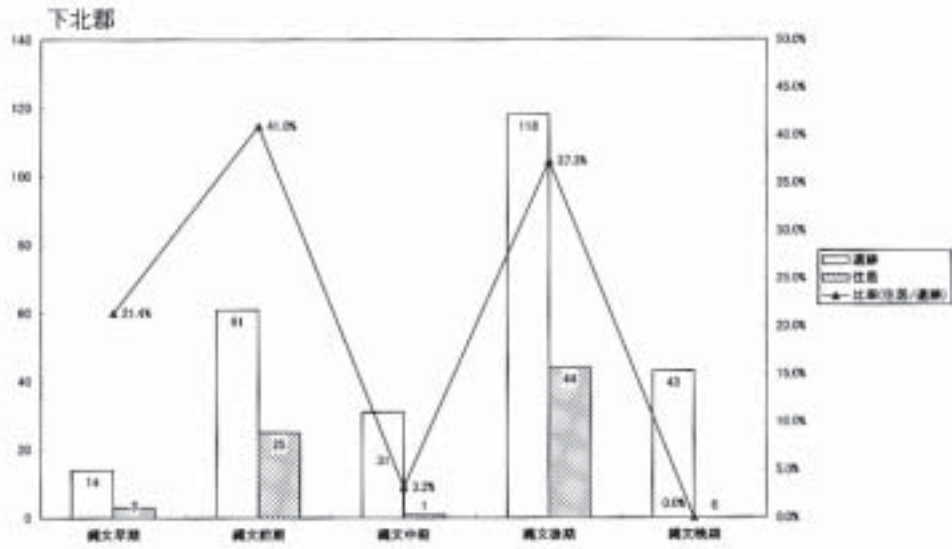
なお、遺跡数と住居跡数は、開発内容やその前提となっている立地条件、すでに開発された地区や現在の植生などによる環境、発掘調査の規模、住居の構造および耐久性などの様々な要件によって異なるため、結果をそのまま受け止めることはできない。



第 38 図 地域別にみた遺跡数および住居跡数の推移(1)



第 39 図 地域別にみた遺跡数および住居跡数の推移(2)



第 40 図 地域別にみた遺跡数および住居跡数の推移(3)



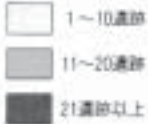
市町村番号及び名称

01 青森市	02 弘前市	03 07 10 13 16 19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	04 08 11 14 17 20	05 09 12 15 18 21 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	06 10 13 16 19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	07 10 13 16 19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	08 11 14 17 20	09 12 15 18 21 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	10 13 16 19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	11 14 17 20	12 15 18 21 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	13 16 19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	14 17 20	15 18 21 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	16 19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	17 20	18 21 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	19 22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	20 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	21 23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	22 24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	23 26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	24 27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	25 28 31	26 29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	27 30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	28 31	29 32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	30 33 35 38 41 44 47 50 52 55	31 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	32 34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	33 35 38 41 44 47 50 52 55	34 37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	35 38 41 44 47 50 52 55	36 39 42 45 48	37 40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	38 41 44 47 50 52 55	39 42 45 48	40 43 46 49 51 54 57 59 62 65	41 44 47 50 52 55	42 45 48	43 46 49 51 54 57 59 62 65	44 47 50 52 55	45 48	46 49 51 54 57 59 62 65	47 50 52 55	48	49 51 54 57 59 62 65	50 52 55	51 54 57 59 62 65	52 55	53 56	54 57 59 62 65	55	56 59 62 65	56 59 62 65	57 59 62 65	58 61 64 67	59 62 65	60 63 66	61 64 67	62 65	63 66	64 67	65	66	67
--------	--------	--	-------------------	---	---	---	----------------	--	--	-------------	---	---	----------	--	--	-------	---	---	--	--	--	---	-------------------------------------	----------	--	----------------------------------	-------	---	-------------------------------	--	--	----------------------------	-------------------------------------	-------------------------	----------------	----------------------------------	----------------------	-------------	-------------------------------	-------------------	----------	----------------------------	----------------	-------	-------------------------	-------------	----	----------------------	----------	-------------------	-------	-------	----------------	----	-------------	-------------	-------------	-------------	----------	----------	----------	-------	-------	-------	----	----	----

なお、本文の地域別には、便宜上、青森市を東津軽郡、弘前市を中津軽郡、八戸市を三戸郡、黒石市を西津軽郡、五所川原市を北津軽郡、十和田市および三沢市を上北郡、むつ市を下北郡に含め記載している。

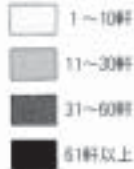
縄文早期における遺跡数

凡例



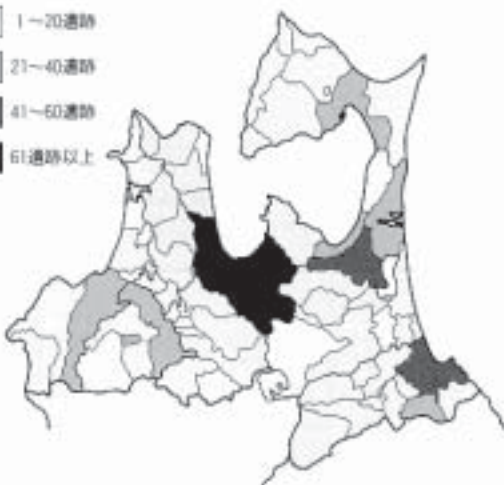
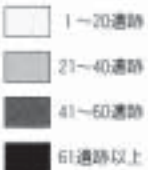
縄文早期における住居跡数

凡例



縄文前期における遺跡数

凡例

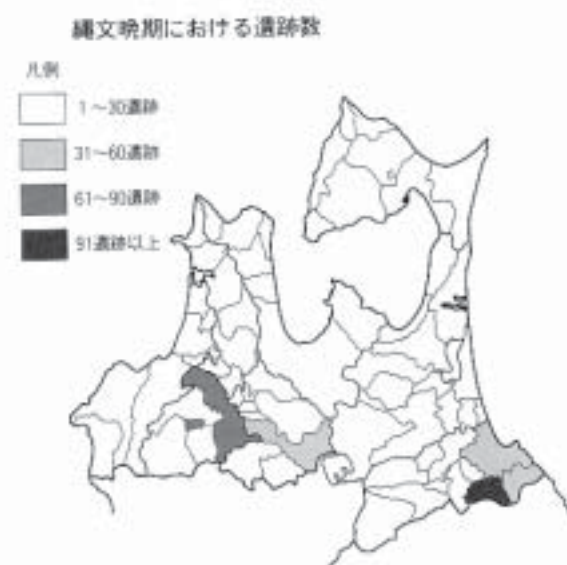
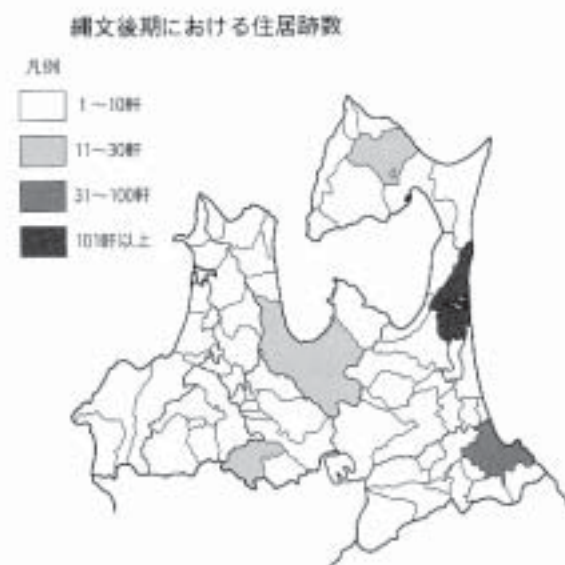
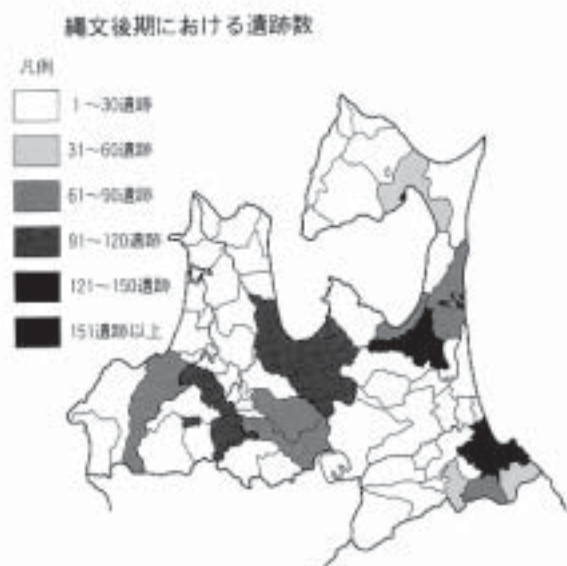
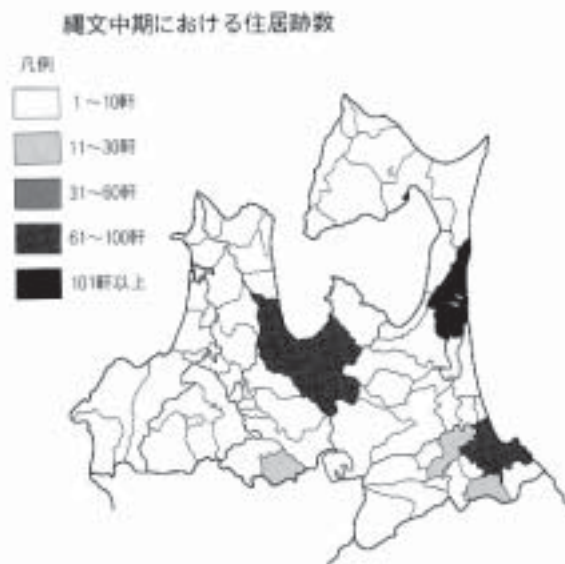
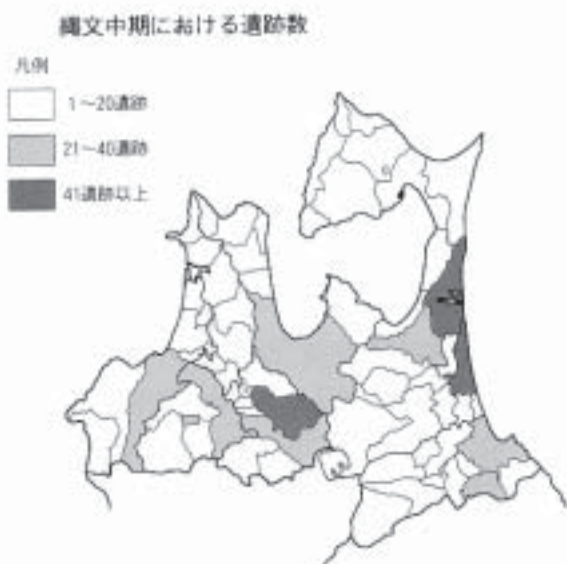


縄文前期における住居跡数

凡例



第 41 図 時期別に見た遺跡数と住居跡数の分布(1)



第 42 図 時期別に見た遺跡数と住居跡数の分布(2)

3. 資料の解釈

これまでみてきた遺跡数と住居跡数の時期的な偏差の背景には、集落の定住性や季節性などが含まれる継続性の問題、集落の規模や人口、性格などが起因しているものと考えられる。そこで、青森県を中心とした東北地方北部における集落の変遷を早期から通観し、後期の環状列石構築期の社会的な様相について考えてみたい。

早期については、近年、北海道函館市中野B遺跡で大規模な集落跡が発見され、全国的に注目されるようになり、北海道および東北地方北部の初期定住化の様相が明らかとなってきた(田中・富永 1998。)岡田康博氏は、遅くとも早期中葉には定住生活が営まれ、拠点集落と考えられる大型の集落が出現すると指摘しており、定住に伴う現象の一つとして大型住居の存在に注目している。また、集落の立地についても海浜部の段丘上に多く分布し比較的大規模な集落ほどその傾向は強いとしている(岡田 1998。)早期の住居跡については、中村哲也・坂本真弓の両氏によっても集成されており(中村・坂本 1998。)その一覧表をみると、八戸市長七谷地遺跡、売場遺跡、赤御堂遺跡、六ヶ所村表館(1)遺跡、新納屋遺跡、下田町中野平遺跡、福地村西張(2)遺跡などで、いずれも太平洋側の海浜部に立地していることがわかる。それが結果として上北郡・三戸郡などの地域において特に発展していることが第40・41図からも読み取ることができる。

前期については、円筒土器文化が東北地方北部から北海道南部にかけて前期中葉に成立する。小林克氏は、最温暖期に向かう早期から前期には「食糧貯蔵型社会」が成立するとし、前期や中期から始まる貯蔵穴を持つ遺跡が、海浜部だけではなく、内陸部にまで拠点的に営まれるようになったと指摘している(小林 1997a。)海浜部の遺跡とは、前記の早期にみられる太平洋側に分布する遺跡が該当し、内陸部の遺跡には碓ヶ関村大面遺跡が代表される。第38図では、県平均で住居数が遺跡数の50%であるのに対し、内陸部の南津軽郡では290%という極めて高い数値となっている。この地域の集落規模の大きさを物語っている。

中期については、関東中部地方においても住居跡数が著しく多く(今村 1997。)人口の増加やそれに伴う大規模、集落拠点集落の定着化が一般的に認められつつある。その最も顕著なのが、青森市三内丸山遺跡の存在である。岡田氏は、拠点集落を三内丸山遺跡を例に、竪穴住居、大型住居、墓、捨て場、盛土遺構、大型掘立柱建造物、貯蔵穴、粘土採掘穴、道路などの施設によって構成される集落とし、前期と比べると集落を構成する施設の種類の増加、大規模かつ長期間継続するものとしている。小林氏は、墓制の相違から円筒土器文化圏において拠点集落と衛星的集落に支えられていると指摘している(小林 1997b。)前者には三内丸山遺跡、天間林村二ツ森貝塚、後者には青森市桜峯(1)遺跡、深浦町津山遺跡などが該当するものと考えられる。第38図～40図では、東津軽郡、上北郡、三戸郡の地域において、遺跡数の減少に対し、住居跡数が増加する傾向が顕著にみられる。つまり、一つの遺跡に対する住居跡の軒数が増えることになるので、これらの地域では集落(あるいは集団、共同体)の規模が大きくなったといえる。これは、岡田氏の説を裏付ける結果となる。その他の地域については、発掘件数の多少による偏りや、地形的なものも考慮に入れて検討すべきであろう。現段階では、青森県全体の和を総じたものとしては、それが認められるが、やはり地域によって異なるものと考えられる。特に内陸部である中津軽郡や南津軽郡について、様々な角度から注意を払っていかなければならない。ちなみに、中期においては、県平均で住居跡数が遺跡数の60.1%を占めており、住居数で最も多い上北郡では162.1%、次いで三戸郡で138.9%、東津軽郡で131.5%となっている。

後期は、その前葉に本遺跡の環状列石が構築された時期である。内山純蔵氏は、平成10年10月に開催された国際狩猟採集民会議青森シンポジウムの中で、遺物の相違、気候の変化などに注目し、中期の三内丸山遺跡を「狩猟からクリ、ヒエ農耕の時期」、小牧野遺跡を、三内丸山遺跡と比較して食料の獲得や調理など日常的な生活道具（遺物）が少なく、逆に祭祀的な遺物の種類の豊富さに注目し「狩猟採集の時期」、後期後半の八戸市風張遺跡や弥生時代前期の弘前市砂沢遺跡を「稲作の時期」と位置付ける傾聴すべき発言をしている。一般に農耕民と狩猟採集民とでは、労働生産性と土地生産性が農耕民の方が当然のごとく高く、生産性の客観的な指標とされるものに人口密度が挙げられる。縄文時代の人口は、小山修三氏が遺跡数から、今村啓爾氏が住居跡数からそれぞれ推定を行っている（小山 1984、今村 1997.）両者とも関東地方においては、縄文中期に急激な人口増加と後期に減少するという見解を示している。人口密度の算出については、様々な前提条件を必要とするが、遺跡数に対する住居の占める割合も条件のうちの一つとして考えられる。第38～40図中の折れ線グラフをみた場合、青森県平均では、中期に増加し、後期に大幅に減少している。人口密度を相対的に考えると、中期が農耕民、後期が狩猟採集民の生産力に近くなるわけだから、内山氏の説も納得することができる。小山・及川氏は、後期の飛躍的な遺跡数の増加について、気候の寒冷化により大規模集落が崩壊し、柔軟性のある小型の集落となり、より広い地域を動き回るといった環境変化に対応する戦略を生み出したのではないかと解釈している（小山・及川 1996.）岡田氏は、後期の集落がそれ以前の時期にはみられなかった尾根筋、谷などへ進出し、集落の小型化、拡散・分散する傾向を示すと指摘している。第38図においても、県平均で、中期よりも住居跡数が減少し遺跡数が増加する傾向がみられる。これについては、後期における大規模集落、拠点集落の減少と集落の小型化、拡散・分散化を理由として挙げるることができる。

中期後半に出現した石棺墓や再葬土器棺墓、大型環状列石は後期初頭から前葉にかけて定着する。いずれの遺構も墓としての機能、あるいはそれと密接に関わるもので、この時期の象徴性を示すものである。石棺墓が検出された青森市山野峠遺跡、平賀町堀合遺跡、大型環状列石が検出された秋田県鹿角市万座・野中堂遺跡（大湯環状列石）、鷹巣町伊勢堂岱遺跡などには、いずれも縄文人の組織力を発揮するだけのそうした施設が存在し、そこにはそれを構築するだけの共同体が当然存在していたはずである。

しかし、それらの周辺からは、その建設に関わっていたはずの人々の集落跡は未だ発見されておらず、それどころか周辺地域内の集落を抱える遺跡と比べて標高の高い所や急な斜面など居住を考えるうえでは立地条件が不利な場所に、墓やそれに密接に関わる遺構が構築されていることが多い。そのような場所に立地する遺跡は、集落と墓が分離する、「集落外型埋葬地」として理解されるべきものであろう。事実、そのような場所から発見される土器棺墓などは、単独で出土し、周知の遺跡からだけではなく、土取工事や耕作時に偶然発見される場合も多い。後期における遺跡数の飛躍的な増加の背景には、集落の拡散・分散化に加えて、集落から墓が分離した分、独立した埋葬地の出現と、その定着が理由として考えられる。

第2節 環状列石の重量分布について

小牧野遺跡の環状列石を構成する礫は、現在2,277個を数える。この中には三重構造の環状列石のほか、一部四重にもみえる弧状列石、環状列石から分岐する直線状列石や、列石の周囲を取り囲んでいる配石遺構、その他、点在する礫などが含まれる。

環状列石や数種の列石、組石、配石はそれぞれ一つの部位あるいは単位として認めることができ、当初の設計の段階から最終形態に至るまで、時間的経過が存在する。そこには、各部位単位が規則的な配置によって構成されていることから、1個1個の礫を地面に設置したり、礫と礫を重ねたりして組み立てられ、1個の礫の設置から部位単位の完成、さらに各部位で構成される列石の最終形態に至るまで順序というものがある。列石の構築順序を知ることは、単に当初の設計から最終形態までの変遷を追えるだけでなく、時間的規模、つまりそこに費やされる労力から見出だされる社会的規模をも知ることができる。本遺跡では、これらの列石、配石が大規模な土地造成によって削平された面や盛土上面に接して構築されており、それらを覆う土壌も地形に応じてほぼ均一的に堆積していることから、層位的にその順序を把握することは不可能に近い。それでも、それらの構築時期が十腰内式土器という単一型式内であることや、列石、配石等がほかの遺構とほとんど切り合っていないことを考えてみれば、配置や位置の関係からおおよその順序は推定できそうである。

本項では、構築の順序を考える上での一材料として、昨年度推定した礫の重量についてさらに詳しく分析し、資料の解釈を試みることにした。

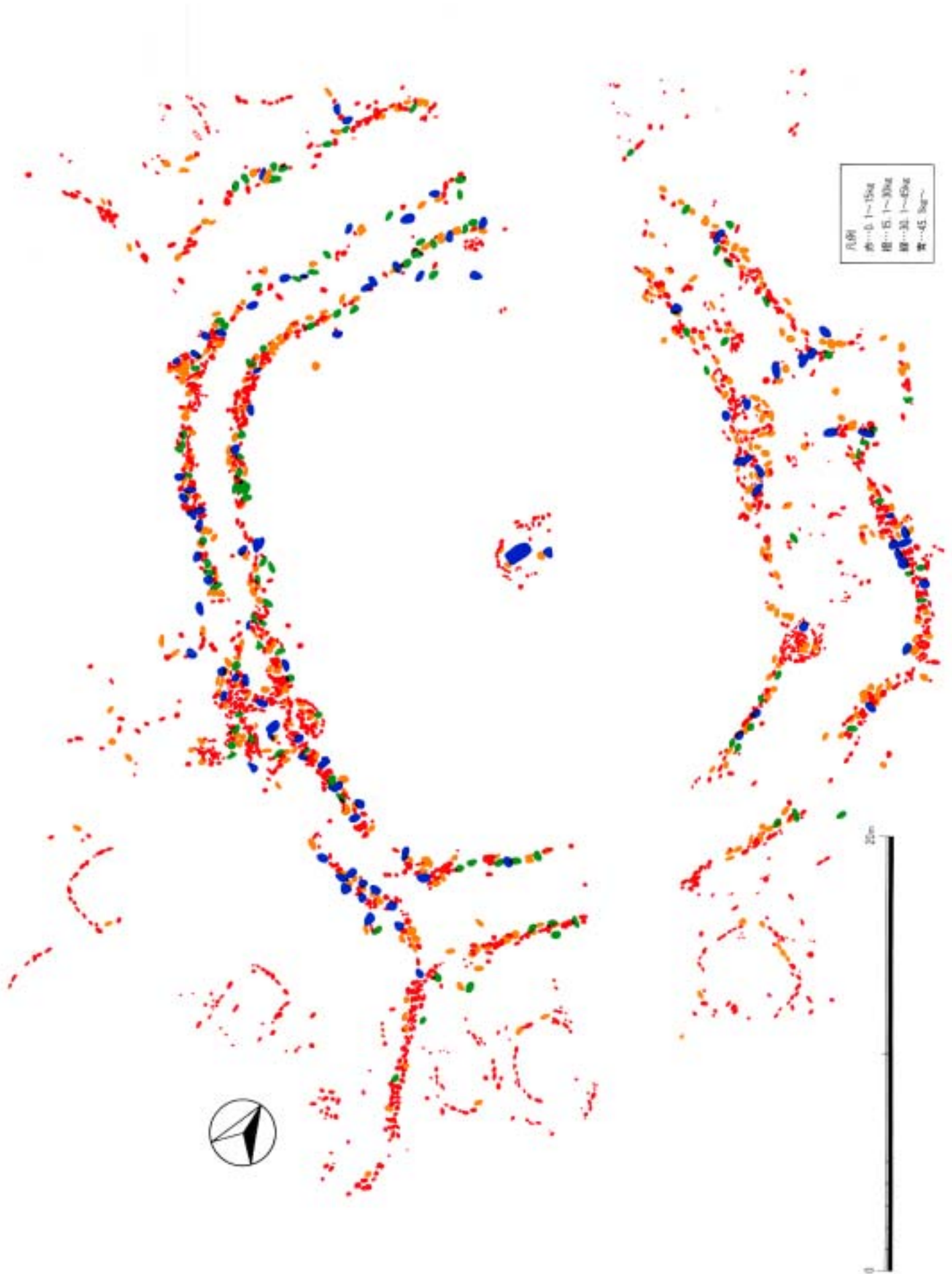
1. 重量の類別

現在2,277個を数える環状列石を構成する礫は、推定重量26,788kg、最小0.1kg以下、最大493.4kg、平均11.8kgを計測している(計測値の詳細は昨年度の報告書に掲載)。運搬された礫を15kgごとに分別して、その数量と重量の関係をみると、

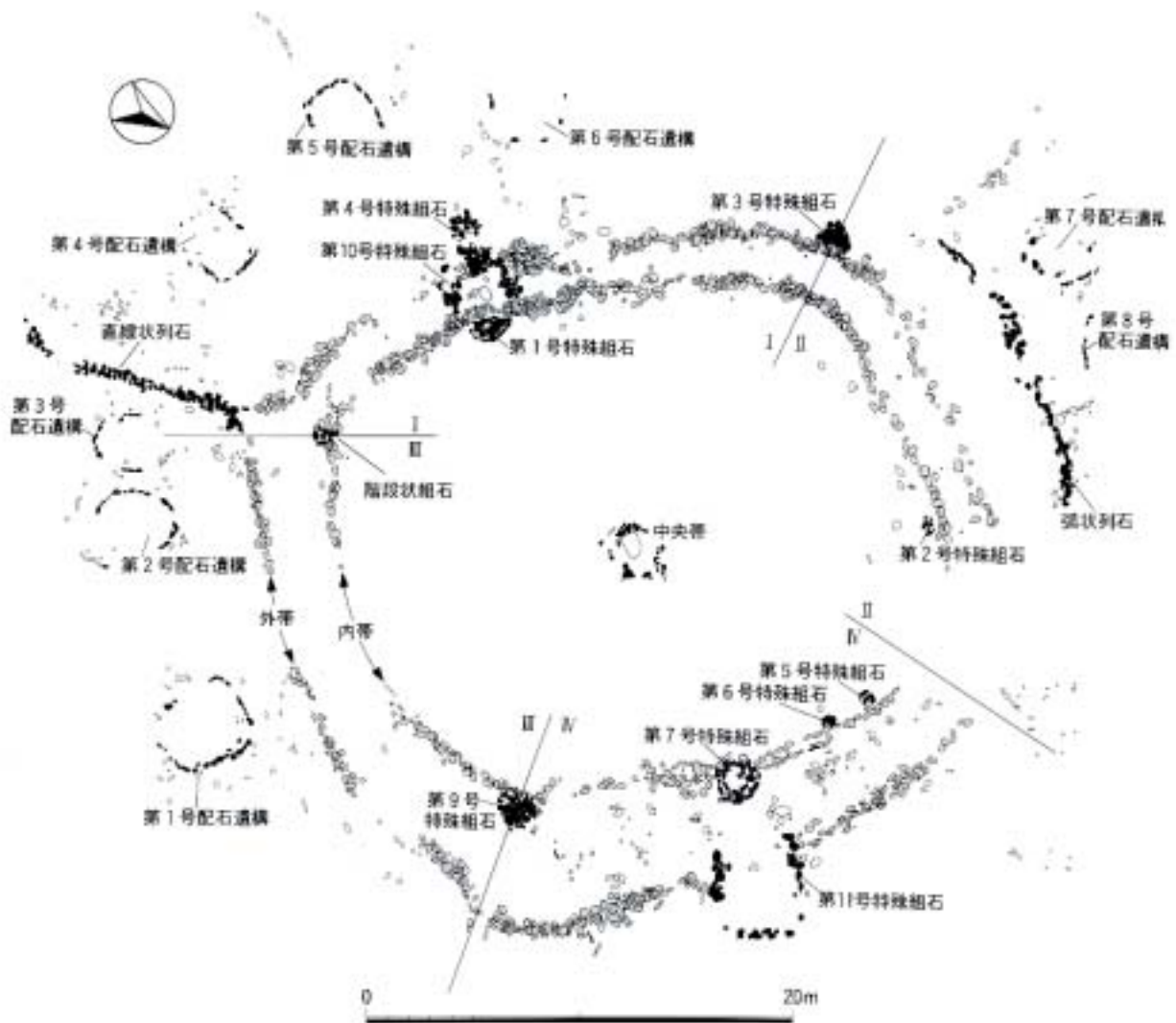
0.1 ~ 15kg	1,700個 (76%)	9,031.4kg (31%)
15.1 ~ 30kg	370個 (16%)	7,886.2kg (30%)
30.1 ~ 45kg	112個 (5%)	4,054.2kg (15%)
45.1 ~ 60kg	54個 (2%)	2,788.4kg (10%)
60.1 ~ 75kg	25個 (1%)	1,646.7kg (6%)
75.1 ~ 90kg	5個 (0%)	396.6kg (1%)
90.1kg ~	11個 (0%)	1,984.2kg (7%)

となっており、0 ~ 15kgの個数が全体の7割以上を占め、個数では3%にしか満たない45kgより重い礫が、総重量の20%以上を占めていた(第45図 - 上)。

さらに、各部位単位ごとでみると、いずれの部位単位にも属さないその他の礫を除く全体の数量では、外帯34%、内帯32%、あわせて66%を占めており、ほかは、34%程度である。重量は、数量にほぼ比例している(第45図 - 下)。また、15kgごとの分別でみると、前記の全体傾向と同様にいずれの部位単位の列石・配石も、15kg以下のものが過半数を占めている。15.1kg以上の礫は、ほかの部位単位と比べると、内 - 外帯とに多用されている(第43図)。



第43図 環状列石の重量分布

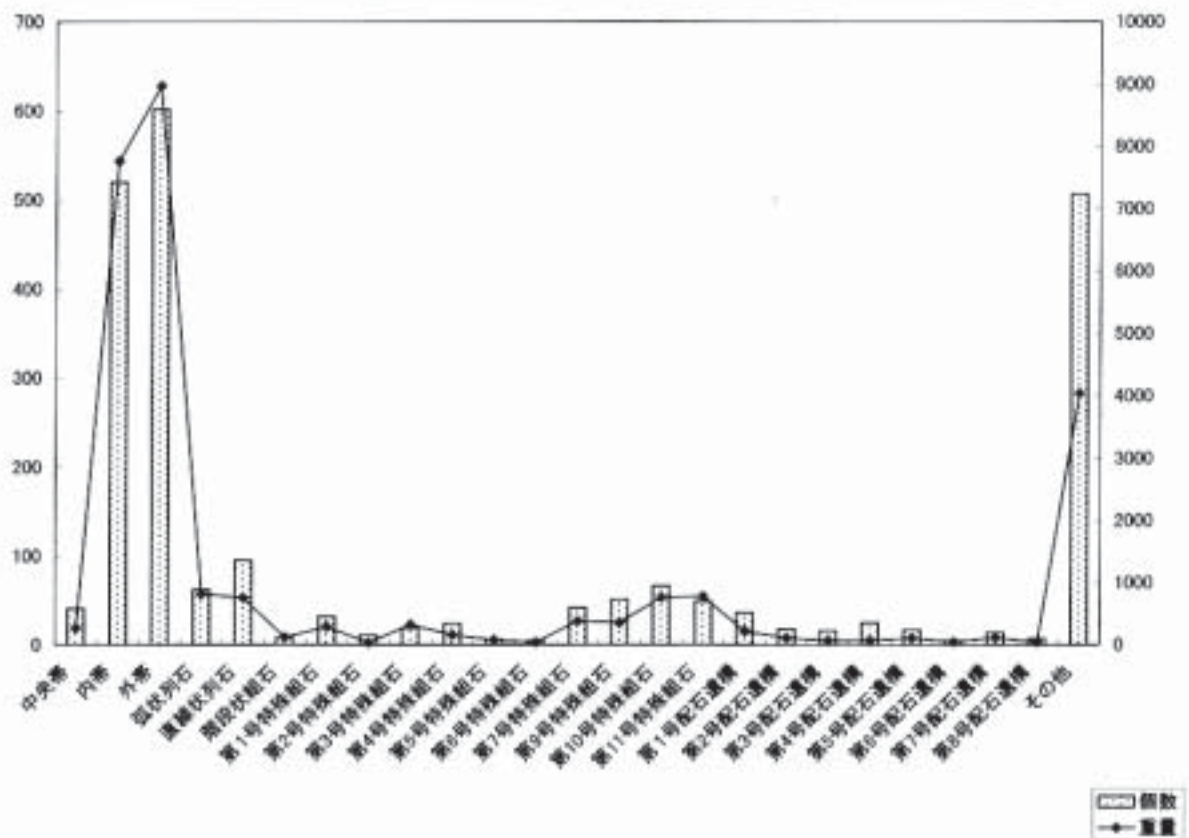
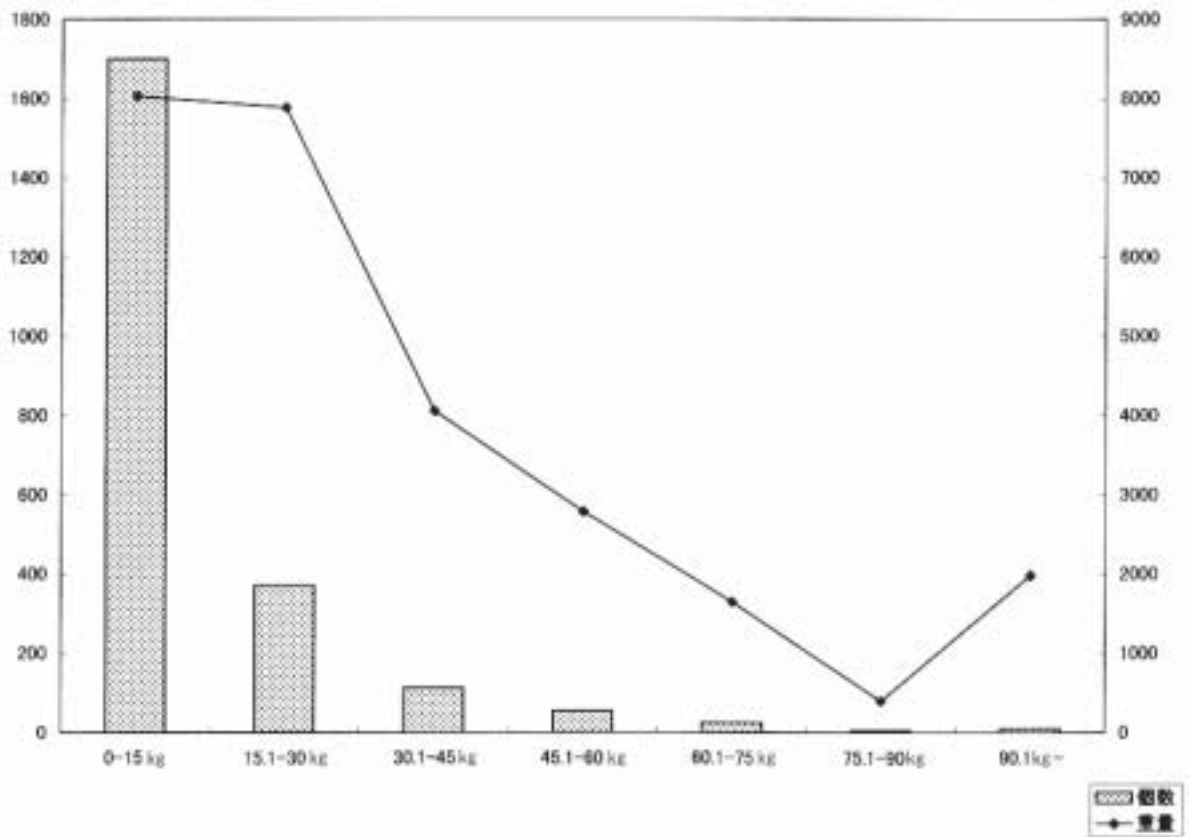


第44図 環状列石の部位と名称

礫の数量だけで見ると、全体の6割以上が内 - 外帯に使用されていることから、環状列石最終形態の構築に費やされる時間と労力も、内 - 外帯とに積極的に傾けられていることが理解できる。

2. 内帯および外帯の重量分布

内帯と外帯は、その平面プランは概ね隅丸方形を呈しており、また、外帯から分岐する直線状列石や、内帯の階段状組石（今年度追加、礫番号 1704 ~ 1709、1711、1713）の位置、中央帯と外帯の第3号特殊組石を結ぶ線上にある内帯の第9号特殊組石が、各コーナーに構築されている（第44図）。このことから、内 - 外帯は、結果として“環”を呈するものの、当時は“辺”を基準に設計、施工された可能性が高く、一部四重にもみえる弧状列石も、辺の一単位としてみることもできる。したがって、ここでは環状列石が“辺”を意識して作られているものと仮定し、分析を試みる。各辺の名称は、内帯、
、
、
、外帯、
、
、
の合計8辺に付した。なお、内外帯をまとめて辺として扱う場合には、辺、
、
と記述した。



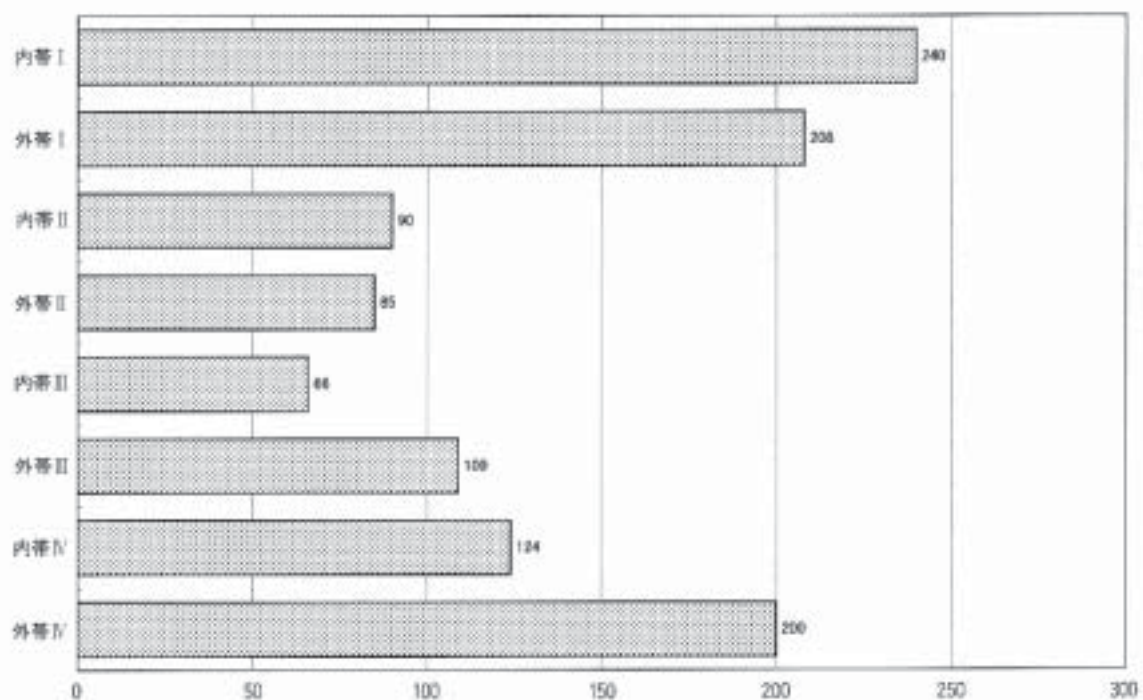
第45図 重量の類別(上)
部位別にみた礫の個数と重量(下)

(1) 各辺における礫の数量分布

各辺における礫の個数を比べてみると、第46図より、辺・に礫が集中していることが分かる。また、辺・は比較的礫が少ない辺として捉えることができる。すると、向かい合う辺で傾向が似ていることがいえ、このことには設計者の意思が反映されている可能性も十分にある。

次に、各辺の内帯、外帯で比べてみると、辺・では、外帯の方が多い。同じような礫の密度で並べた場合、半径が大きい外帯のほうに礫が多くなるのは当然である。しかし、辺では明らかに内帯の方が多く、辺でも僅かにではあるが内帯の方が多い。そこで、各辺において、外帯の礫が内帯の礫に対してどのぐらいの割合であるかを求めたところ、外帯の方に礫が多い辺・では外帯は内帯の1.6倍～1.9倍であるのに対し、辺・では内帯の約0.8倍～0.9倍、つまり80～90%にとどまることが分かった。各辺での内 - 外帯の数量の比は、・、・の間で似ているといえる。

数量では、辺・に礫が集中すること、また、各辺の内帯外帯で礫の数量を比較した場合、東、または北寄りの帯に多くなる傾向が認められる。



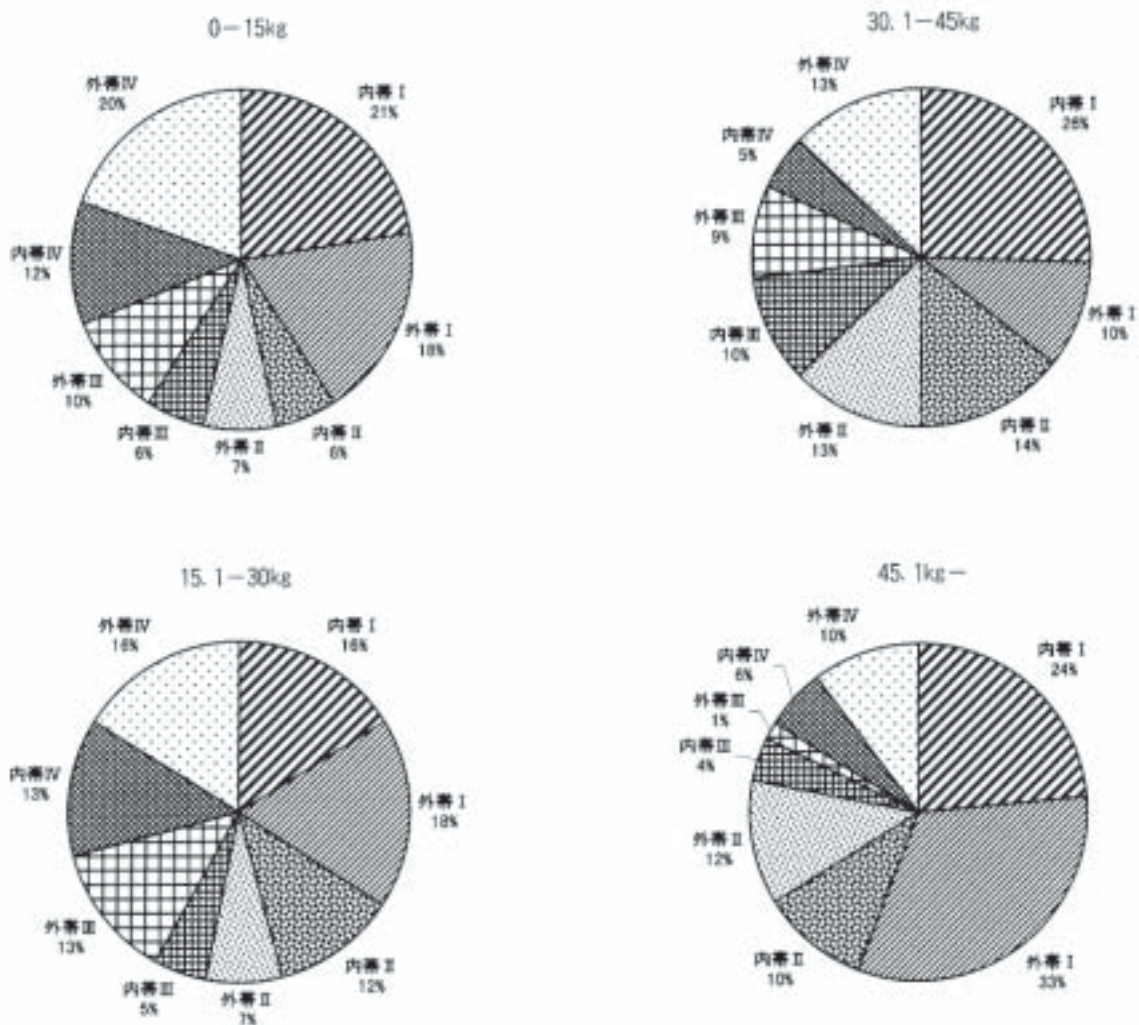
第46図 各辺における礫の個数

(2) 各辺における礫重量の分布

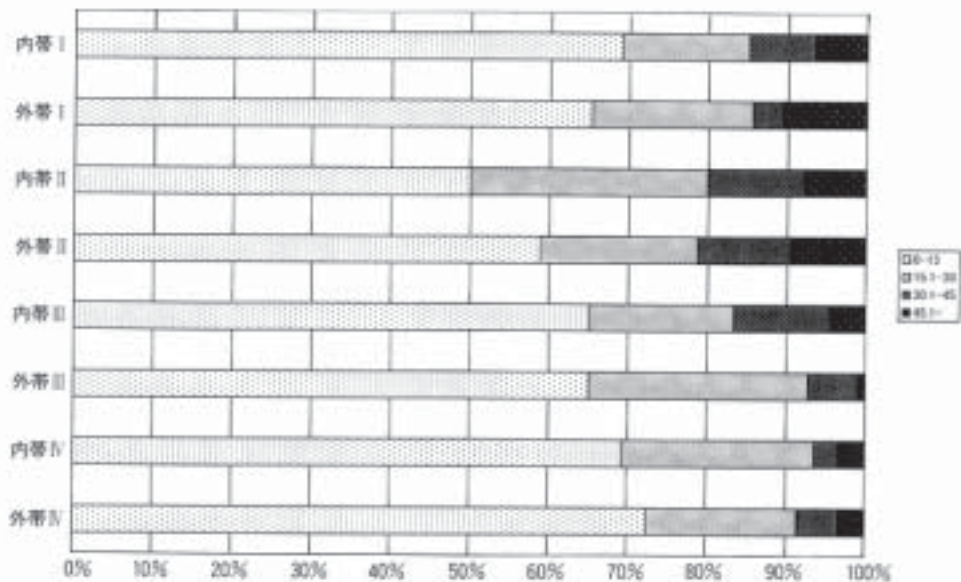
次に、重量ごとに傾向をみていく。第47図は、重量別に各内帯外帯の占める割合を示したものである。これによると、全般的に個数が辺に目立つ。また、辺は、比較的軽めの礫では多いが、重くなるとその割合はやや減少する。辺はその逆の傾向を示す。辺は、あまり変動しないが、重い礫になると少なくなる。以上のことから、重い礫は辺・に多く使われることが理解できる。

また、重量分布図(第43図)をみると、類似する重さの礫で帯が構築される部分と、軽い礫を石垣状に積んで帯が構成される部分とに分かれるようにもみえる。そこで各辺における、重量分布をみてみることにする(第48図)。まず、均質な礫で構築されている帯を認定するにあたり、中間の重さの範囲つまり、15kg～45kgの間の礫が、その帯の中でどのぐらいの割合を示しているかを基準とした。すると、内-外帯、外帯では25%前後、内帯で約28%、外帯、内-外帯では30%前後、内帯については40%を超えることがわかる。

礫の数量が少ないことを考えると、辺・は、軽重による礫の量の差が目立たないといえ、強いていえば重量的には均質に配石されたもの、といえる。逆に辺・では、軽い礫が多く配置されている中に重い礫が点在する傾向にある、といえる。



第47図 重量別にみた辺ごとの割合(個数)



第48図 各辺における重量組成

(3) 各辺の特徴

以上の結果から、各辺について特徴を挙げていくと、

辺Ⅰ：使用される礫の数量が非常に多く、礫の軽重を問わない。配石では軽い礫を多用した石垣状の積石と積石の間に重い礫を配置する傾向が認められ、内帯に礫が多くみられる。

辺Ⅱ：使用される礫の数量は少なめで、重い礫が多く使われる傾向が認められる。内帯に礫が多くなる。また、均質な重さで配石される。

辺Ⅲ：使用される礫の数量は少なめで、比較的軽い礫が多く使われる傾向が認められる。外帯に礫が多くなる。また、均質な重さで配石される。

辺Ⅳ：使用される礫の数量は多く、比較的軽い礫が多い。また、配石では軽い礫を多用した石垣状の積石と積石の間に重い礫を配置する傾向が認められ、外帯に礫が多くみられる。

ということがいえる。礫の配置については、使用される礫の量、軽い礫、重い礫の比および構成という点から、辺Ⅰ・Ⅱ、辺Ⅲ・Ⅳと、向い合う辺で組になる。

辺Ⅰ・Ⅱは、まず礫の数が多いという点が注目される。その理由としては、掘削面（切土面）と盛土面にある程度の高差があるということである。小牧野式と呼ばれる独特な配石では、高差がある分だけ多く礫を積めるようになっているのである。また、辺Ⅲの内帯と辺Ⅳの外帯に軽い礫が集中するということでも注目される。特に軽い礫は積み重ね用に使用され、重い礫はその隣に斜面にもたれさせるように立てて設置される。結果、石垣状の積み石は、この立石を保護することになる。

辺Ⅲ・Ⅳは、礫の量が少ないという点で共通する。礫の数量は、未調査部分や耕作による礫の抜き取りなどが影響しているものと考えられるが、当時もそれほど多くはなかったはずである。それは、これらの辺が斜面の掘削面（切土面）と盛土面の境、つまり環状列石内で最も平坦に近い場所にあり、小牧野式と称される石垣状の配石が組まれるほどの高さが無いからである。

このように、様々な傾向が表れる原因として常に、設計者の意図が形において影響しているものと考えられる。遠藤正夫氏は、環状列石に見る位置、方向を当初の設計構想の段階で念頭に設置されたものとしたうえで、正面の存在を指摘している（遠藤 1997）。環状列石の外側それも東側に立たないと、正面は一望できないという。氏の言う東側とは、辺Ⅰから辺Ⅳを見通せる場所である。前記したように、辺Ⅲの内帯と辺Ⅳの外帯は軽い礫を多用し、特に石垣状の積み石が顕著である。いずれも掘削面（切土面）

と盛土面の段部、つまり北側の辺にみられるという点で共通し、ゆえに、東側に最も近く、見る者には立体感と迫力感を抱かせてしまうのである。また、諸戸靖史氏は、自然の礫の形（扁平さ、細長さ）についての認識を持っているとし、扁平に積む 縦長の礫は周囲に扁平な積石で保護する 斜面にもたれさす 斜面部で前側を高くあげ後ろ側を下げて滑りにくくする、という点から石積の力学的安定性についての配慮がなされていると指摘している（諸戸 1996。）これについても、掘削面（切土面）と盛土面の段部に顕著に認められ、土留めの効果もあつたはずである。この環状列石の芸術性と高度の技術力には驚異を感じる。

3. 構築順序の検討

環状列石の構築順序を知ることは、当初の設計から最終形態までの変遷を追えるだけでなく、時間的規模や、そこに費やされる労力から見出される社会的規模をも推測し得ることは、前記したとおりである。しかし、実際のところは前提条件も多く、直接的な手がかりとしては成り立ちにくい。それには、ある程度いくつかのシナリオを想定して選択肢を絞り込む以外、現段階では難しいものと思われる。

まずは、前提条件の一つ目として列石が構築される時間幅を把握しなければならない。環状列石を代表するものとして、秋田県鹿角市大湯環状列石がある。富樫泰時氏は、環状列石の下部に土坑墓が存在し、列石そのものが墓であるもの、そしてその周辺に各墓と直接関係あると考えられる掘立柱建物跡が存在するものを「大湯万座型」とし、一方、小牧野遺跡のように環状列石の下部に土坑墓が存在せず、囲いのための環状列石を「小牧野型」と区別して呼称することを提唱している（富樫 1997。）上野隆博氏は、その前者を配石墓が時間の計画の中で環状に並んだ、「結果の環状列石（環状配石墓群）」、後者を円空間を作り出すため短期間に石を並べた、「計画の環状列石」であるとし、本遺跡の環状列石が短期間に構築されたものと述べ（上野 1996）秋元信夫氏も組石の統一性及び土器型式から短期間を想定している（秋元 1996）。環状列石の構築期間を示す時間的な尺度は、土器型式とその時間幅で検討される。縄文土器の年代観については、放射性炭素測定法による年代（C14年代）が、積極的に採用され、現在では縄文土器の各型式の相対的な新旧関係におおよそその絶対年代があたえられている。仮に、後期の始まりをB.C2000、その終りをB.C1000として、その中に属する土器型式6～7段階で等間隔に分割すると、一段階を約150年の範囲内にとらえることができそうである。前提条件の2点目は、遺構間の重複関係である。環状列石は、他の配石、列石あるいは掘り込み型の遺構とは、ほとんど切り合っていない。円形やU時形を呈する配石遺構は8基検出されているが、それらは外帯を巡るように配置されており、この関係から外帯構築後に配された可能性が高い。つまり、内-外帯やその他の配石、列石の間にある程度の時間差が存在するということである。前提条件の3点目は礫の運搬と配石までの時間幅である。礫を運搬してリアルタイムに並べたのか（ ）礫をすべてこの周辺まで運び込み、それから並べたのか（ ）あるいは両者の中間（ ）の3通りの方法が想定される。前提条件の4点目としては、軽い礫と重い礫の使用のされ方に偏差があるということである。つまり、前記の を例にとると、礫の採取段階から配石の進捗状況に応じて選定の基準を設けていたことになり、 では環状列石の構築が全体的にまんべんなく進められたのではなく、ある地点から方向性を持って構築され、その進行に伴い石材の不足に起因して生じたことが考えられる。このように考えれば、重量分布が環状列石の構築過程を追う手がかりとして扱うことができるのではないだろうか。

第3節 道路状遺構について

今回検出した道路状遺構は、環状列石から北約270mの地点から410mおいた地点まで続いており、これより先の野沢集落まで続く可能性が強い。また、北東へ約160mの地点の調査区では、人が行き来した道の可能性も考えられる硬化面も検出している。

これらの調査区を設定するにあたり、当初から礫運搬用の道路が存在するであろうと想定し、平成9年度刊行の報告書に掲載した「小牧野遺跡における環状列石を構成する礫運搬の作業量について」の中で設定した労力別の運搬経路の周辺に数ヶ所のトレンチを設置した。

今回、道路状遺構を検出した地点は平成9年度報告の経路1、硬化面を検出した地点は経路3にあたる。

1. 「道路」としての認定

道路状遺構とは、たとえば住居跡の床面が生活での踏み固めによって硬化するのと同様に、生活の道としての踏み固めによって土壌が帯状に硬化したものと考えられる(青森市教育委員会1997a)。それが具体的に交通路として認められるものが道路跡あるいは道路遺構として理解することができる。道路跡として認定するにあたっては、関連する様々な要素を抽出して考える必要がある。様々な要素とは、例えば、人や車馬などが残した足跡や轍といった痕跡や、道路として形成される最低限度の硬さなどが含まれる。また、沿線の集落の存在、立地条件なども考慮する必要がある。

本調査で検出した道路状遺構では、いずれも人や車馬などによる足跡や轍の痕跡を確認することができなかった。しかし、表面上には、光沢を帯びているものも部分的にみられ、いずれも共通して顕著に硬く締まっていた。調査では、この硬さを道路跡として認定するための一つの判断資料として土壌硬度の測定を試みた。測定にあたっては、『山中式土壌硬度計』を用いて実施した。硬度計の評価については、本遺跡において環状列石の中央広場の測定(遠藤1997)や、葛野(2)遺跡の道路状遺構においても道路部分とその範囲外に明確な相違が示されている(青森市教育委員会1997a)また、硬化面の把握による研究では、遺構の床面や堆積土を計測することによって、その機能や、埋没の過程をも理解しようとする研究も進められている(米沢1997、小林1998)

測定の結果、硬度測定で得られた数値の平均を第14表に示す。また、硬度に段階をつけて示したものが第49、50図である。

結果、いずれにおいても、範囲内の平均値が範囲外を上回っており、土壌硬度計を使用することによって、より正確な土壌硬化の広がりを確認することができた。

岩田明広氏は、日常生活や住居跡にみられる経験的な視点から硬化現象の特徴を挙げている(岩田1998)。それによると、周囲の床面に比べて相対的に硬い、周囲の床面から移植ゴテで表面を削ると該当範囲縁辺で顕著な抵抗がある、現状の民家における土間と同様の凹凸(瘡蓋状亀甲状の凹凸)がある、光沢がある、該当範囲の上面は移植ゴテがすべりやすい、とし、これに加えて、現代の未舗装道路でも交通量の多い場所に顕著に認められることも特徴にあげ、「『踏み固め』による硬化土壌の表面は平滑で、光沢があり、粘性も強い。同一土壌でありながら、硬化範囲外部との境界が非常に明瞭である。金属の刃物で削ると、表面がすべりやすいのがわかる。また、雨時には表面に雨水が流れ、周囲の土壌表面に比べ著しく浸透性が悪い。」としている。本遺跡においても、
、
、
の現象に類似し、

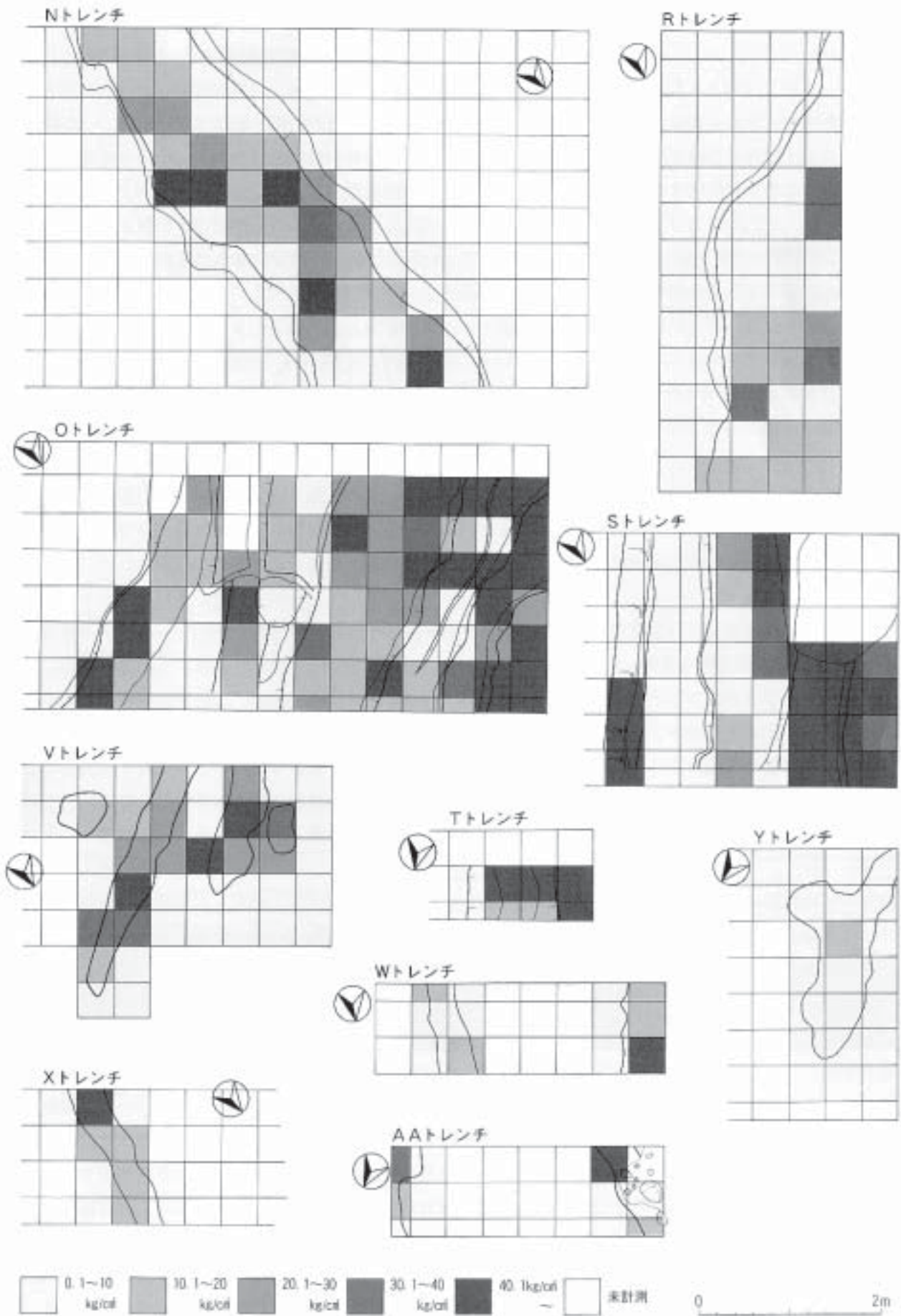
特に0トレンチでは表面に雨水が流れ、著しく浸透性が悪い。また、の光沢の原因について岩田氏は、「表面の粒子が細粒の碎屑物に均一化されると、平滑な面が容易に形成される。粘性の高いシルト質粘土質の土が表層を覆う場合には、粒子間隙も均一化され、表面の粒子配列が規則的になる。このため、表面は土器の器面に化粧土を塗り磨きをかけた状態のようになる。光沢がでるのはこのためである。」と分析している。小林達雄氏の助言によると、このような光沢現象は岩手県滝沢村湯舟沢遺跡で検出された道路状遺構にもみられたとのことであった。湯舟沢遺跡の道路状遺構は、概ね7条が認められ、この遺跡が埋葬祭祀の場としたうえで、「墓道」として理解されている（滝沢村教育委員会 1992。）

本遺跡の道路状遺構の特徴として、その表面が平滑的なものが多く認められた。この現象についても、岩田氏は「粒度の大きな碎屑物が粒度の小さな碎屑物の上部にあり、強い力で押しつけられる場合、粒度の小さな碎屑物でできた下層には大きな堆積の粒子間隙が存在するため、これを押し分けもぐり込むことになる。結果的に表層は、粒度の小さな碎屑物で均一化される。」とも分析している。

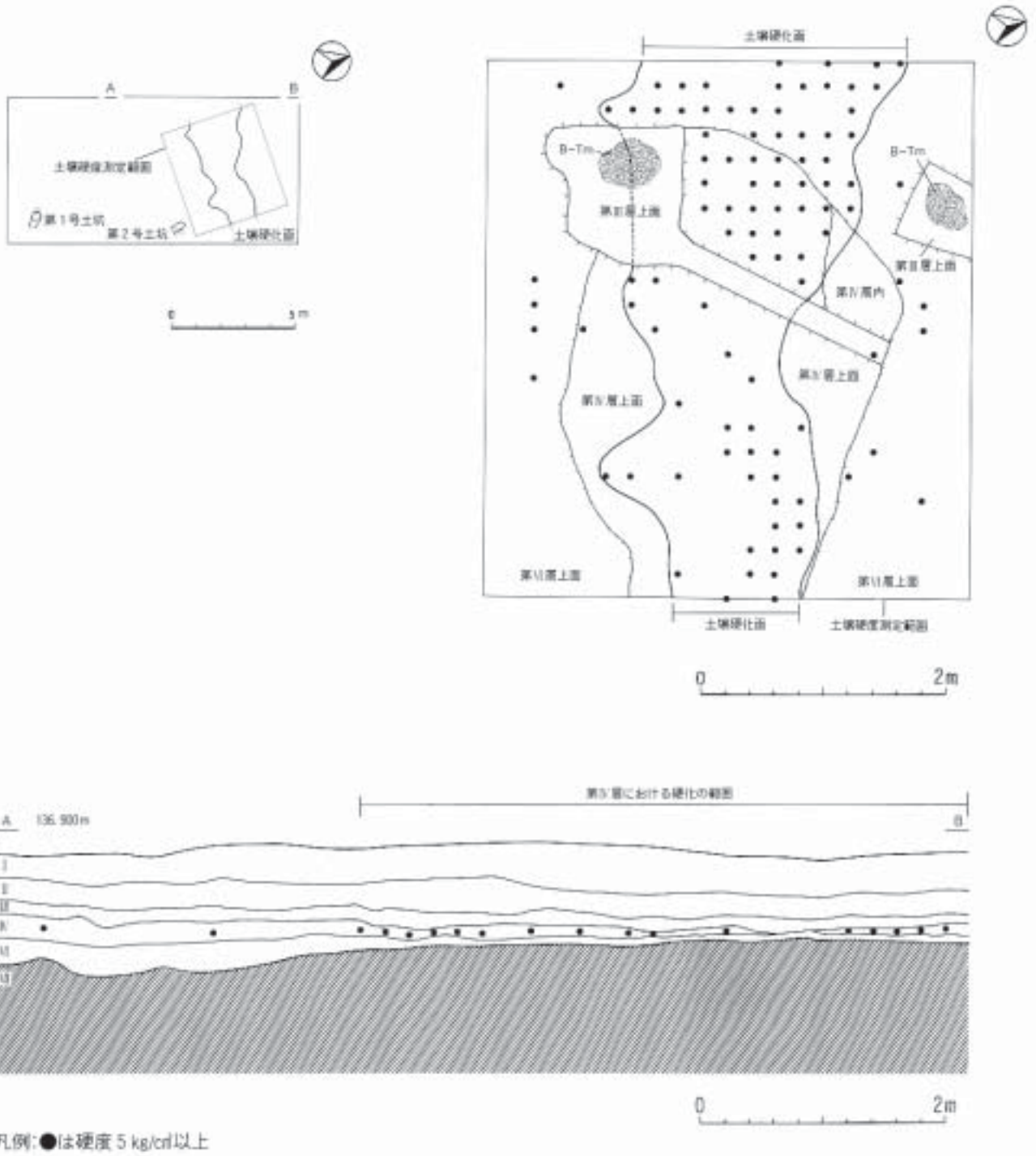
以上のようなことから、本遺跡で検出した道路状遺構は、硬化面にも表れる具体的な数値と岩田氏の光沢面や平滑面にみられる科学的な説明など充分納得させうるだけの材料を提示することによって、道路として機能していたことが理解できる。

第14表 道路状遺構硬度測定結果（平均値）

トレンチ名	枝番号	範囲内 (kg/cm ²)	範囲外 (kg/cm ²)
N		18.02	3.61
O	R - 1	47.3	計測不可
	R - 2	40.56	9.63
	R - 3	33.82	9.63
	R - 4	25.54	6.16
	R - 5	13.7	計測不可
	R - 6	未計測	計測不可
	R - 7	22.11	6.4
	R - 8	22.88	5.715
R		12.15	32.8
S	R - 1	47.13	計測不可
	R - 2	38.2	計測不可
	R - 3	20.17	3.65
	R - 4	57.2	3.65
T	R - 1	46.66	計測不可
	R - 2	32.3	計測不可
	R - 3	13.3	6.3
V	R - 1	37	14.6
	R - 2	27.25	7.165
	東硬化面	12.5	5.625
	西硬化面	25.3	7.6
W	R - 1	30.5	4.5
	R - 2	14.25	5.075
X		18.57	4.96
Y		7.04	4.068
AA	R - 1	24	6.5
	R - 2	22.75	5.13



第49図 各トレンチにおける道路状遺構硬度測定結果



第50図 Dトレンチにおける土壤硬化面硬度測定結果

2. 本遺跡における道路状遺構の性格

今回検出した道路状遺構は、縄文時代から始まり、平安時代、そして近現代へと続いている。いずれの遺構も、現在の野沢集落と環状列石内にある馬頭観音が建立されている地点をつなぐ、現在道とほぼ同じ経路から検出している。立地的には八甲田山に連なる火山性の舌状台地東側の分水嶺上にこの路線があり、縄文時代から現在に至るまで断続的に尾根道として使われていたことが理解できよう。こうした今なお残る道路と密接に関わるだろうと考えられる道路の歴史は古く、そして長い。

青森県内で検出された縄文時代の道路状遺構は、三内丸山遺跡において、縄文時代中期の延長420mの道路が検出されている。この道路は、2列の土坑墓の中央に形成されたもので、同遺跡の巨大さと継続性を象徴するものである。これに加えて直径5～6m程の環状配石群に隣接して、延長十数mの道路も検出されている(註)。また、同時期の二ツ森貝塚においても延長14mの溝状を呈する遺構が、土坑墓との位置関係などから、「墓域を通り居住域に向かう道」という想定がなされている(天間林村教育委員会 1997。)いずれの道も、集落内に形成されるものであり、掘削という土木工事の痕跡から確認されている。

集落内の道は、各施設をつなぐ道であり、前記のような痕跡が残されていなくても当然存在するものである。しかし、自然条件並びに立地制約上、集落内の道と現在道とが関わる可能性は非常に低い。近年では、一つの集落で各種施設の構成を検討し、その施設間の空間や地形図も合わせ、道を想定する研究も進められている(新津 1994。)

青森市内において、現代にまで残るような回帰性を思わせる道路が確認されている遺跡は、小牧野遺跡、山野峠遺跡、葛野(2)遺跡の3ヶ所である。うち前二者が縄文時代、後者が平安時代に属する。

現代に最も近い葛野(2)遺跡の道路は、現在道の市道金浜小畑沢線に平行して走向しており、第1号から第3号までの道路状遺構3条が検出されている。うち、第1号及び第2号が降下火山灰から推定して10世紀前半に、第3号はそれ以降と考えられている(青森市教育委員会 1997a。)この道路の西側に、平安時代の集落跡が確認されている(青森市教育委員会 1997a、1999)ことから、この集落と他の集落とをつなぐ道路として考えられる。葛野(2)遺跡は、この道路の沿線にある交通の要所に形成された集落として想定される。

山野峠遺跡の道路は、遺構そのものは検出されていないが、立地上、現在も残る峠の道路の下に重なって走向していた可能性が高い。遺跡は、弁財山と田頭山の間鞍部にあり国道4号線の久栗坂トンネルの直上、標高90m付近の峠の両側の斜面から、縄文時代後期初頭の再葬土器棺墓群と石棺墓群が互いに並んで発見されている(喜田 1934、江坂 1967、葛西 1975、青森市教育委員会 1984)山野峠遺跡は、東西2列の墓が谷地形の両側面、斜角度約50°の急斜面に形成されており、周辺に住居を構築するだけの平坦面や緩斜面もないことから、立地制約上、集落は存在せず、集落から分離された「集落外型の埋葬地」として考えられている。ゆえに、当時の人々が、この埋葬地まで移動するにあたり、今なお峠に存在する道を利用して可能性が想定されている(児玉 1999。)

小牧野遺跡の道路については、現在の野沢集落から背後の舌状台地の尾根沿いに走向し、途中、環状列石を通過し、大柳部集落へ抜ける現在道とほぼ同じ路線から検出しており、今後も、この路線上に道路跡が延長して検出される可能性は非常に高い。なお、現在の道路は集落と集落とをつなぐ道路として、昭和30年ごろまでは機能していたらしい。

本遺跡の環状列石は、その中央が現在道によって分断されているが、これまでの発掘調査や地下レー

ダー探査によって、現段階では約10万m²の面積の広い台地に1ヶ所だけという存在を確認している。環状列石の面積は、およそ1,000m²だから、100分の1の確率で、これが30万m²まで広がるとすると300分の1の確率で道路が通っていることになる。この数字をみると、この現在道が広い面積の中、しかもほぼ均一に広がる緩斜面の中、単に偶然重なったものとは到底考えられないのである。列石構築期からすでに環状列石の手前まで道路は存在していたのではないだろうか。

本遺跡は、本章第1節でも述べたように、この時期の埋葬地が集落と墓が分離する、集落外型の埋葬地として理解される。このことは、前記の山野峠遺跡にも共通していえる。また、滝沢村湯舟沢 遺跡においても環状列石(埋葬地)と集落を結ぶと想定される道路跡も検出されている(滝沢村教育委員会1992)。いずれも縄文後期における事例で、埋葬地と集落を結ぶ道路として共通する点で興味深い。

本遺跡の道路は、そうした環状列石を維持、管理している集落とつなぐ道路の可能性を想定させるものである。

以上のような集落と埋葬地をつなぐ道路以外に考えられる機能として、その前提に環状列石を関連付けて考えることも重要である。環状列石を構築するにあたって、礫の採集地点から列石の地点までの道は当然存在していたものと考えられるからである。今回検出した道路状遺構(路線)は、正確な距離と斜角度は計測できないが、昨年度報告で分析した「運搬経路1」と概ね合致する。なお、このルートは礫を運搬するにあたり最も運動強度が低い。

経路1は、総延長1,283mで、斜角度5°の区間が918m、0°の区間が365mである。10kgの背負子を使用した上りの歩行速度の変化は、斜角度0°で分速89m、5°で分速61mであった(被験者は20歳前半の男性)。この実験データを与えてやると、約20分で上ることが可能となる。実際的にはカーブや悪路も少なくなり、25分ほど、60歳代女性でも30分も時間を費やせば上りきることができる。縄文時代の可能性が少しでも考えられる道路状遺構は、幅が約25~70cmで、第1層上面に硬化面が認められるもの、つまりローム面に形成されているものが多い。ローム面に硬化面が形成される原因としては、その立地が尾根上という性質から侵食作用がローム面まで働いていたこと、あるいはそこまで人為的に掘削し形成された両側面が考えられる。

ある雨の日、ローム面まで削平された現在道を歩いていると、重い機材を持つ作業員が滑って登りづらそうなことに気がつく。それまでは、環状列石を構成する大きな礫などは、コロや修羅など引く力による道具、あるいは特に青森は雪国ということもあって引く力に加えて、滑る力も利用して、ソリの類を用い、効率的に運ばれていたものであろうと安易に考えていた。

ローム面の場合、経験的にはシルトなどの他質の土壌と比べて雨水の浸透性が悪く、滑りやすい。特に硬化面の場合には、著しく浸透性が悪く、雨水も流れやすい。それが原因となって人が滑るのであるが、このことは、それ以外の物質も滑るということを意味する。環状列石に関連付けて考えると、礫を滑らせながら下から引き上げる可能性を着想した。そこで、作業員数名でチームを組み、礫の運搬実験を試みた(被験者は50~60歳代の女性)。

実験にあたっては、50kgまでの礫が環状列石を構成する礫全体の99%を占めるため、25kgと50kgの2種類の礫を準備した。礫には、強度の強いナイロン製のロープをくくりつけ直接引き吊ることにした。コースは、浸食が進んだ現在道の片側を選んだが、同質の礫の採取地点である荒川から環状列石までは全線ロープが露出していないので、約1.2kmを運び上げることは不可能である。そのため、距離を約1/6にあたる200mとし、ローム面の木や小石などの障害物を除去して整備を行った。

実験の結果、25kgの礫を2人で運んだ場合、チームの差にもよるが3～5分、倍の50kgの礫を4人で運んだ時も3～5分を費やした。

これを、1,283mの荒川から列石の位置まで運んだとすると、単純計算で19.5～32.5分を費やすことになる。仮に、15kgごとに1人増やしていけばどの重さの礫でも同じ速さで運べることとし、往復70分（休憩分を入れて片道約35分とみて）要するとすれば、第15表のようになり、環状列石の中で最も重い礫で33人を要することとなる。つまり、33人いれば運べない礫は無いわけであるから、この事業の参加人数を33人として、礫運搬に要した時間を推定する。結果は表により、7,490分となり、これを1日8時間（480分）に換算すると、15.6日を費やすことになる。実際的には、流線形のソリを用いるとさらに効率よく運ぶことができるだろうし、その方がもっと現実的である。

第15表 推定作業時間

礫の重量 (kg)	一回の運搬に必要とする人数	個数	換算 (往復70分として)	33人で運んだ場合。()内は回数。
0 - 15	1	1,700	119,000分	3,640分 (33人で52往復)
15.1 - 30	2	370	25,900分	1,750分 (15組で25往復)
30.1 - 45	3	112	7,840分	770分 (11組で11往復)
45.1 - 60	4	54	3,780分	490分 (8組で7往復)
60.1 - 75	5	25	1,750分	280分 (6組で4往復)
75.1 - 90	6	5	350分	70分 (5組で1往復)
90.1 - 105	7	6	420分	140分 (4組で2往復)
120.1 - 135	9	1	70分	70分 (3組で1往復)
240.1 - 255	17	1	70分	70分 (1組で1往復)
255.1 - 270	18	2	140分	140分 (1組で2往復)
480.1 - 495	33	1	70分	70分 (1組で1往復)
合計	-	2,277	-	7,490分 (107往復)

今回検出した道路状遺構は、硬化面の諸現象と礫運搬の実験から、礫を運搬した道路としても想定することが可能となった。以上のように、本遺跡の道路状遺構は、集落と埋葬地とをつなぐ道路として機能していた以前に、環状列石構築に際し礫運搬用の道路として使用された可能性も充分考えられる。

近現代の道路が、小牧野遺跡や山野峠遺跡の事例の様に、重なって検出されたものは、一見回帰性を思わせるが、それが断続的というよりは点滅的に使用され、その間の期間は長い。この現象はそれまでどってきた経過に依存する立地条件が原因となって、結果的に未来へ向けて踏襲されることになったのであろう。

(註) 平成10年10月24日に開催された『国際狩猟採集民会議青森シンポジウム』のなかで、秦光次郎氏が報告している。

第4節 遺跡の範囲把握について

今年度の発掘調査は、環状列石構築期の遺跡の範囲を把握することを目的に実施し、平成7年度から計画的に進めてきている。これまで推定した範囲は、列石中心から北西側150m～西側120m、南～南東側約150m～200mまでである（青森市教育委員会 1998.）今年度は残る東側～北側の範囲を把握するため、列石中心から約150～500mおいた地点に31ヶ所のトレンチを設置し発掘調査を実施した。今年度推定する環状列石構築期の遺跡の範囲は、その判断材料の一つである十腰内式土器の分布状況と、当時の道路跡と考えられる遺構の存在から、環状列石から北東～北300m付近まで広がることを確認した。しかし、今回出土した土器や検出した遺構の時期は、ほとんどが十腰内式土器期の直前、つまり環状列石構築前のものであった。中でもEトレンチの貯蔵穴と考えられるフラスコ状ピットや、Fトレンチの居住施設の検出は、環状列石の発生や、列石構築期へと継続していく当時の社会を考えるうえで重要である。

したがって、列石構築直前の遺構や遺物も、環状列石構築期の遺跡復元に深く関わるものとして考え、遺跡範囲の対象として捉えることとした。これにより、遺跡の範囲は、列石構築期（十腰内式土器期）の分布ラインよりも、東側へ拡張されることとなった。

推定範囲については、以上のような成果と、平成10年10月2日に開催した発掘調査会議の席上及び現地指導、また、調査状況から環状列石北東～北側の範囲について、列石中心から北東約130m～北約300mの緩斜面までと想定した。これまでの範囲推定ライン（南～西）と今年度の想定ラインを併合してみると、環状列石構築期の遺跡範囲は概ね20～30万m²と推定される。

平成11年度は、これまで概略に推定したラインに関し、南～東～北側の一部や今年度確認した東側急斜面の湧水の周辺を対象に含め、全体的な視野での補充調査を実施し、その確定に努める予定である。

ま と め

小牧野遺跡は、青森市大字野沢字小牧野に所在し、縄文時代後期前半に大規模な土地造成と特異な配石によって構築された環状列石を主体とする遺跡である。

今回の調査では、環状列石構築期直前の時期に帰属する竪穴式住居跡、溝状遺構、焼土遺構などからなる居住施設2棟、土坑8基、遺物集中ブロック1ヶ所を検出した。

居住施設は、竪穴と溝（居住施設A）、溝と柱穴と焼土（居住施設B）が組になるものである。前者の場合、竪穴は浅くプランは歪で不鮮明である。後者の場合、竪穴は無く、溝の一部に柱穴および溝が区画するその空間内に焼土が位置している。今回あえて「居住施設」という用語を使用したのは、この時期およびこの地域に竪穴以外の住居跡が存在するものと想定したからである。一般の竪穴式住居跡以外で考えられる住居には、ごく軽便な住居、耐久力が低い住居、掘り込みが浅い住居、掘り込みを持たない平地式住居や掘立柱建物、屋外の炉や焼土、溝など、発掘調査によって発見されにくいものから調査担当者や研究者の解釈によって切り離して扱われるものまでである。本遺跡では、そうした遺構などが今後の調査においても検出されることが想定でき、もう少し広い概念で住居の調査に取り組むこととしたい。そのような意味では、今回検出した環状列石構築期直前の居住施設は、この周辺に後期初頭～前葉の集落跡が形成されていた可能性を示唆するものであり、集落の定住性や季節性を考えるうえで重要である。

土坑は、円形や長楕円形、フラスコ状など多様な形態を呈するものを検出した。うち性格や用途を想定できるものにフラスコ状ピットが挙げられる。一般には貯蔵穴として考えられているが、未ださまざまな見解が生じているようである。本遺跡では、環状列石構築期に墓として転用されたものと貯蔵用として役目を終えた二種類のフラスコ状ピットが想定されているが、今回の場合、その堆積状況等から後者の機能が想定される。

遺物集中ブロックは、炭化粒やローム粒、焼土粒等を含む厚さ30cmほどの土壌の中に、土器や石器、土製品、石製品等の遺物が包含する堆積層で、性格的には捨て場として機能していたものと想定される。また、これまでの調査においても同様な遺構を確認しているが、いずれも円形岩版や三角形岩版など祭祀的要素を含む遺物に関しては破損していないものも出土していることから、単なるゴミ捨て場として解釈するのは難しい。

上記のほかに、平安時代の竪穴式住居跡3軒と縄文時代・平安時代・近現代に相当する道路状遺構なども検出した。

平安時代の竪穴式住居跡は、出土遺物や検出火山灰等から10世紀代のものと想定される。今回の調査では、31ヶ所、総面積1,259m²、平均約40m²という狭い面積の中で、3ヶ所のトレンチからそれぞれ検出した。このことは、住居跡数の密度の高さを意味するものであり、この周辺に当ても集落が存在していた可能性を想定させるものである。

道路状遺構は、いずれも舌状台地の尾根上に形成されており、立地上、堆積作用が小さく、侵食作用が大きいという条件から層位的に時期を特定することは困難である。それでも堆積層が厚く残存している場所も若干認められ、そこから消去的に整理していくと時代別には大まかに捉えることができる。性格的には、近現代のものについては、集落と馬の放牧場を、平安時代のものは集落と別の集落とをつなぐ道路として使われていたことが想定される。縄文時代のものについては、環状列石構築に際して荒川

から列石位置までの礫運搬の道路、さらに、その完成後、集落と環状列石（埋葬地）をつなぐ道路として機能していた可能性が想定される。

今年度の発掘調査は、環状列石構築期の遺跡の範囲を把握することを目的に実施し、平成7年度から計画的に進めてきている。これまで推定した範囲と今回の調査で想定した範囲を併合してみると、環状列石構築期の遺跡範囲は概ね20～30万m²と推定される。平成11年度は、全体的な視野での補充調査を実施し、遺跡範囲の確定に努める予定である。

最後となりましたが、調査から本書刊行に至るまで、ご指導ご協力を賜った多くの方々に、改めて感謝の意を表する次第です。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1984 第79集 『¹ノ渡遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1987 第103集 『大石平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1988 第115集 『上尾駮(2)遺跡 発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1992 『青森県遺跡地図』
- 青森県教育委員会 1997 第215集 『朝日山(3)遺跡』
- 青森県教育委員会 1998 第239集 『新町野遺跡・野木遺跡』
- 青森県教育委員会 1998 第243集 『高屋敷館遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1998 『青森県遺跡地図』
- 青森県教育庁文化課 1998 『平成10年度青森県の文化行政』
- 青森市 1997 『青森市勢要覧』
- 青森市教育委員会 1993 第20集 『小牧野遺跡発掘調査概報』
- 青森市教育委員会 1996 第30集 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997a 第34集 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997b 第35集 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1998 第40集 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1999 第44集 『葛野遺跡発掘調査報告書』(刊行予定)
- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 1979 『蛭沢遺跡発掘調査報告書』
- 青森大学考古学研究所 編 1998 『青森県内における縄文時代の住居跡集大成(1)研究紀要』第1号 青森大学考古学研究所
- 秋元信夫 1996 「大湯環状列石と小牧野環状列石」『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
- 伊藤康道 1994 「道路遺構の調査」『季刊 考古学』第46号 雄山閣
- 今村啓爾 1997 「縄文時代の住居跡数と人口の変動」『住の考古学』同成社
- 岩田明広 1998 「床の硬化を考える」『土壁』第2号 考古学を楽しむ会
- 上野隆博 1996 「第 章 分析と考察 環状列石」『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
- 江坂輝弥 1967 「青森久栗坂 山野峠遺跡調査略報」『考古学ジャーナル』13
- 遠藤正夫 1997 「青森県小牧野遺跡 - その掘削・整地・配石作業 - 」『考古学ジャーナル』412
- 岡田康博 1998 「東日本の縄文文化」『季刊考古学』64 雄山閣
- 葛西 励 1974 「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」平賀町教育委員会
- 葛西 励 1975 「青森市山野峠石器時代墳墓遺跡について」『北海道考古学』第11輯 北海道考古学会
- 葛西 励 1979a 「十腰内式土器の編年の細分」『北奥古代文化』第11号 北奥古代文化研究会
- 葛西 励 1979b 「第6章 後期編 第1節 後期初頭青森市蛭沢遺跡発掘調査報告書」青森市蛭沢遺跡発掘調査団
- 葛西励・高橋潤 1990 『青森市小牧野遺跡調査報告』
- 喜田貞吉 1934 「青森県出土洗骨入土器」『歴史地理』第63巻 第6号
- 木下良 編 1996 『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
- 児玉大成 1997 「三角形岩版について」『青森県考古学』10 青森県考古学会
- 児玉大成 1999 「山野峠遺跡」『三内丸山縄文ファイル』41 三内丸山縄文発信の会
- 小林 克 1997a 「大規模竈と生活の安定」『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店
- 小林 克 1997b 「東北地帯部縄文時代の墓制」『考古学ジャーナル』422
- 小林 謙一 1998 「縄文集落の実態を復元していくための問題意識と調査方法」『縄文集落研究の新天地2』シンポジウム発表要旨 縄文集落研究グループ
- 小山修三 1984 『縄文時代 - コンピューター考古学による復元』中公新書 733
- 小山修三・及川昭文 1996 「青森県縄文データベース」シンポジウム『考古学とコンピュータ - 三内丸山をコンピュータする - 』
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究4」『縄文時代』9 縄文時代研究会
- 滝沢村教育委員会 1992 第19集 『湯舟沢 遺跡』(第2分冊)
- 田中哲郎・富永勝也 1998 「北海道東北部地方の縄文時代初期の定住化」『考古学ジャーナル』429
- 谷口康浩 1998 「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯
- 天間林村教育委員会 1997 第5集 『二ツ森貝塚』
- 中村哲也・坂本真弓 1998 「青森県の縄文早期住居跡集成」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 新津 建 1994 「縄文集落と道」『山梨考古学論集』 山梨県考古学協会
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4 後期晩期続縄文』小学館
- 町田洋・福沢仁之 1996 「湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代」『日本第四紀学会講演要旨集26』日本第四紀学会
- 諸戸靖史 1996 「土工学より見た環状列石工事に關する所見」『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
- 山内清男 1969 『日本先史土器の縄文』
- 米沢容一 1997 「硬い床と軟らかい床 - 硬化面から得られる諸情報 - 」『土壁』創刊号 考古学を楽しむ会

写真図版



調査前風景 Nトレンチ (S N)



調査前風景 ACトレンチ周辺 (S N)



調査風景 Dトレンチ (E W)



Aトレンチ (W E)



Bトレンチ (W E)



Eトレンチ (E W)



Fトレンチ (E W)



Gトレンチ (S N)

写真1 調査前風景・各トレンチ完掘状況ほか



Hトレンチ (S W)



Iトレンチ (W E)



Jトレンチ (N S)



Kトレンチ (S N)



Lトレンチ (N S)



Mトレンチ (S N)



Nトレンチ (S N)



Oトレンチ (W E)

写真2 各トレンチ完掘状況



Qトレンチ (S N)



Sトレンチ (N S)



Tトレンチ (W E)



Xトレンチ (W E)



Yトレンチ (S N)



Zトレンチ (E W)



AAトレンチ (W S)



ABトレンチ (W E)

写真3 各トレンチ完掘状況



ADトレンチ (W E)



AEトレンチ (E W)



Fトレンチ・居住施設等 (E W)

左奥：第2号溝状遺構 右：第1号溝状遺構
手前：第1号竪穴式住居跡



Fトレンチ・第1号竪穴式住居跡セクション



Fトレンチ・第1号竪穴式住居跡出土炭化物



Fトレンチ・第1号ピット (W E)

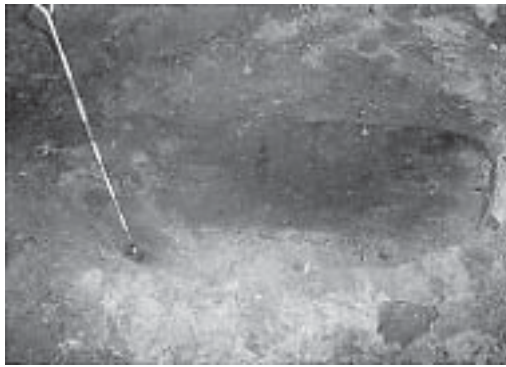


Eトレンチ・第1号土坑 (S N)

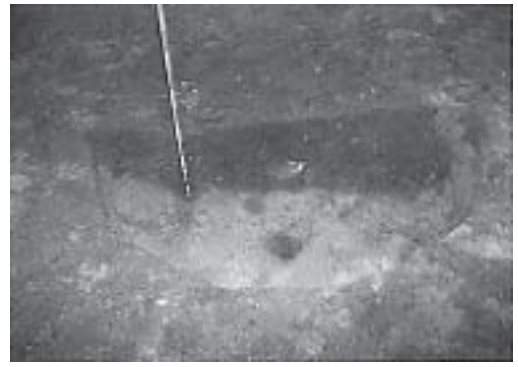


Fトレンチ・第1号土坑 (W E)

写真4 各トレンチ完掘状況・遺構(居住施設・土坑)ほか



Fトレンチ・第2号遺構(W E)



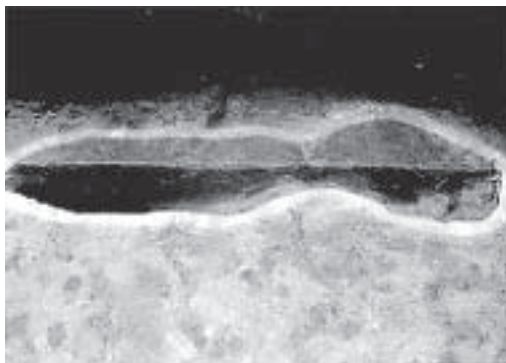
Fトレンチ・第3号遺構(W E)



Fトレンチ・遺構外遺物出土状況



Fトレンチ・遺構外遺物出土状況



Iトレンチ・第1号土坑(E W)



Oトレンチ・第1号竪穴式住居跡
確認面(W E)



Uトレンチ・第1号竪穴式住居跡
確認面(W E)



Uトレンチ・第1号竪穴式住居跡(S N)

写真5 遺構(土坑・竪穴式住居跡)・遺物出土状況



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡
確認面 (W E)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡
全景 (E W)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡
セクション (W E)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡
カマド検出状況 (N E)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡
出入口施設 (E W)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡内
溝跡検出状況 (S N)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡
須恵出土状況 (S N)



AC トレンチ・第1号竪穴式住居跡内
溝跡セクション (S N)

写真6 遺構 (平安時代の竪穴式住居跡)



Nトレンチ・道路状遺構 (E W)



Sトレンチ・道路状遺構 (N S)



Rトレンチ・道路状遺構 精査状況



Rトレンチ・道路状遺構 (S N)



Tトレンチ・道路状遺構 (W E)



Tトレンチ・道路状遺構セクション

写真7 道路状遺構



V トレンチ・道路状遺構 (S N)



W トレンチ・道路状遺構 (N S)



X トレンチ・道路状遺構 (N S)



D トレンチ・土壌硬化面 (E W)



D トレンチ・土壌硬化面セクション



D トレンチ・土壌硬化面硬度測定状況



環状列石を分断する今なお残る道路



今年度確認した湧水地点

写真8 道路状遺構・その他

Eトレンチ・I土

Fトレンチ・Pit1

Eトレンチ・遺物集中ブロック



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

写真9 遺構内出土遺物(土器)

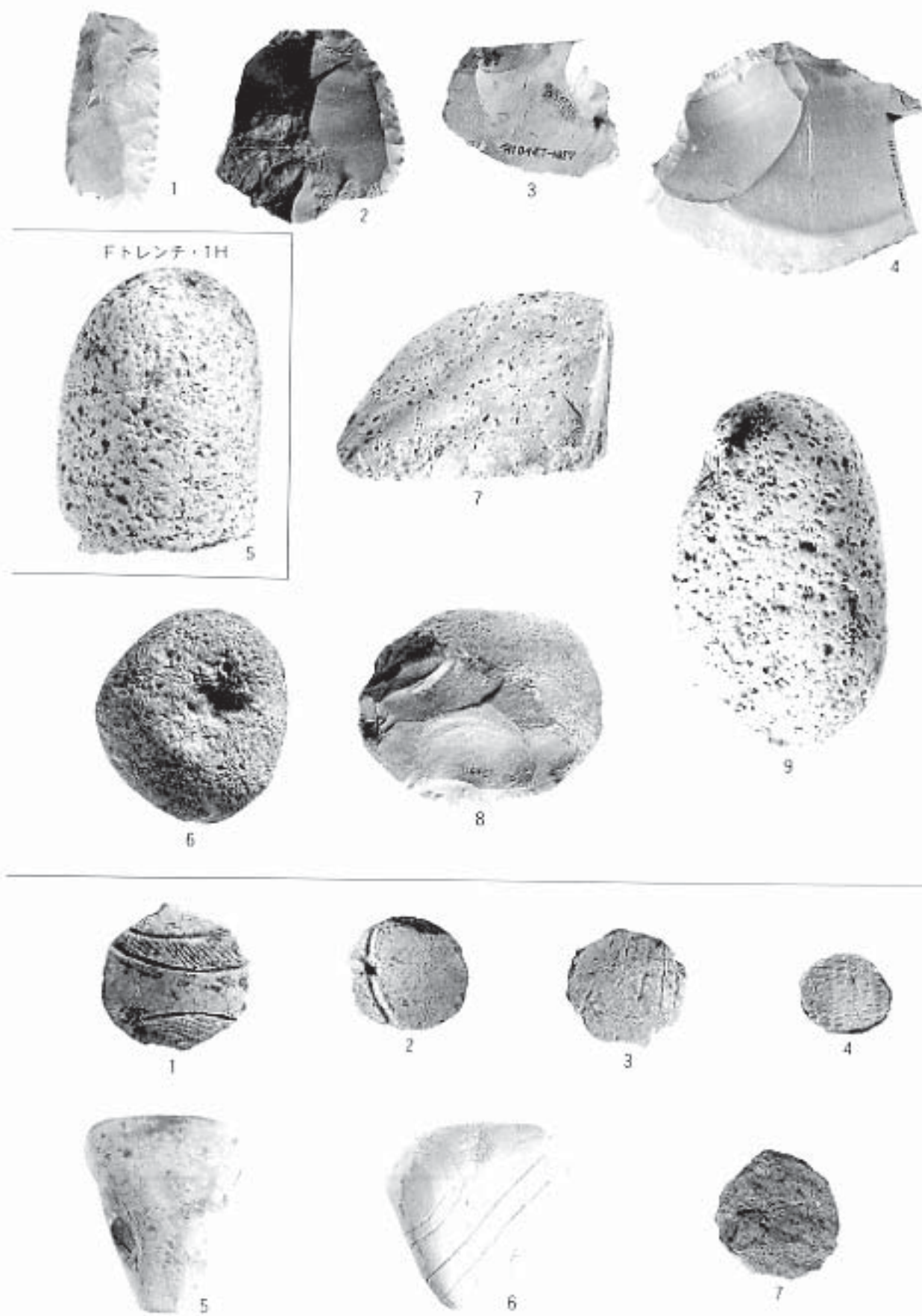


写真10 遺構内出土遺物（石器・土製品・石製品）

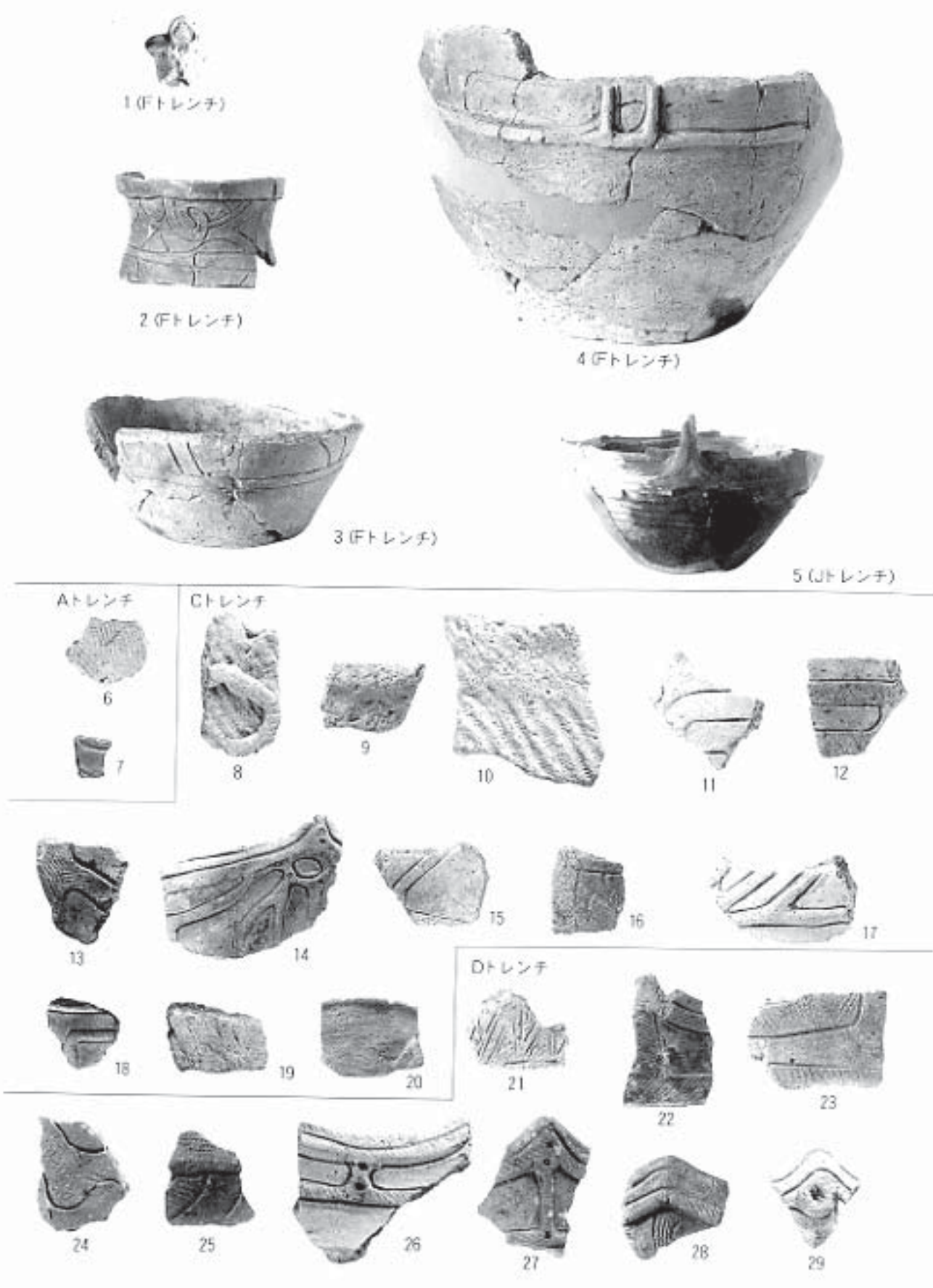
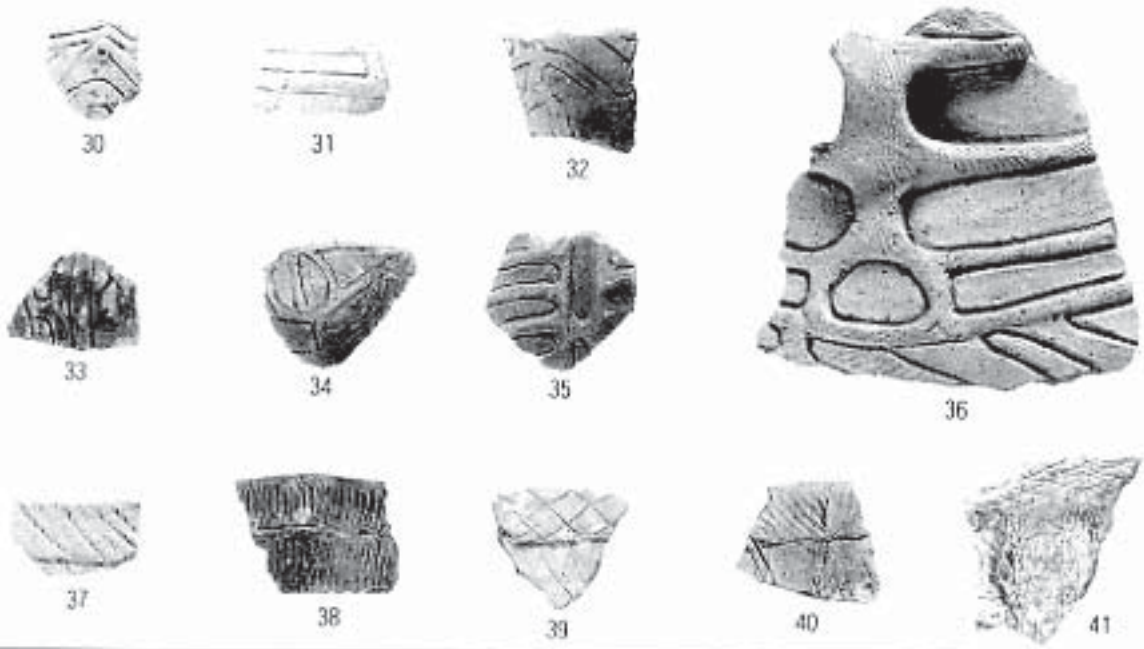


写真 11 遺構外出土遺物（土器 1）

Dトレンチ



Eトレンチ



Fトレンチ

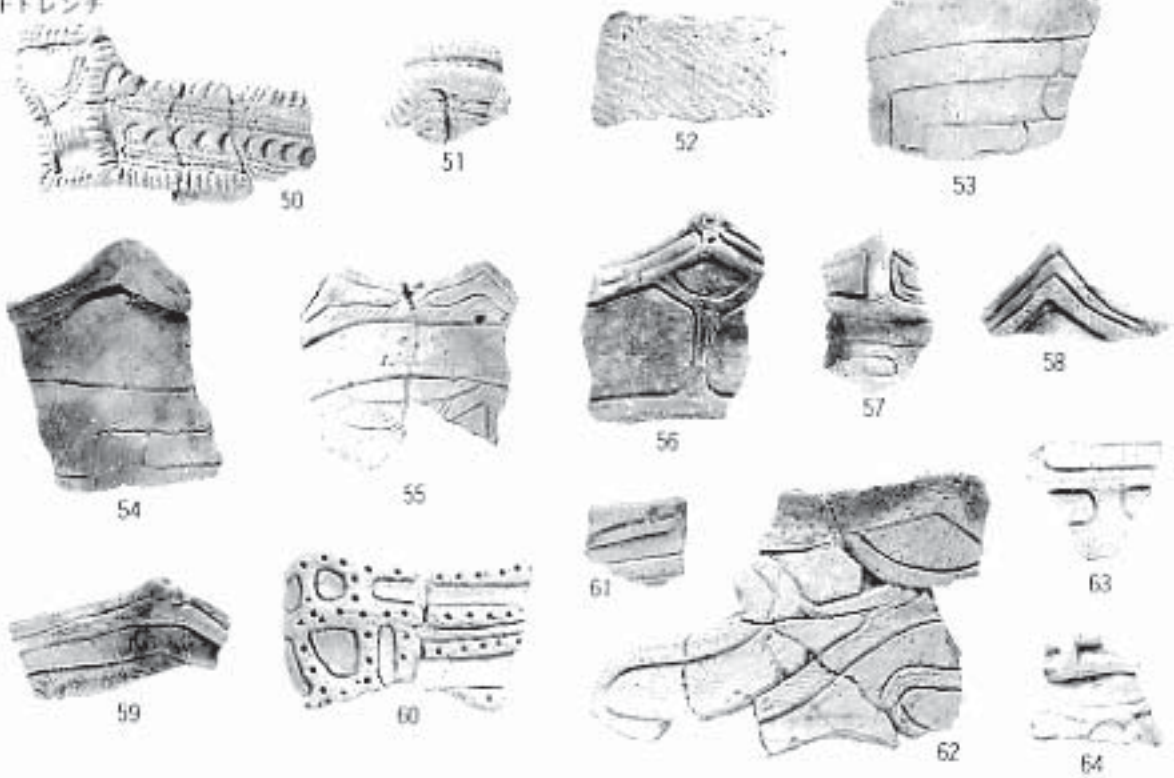
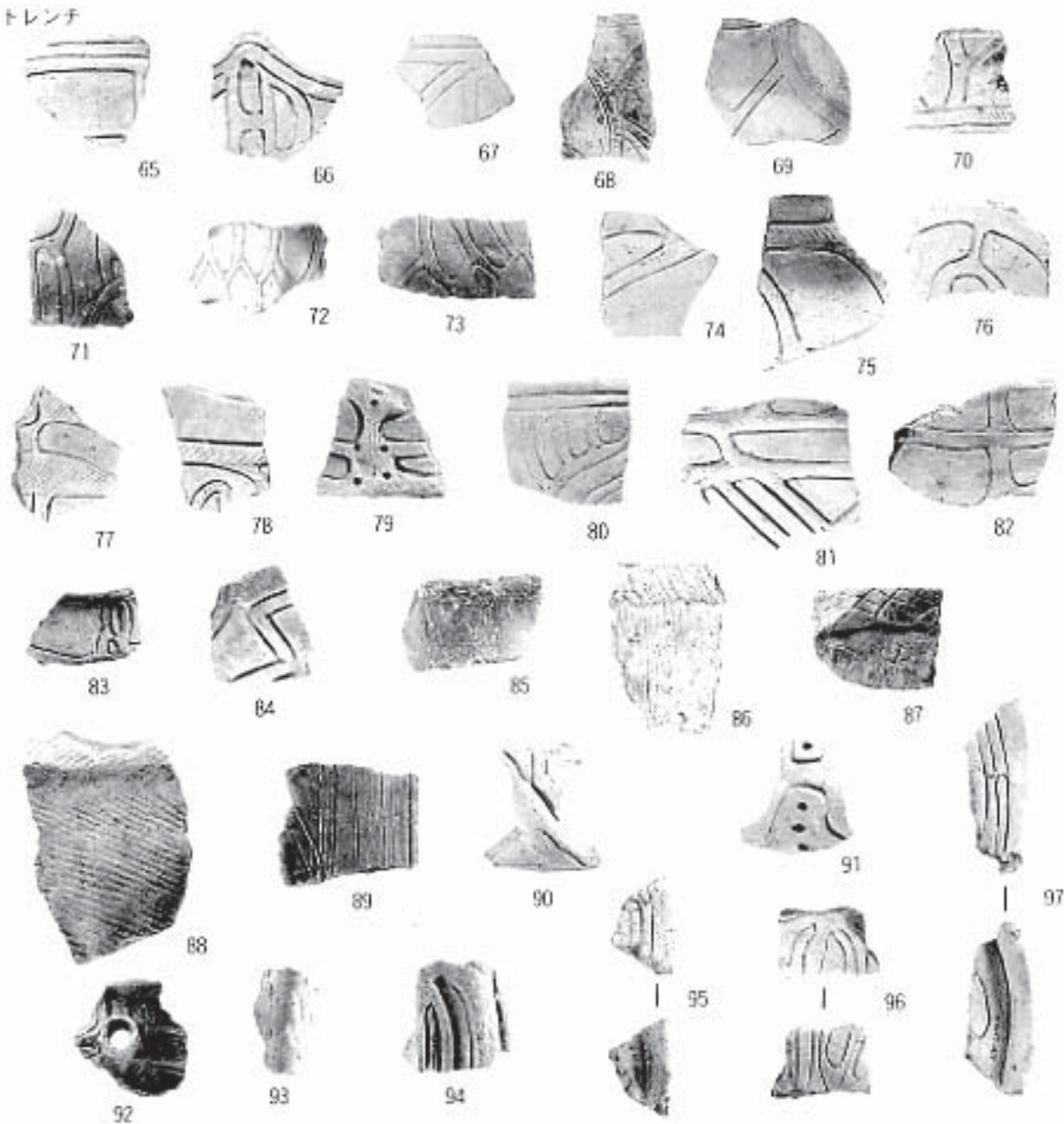


写真12 遺構外出土遺物(土器2)

Fトレンチ



Gトレンチ

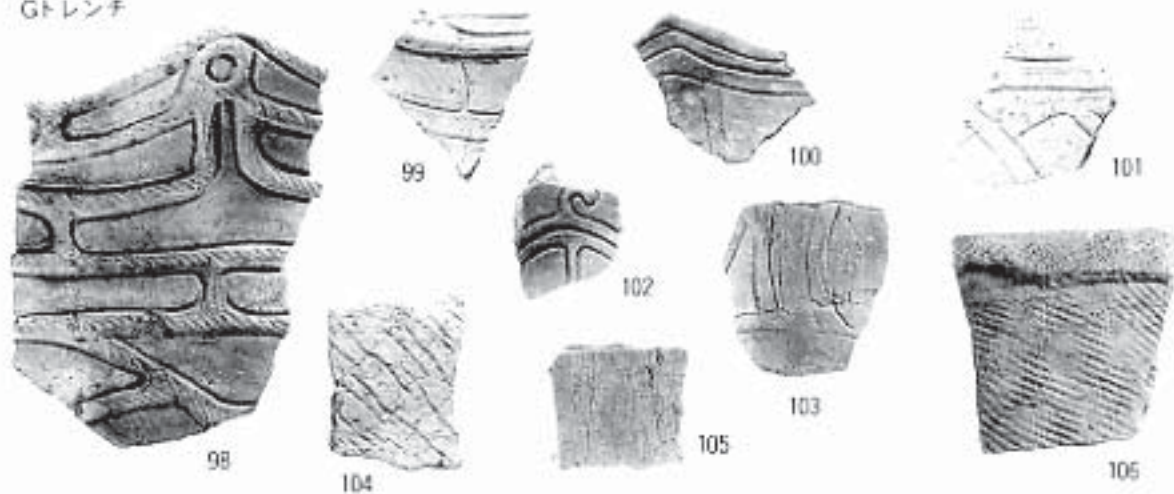


写真 13 遺構外出土遺物(土器3)

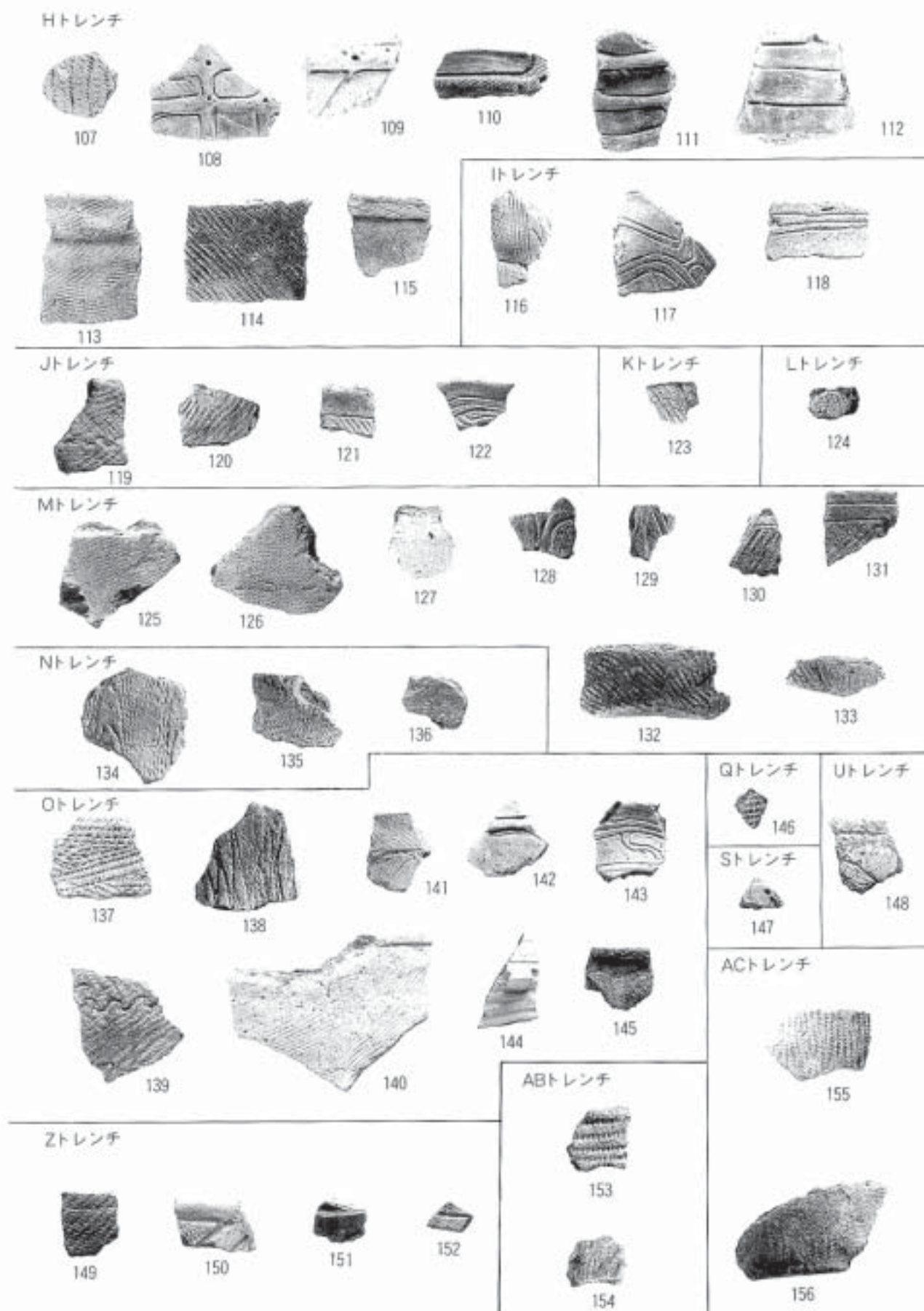


写真 14 遺構外出土遺物（土器4）

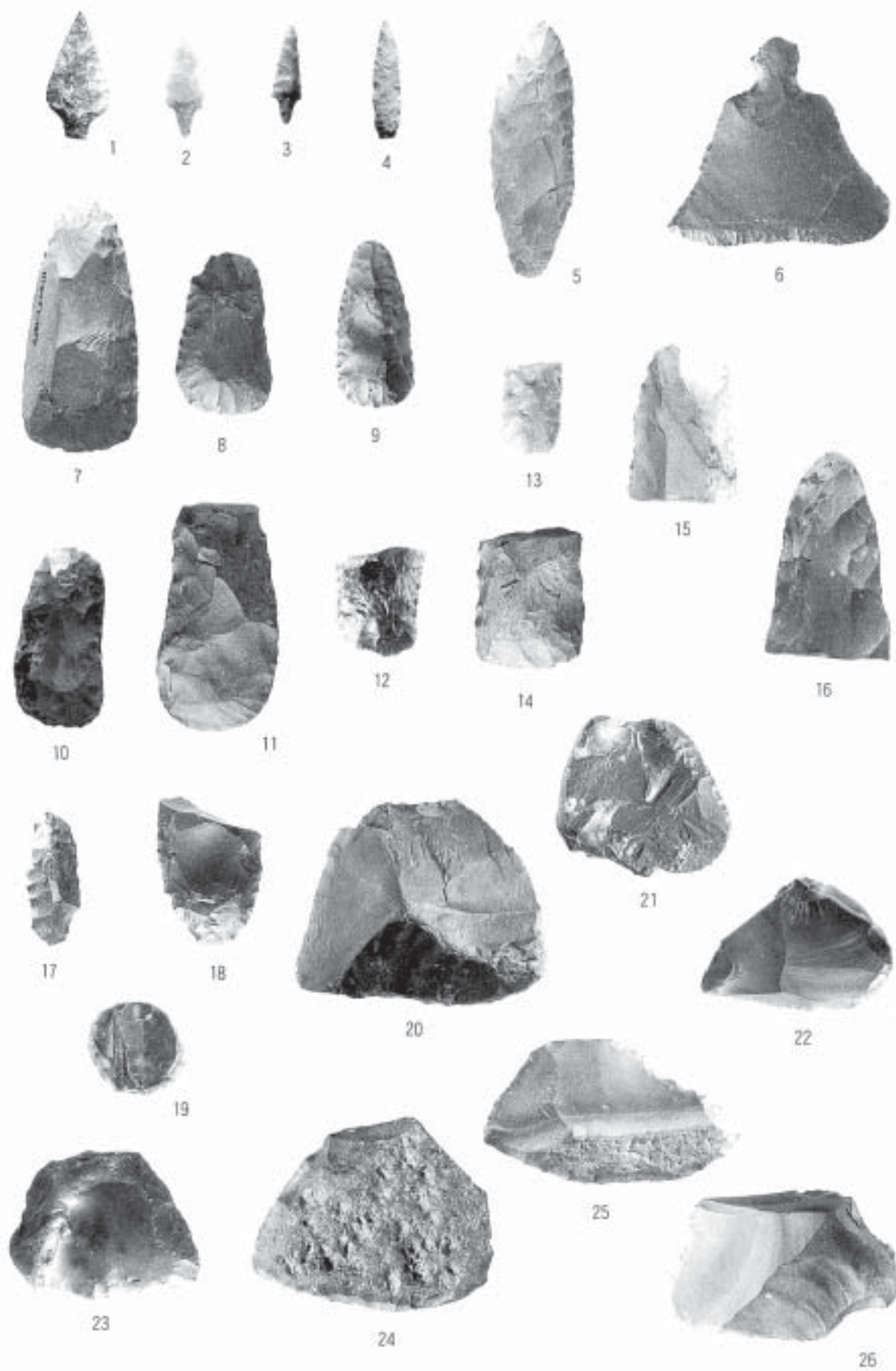


写真 15 遺構外出土遺物（石器 1）

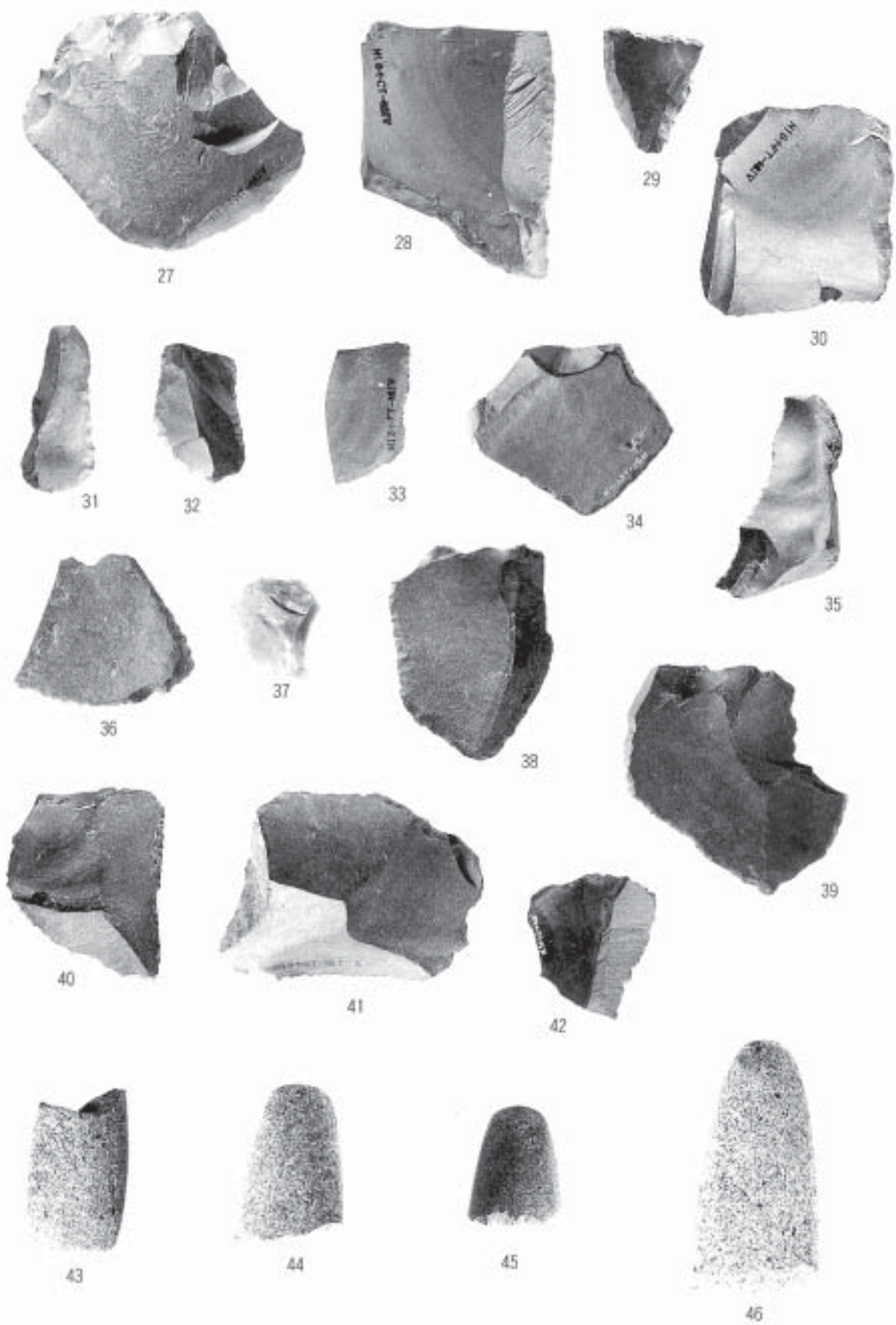


写真 16 遺構外出土遺物（石器 2）



写真 17 遺構外出土遺物（石器 3）



56



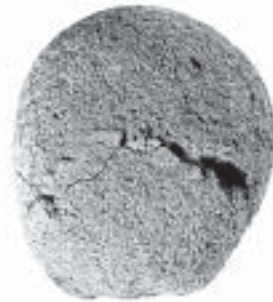
57



58



59



60



61



62



63



64



1



2



3



4



5

写真 18 遺構外出土遺物（石器 4・土製品・石製品 1）

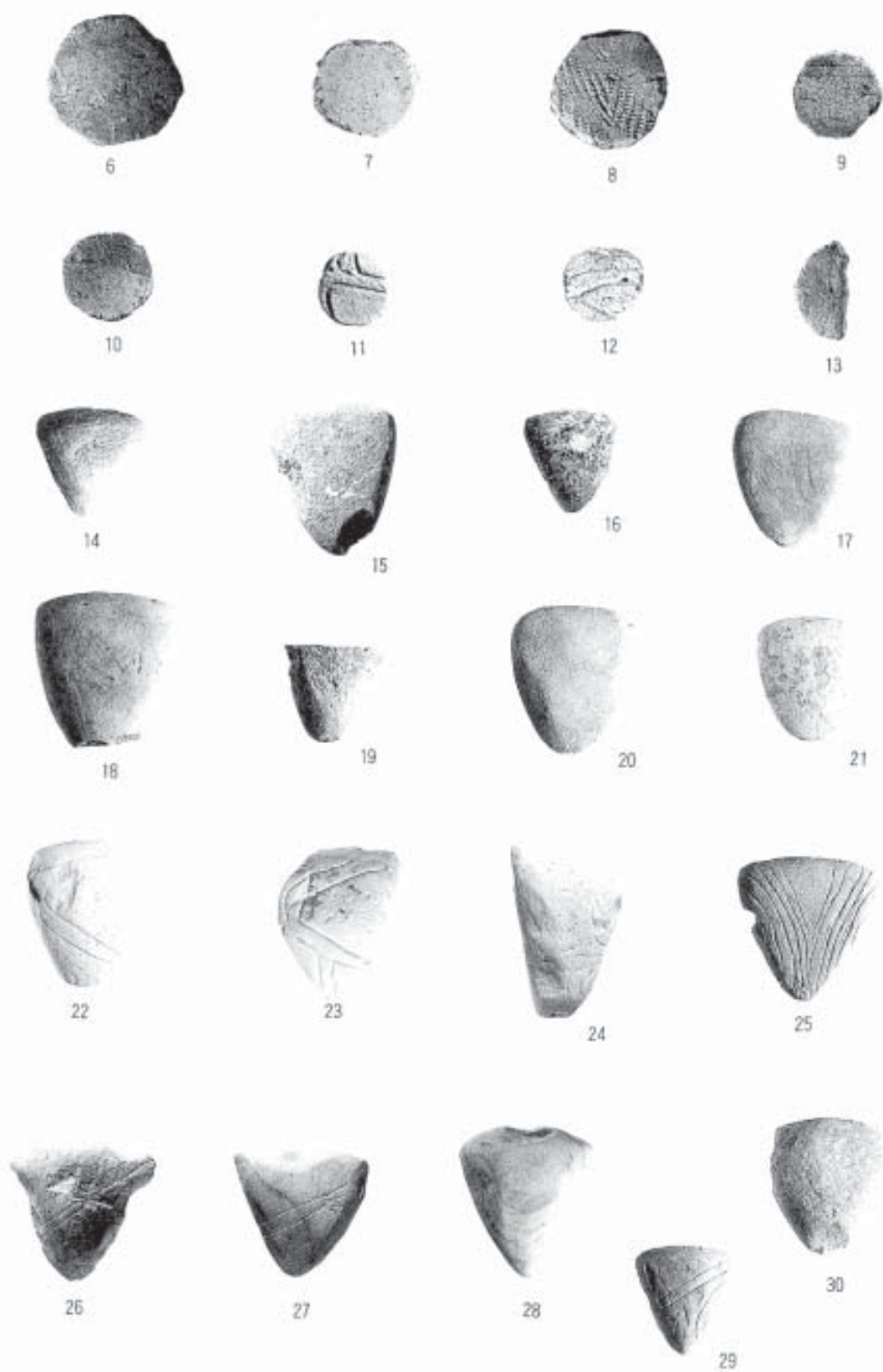


写真 19 遺構外出土遺物（土製品・石製品 2）

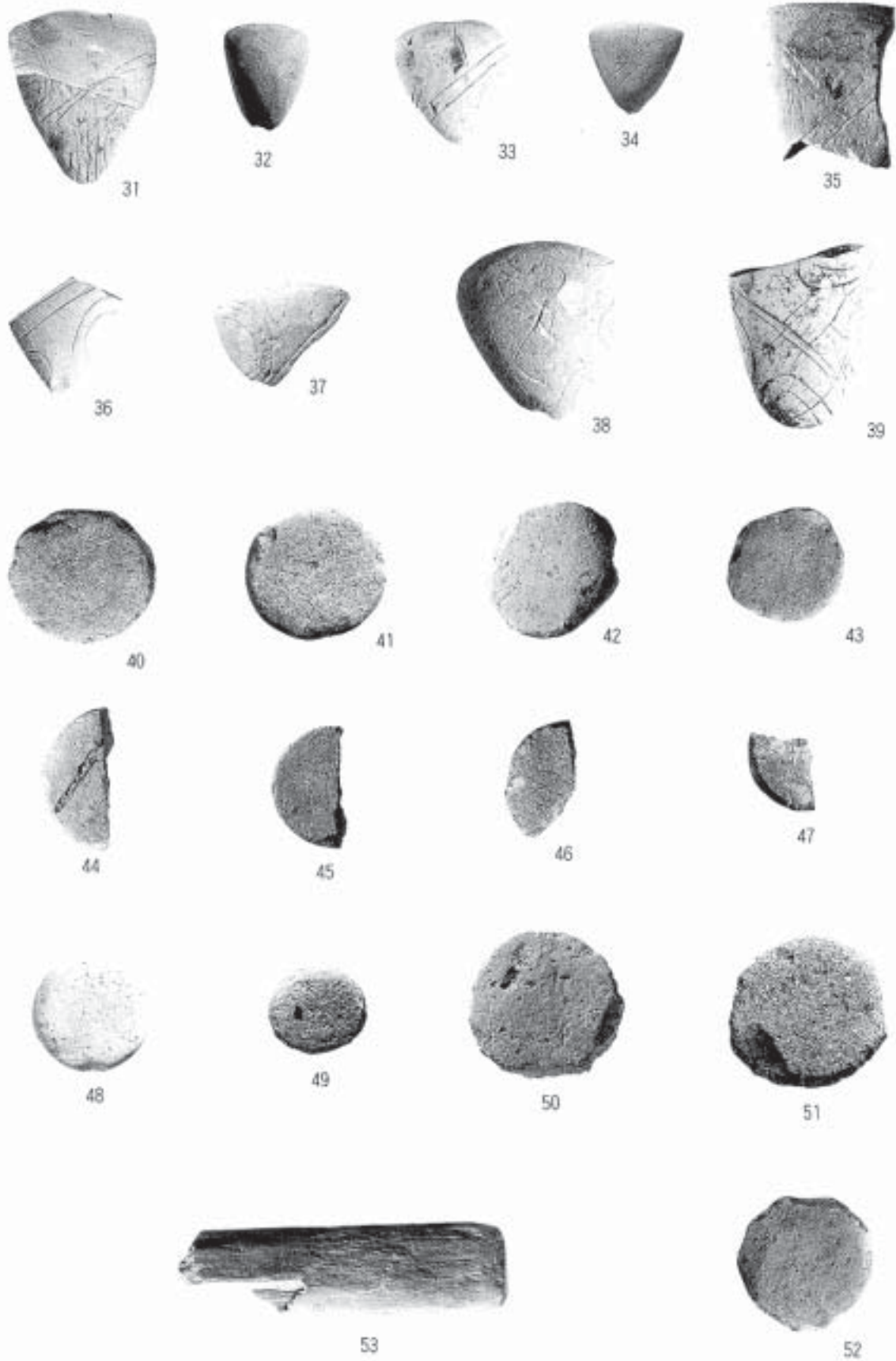


写真 20 遺構外出土遺物（土製品・石製品 3）

Uトレンチ



ABトレンチ



Uトレンチ・1H



ACTトレンチ・1H

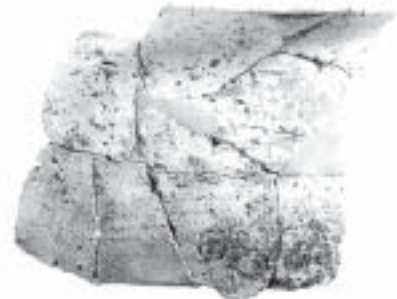
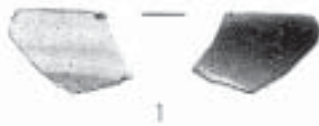
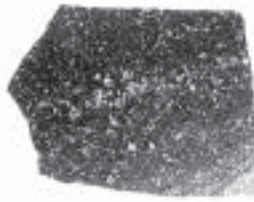


写真 21 弥生・続縄文時代および平安時代の遺物



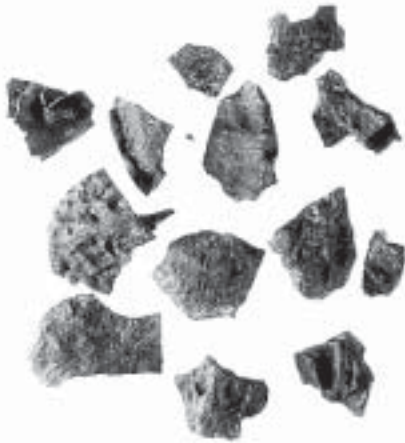
分析No. 6



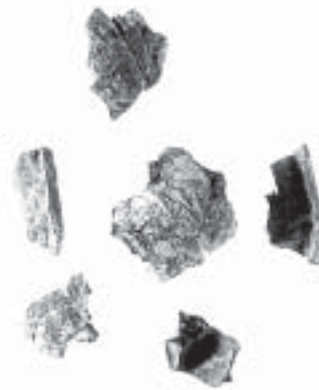
分析No. 7



分析No. 8



Fトレンチ第1号住居跡(焼土)
S=1:1



第1号溝状遺構内(焼土)
S=1:1

写真 22 須恵器分析資料および炭化物

報告書抄録

ふりがな	こまきのいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	小牧野遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	児玉大成、伊東信							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-855 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
こまきの野	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 のざわあざこまきの 野沢字小牧野	02201	176	40° 43 53	140° 44 5	19980727 、 19981110	1,259	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小牧野遺跡	集落跡	縄文時代	居住施設		2棟		土器 石器 土製品 石製品	いずれも環 状列石構築 期直前の時 期
			縦穴式住居跡		1軒			
			焼土遺構		1基			
			溝状遺構		2条			
小ピット		1基						
土坑		8基						
遺物集中ブロック		1ヶ所						
散布地	弥生					土器		
集落跡	平安時代	縦穴式住居跡		3軒		土師器・須恵器		
道路跡	縄文～平安 時代および 近現代	道路状遺構 その他の土壌硬化面		10ヶ所 1ヶ所		層位的に時 代を特定で きるものは 少ない。		

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蚩沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集		1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第46集	1999	『野木新町野遺跡発掘調査概報』
〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第45集

小牧野遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 11 年 3 月 31 日

発行 青森市教育委員会

〒030 - 8555 青森市中央一丁目22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 青森オフセット印刷株式会社

〒030 - 0802 青森市本町二丁目11 - 16

TEL 0177 - 75 - 1431